児玉町文化財調査報告書　第16集

平塚・左口・児玉条里遺跡

町内遺跡発掘調査に伴う発掘調査報告書11

埼玉県児玉郡児玉町教育委員会

児玉町文化財調査報告書　第16集

平塚（ひらつか）・左口（さぐち）・児玉条里（こだまじょうり）遺跡

町内遺跡発掘調査に伴う発掘調査報告書11

1994

埼玉県児玉郡児玉町教育委員会

序

昨今、全国規模で、埋蔵文化財の調査がおこなわれ、貴重な発見が次々に報告されています。私たちの郷土である児玉町も例外ではなく、先土器時代から近代に至るまでの貴重な埋蔵文化財が数多く発見されています。これらは児玉町に生きた祖先たちの生活の歴史であります。

今回、県営圃場整備事業事前調査にともない発見された古墳時代をはじめとする埋蔵文化財も私たちの歴史を知る上での貴重な資料です。これらの文化財を現状のまま保存し、後世に伝え残してゆくことは私たちの重要な責務であると考えております。しかし、一方では開発による現代生活の向上もまた子孫に残さなければならない責務であります。そこで、今回の調査は記録保存という形によって、後世に残すことにいたしました。

このたび、本報告書が刊行出来ましたことは、町民の皆様をはじめ、本庄土地改良事務所ならびに関係諸機関のあたたかいご理解とご協力の賜であり、深く感謝するものであります。

この報告書が私たちの祖先の歴史を解明するための資料の一つとして、今後活用されれば幸甚でございます。

平成６年３月10日

児玉町教育委員会
教育長　冨 丘 文 雄

例　言

1、本書は、埼玉県児玉郡児玉町大字下真下字平塚、同大字蛭川字左口ほかに所在する平塚遺跡、左口遺跡、児玉条里遺跡の発掘調査報告書である。

2、発掘調査は、県営圃場整備事業（児玉北部地区）に先立つ町内遺跡群保存事業として、昭和62年度および昭和63年度に児玉町教育委員会が実施したものである。

3、発掘調査および整理・報告書に要した経費は、町費・国庫補助金・県費補助金（埼玉県教育委員会）および委託金（埼玉県）である。

4、発掘調査の担当は、平塚遺跡、左口遺跡、児玉条里遺跡、共に鈴木徳雄があたった。

5、本書の編集は、整理参加者の協力を得て徳山寿樹が行い、執筆分担については、各文末に記した。なお、平塚遺跡で検出されている縄文時代の遺構および遺物等については紙幅の都合で次年度報告する予定である。

6、発掘調査及び本書作成にあたって下記の方々や機関から御助言・御協力を賜った。（順不同、敬称略）

浅野春樹、池田敏宏、石岡憲雄、市川　修、梅沢太久夫、江原　英、太田博之、大屋道則、尾崎美砂、金子彰男、雉岡恵一、小宮山克己、坂本和俊、篠崎　潔、外尾常人、高橋一夫、高村敏則、田村　誠、千装　智、利根川章彦、長滝歳康、長谷川　勇、平田重之、増田一裕、丸山　修、水村孝行、宮本直樹、矢内　勲、山口逸弘、埼玉県教育局文化財保護課、児玉郡市文化財担当者会、東海大学考古学研究会

7、本書作成の主な作業分担は、次のとおりである。

土器接合・復元（新井千都子、倉林八重子、白石敏子、中原好子、野沢公代）
土器復元ほか（田口照代、林　和代）
土器観察・実測（村上泰司、大屋道則）
遺構原図操作（新井嘉人、大熊季広、尾内俊彦）
トレース（倉林八重子、中原好子）
本文レイアウト（徳山寿樹、白石敏子）
遺物写真（尾内俊彦、大屋道則）

発掘調査の組織

昭和62年度（発掘調査）

調査主体　児玉町教育委員会

事 務 局　児玉町教育委員会社会教育課

課長	中林　重
課長補佐	立花　勲
係長	前川由雄
主事	金子幸弘
主事	渋谷路子
主事	恋河内昭彦

担 当 者　主事　鈴木徳雄

補 助 員　徳山寿樹、尾内俊彦、大屋道則

昭和63年度（発掘調査）

調査主体　児玉町教育委員会

事 務 局　児玉町教育委員会社会教育課

課長	吉川　豊
課長補佐	立花　勲
係長	前川由雄
主事	金子幸弘
主事	渋谷路子
主事	恋河内昭彦

担 当 者　主事　鈴木徳雄

補 助 員　徳山寿樹、尾内俊彦、大屋道則

平成５年度（整理）

調査主体　児玉町教育委員会

事 務 局　児玉町教育委員会社会教育課

課長	大塚　勲
課長補佐	吉川敏男
係長	清水　満
主任	田島賢二
主事	倉林美恵子
主事	恋河内昭彦

担 当 者　主任　鈴木徳雄

主事　徳山寿樹

補助員等　尾内俊彦、村上泰司、大熊季広

目　次

序
例言
目次

第Ⅰ章　発掘調査の経緯……1
第Ⅱ章　遺跡の地理的・歴史的環境……3
　1．地理的環境
　2．歴史的環境

第Ⅲ章　平塚遺跡の調査……5
　1．遺跡の概要
　2．基本土層
　3．遺構の概要

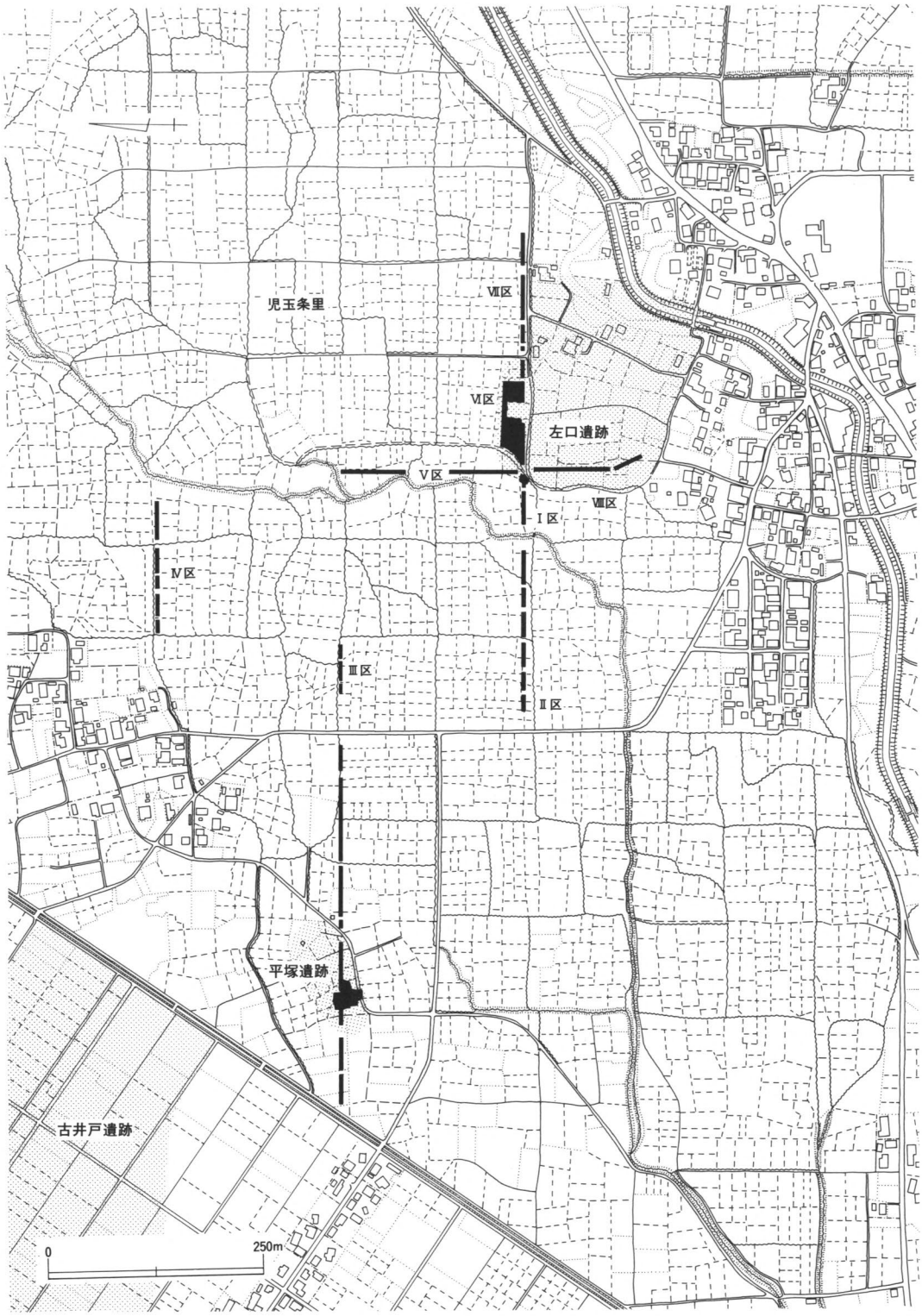
第Ⅳ章　左口遺跡の調査……37
　1．遺跡の概要
　2．基本土層
　3．遺構の概要

第Ⅴ章　児玉条里遺跡の調査……73
　1．調査の概要
　2．遺構の概要

第Ⅵ章　平塚遺跡出土の遺物の概要……77
　1．土師器について
　2．石製模造品について

第Ⅶ章　まとめ……80

写真図版



第１図　平塚・左口・児玉条里遺跡調査位置図（児玉町役場1969）

第Ⅰ章　発掘調査の経緯

本報告に関わる発掘調査は、昭和62年度～昭和63年度の県営圃場整備事業（児玉北部地区）に先立つ埋蔵文化財保存事業として実施したものである。以下、埋蔵文化財の保護に関わる協議・調整の経過と発掘調査の経緯についてその概略を記す。

県営圃場整備事業（児玉地区）内に所在する埋蔵文化財包蔵地の所在及び取扱いについて、昭和59年６月埼玉県農林部耕地課から埼玉県教育局指導部文化財保護課宛に協議があり、同年８月に耕地課宛に回答された。また、同年９月、児玉町長より児玉町教育委員会宛に埋蔵文化財の所在についての照会があり、県文化財保護課の回答に基づき児玉町にかかる区域において約41箇所の周知の埋蔵文化財包蔵地が所在する旨を回答した。さらに、昭和59年９月、埋蔵文化財の保護について町教育委員会、埼玉県本庄土地改良事務所および県文化財保護課による事前協議を行った。

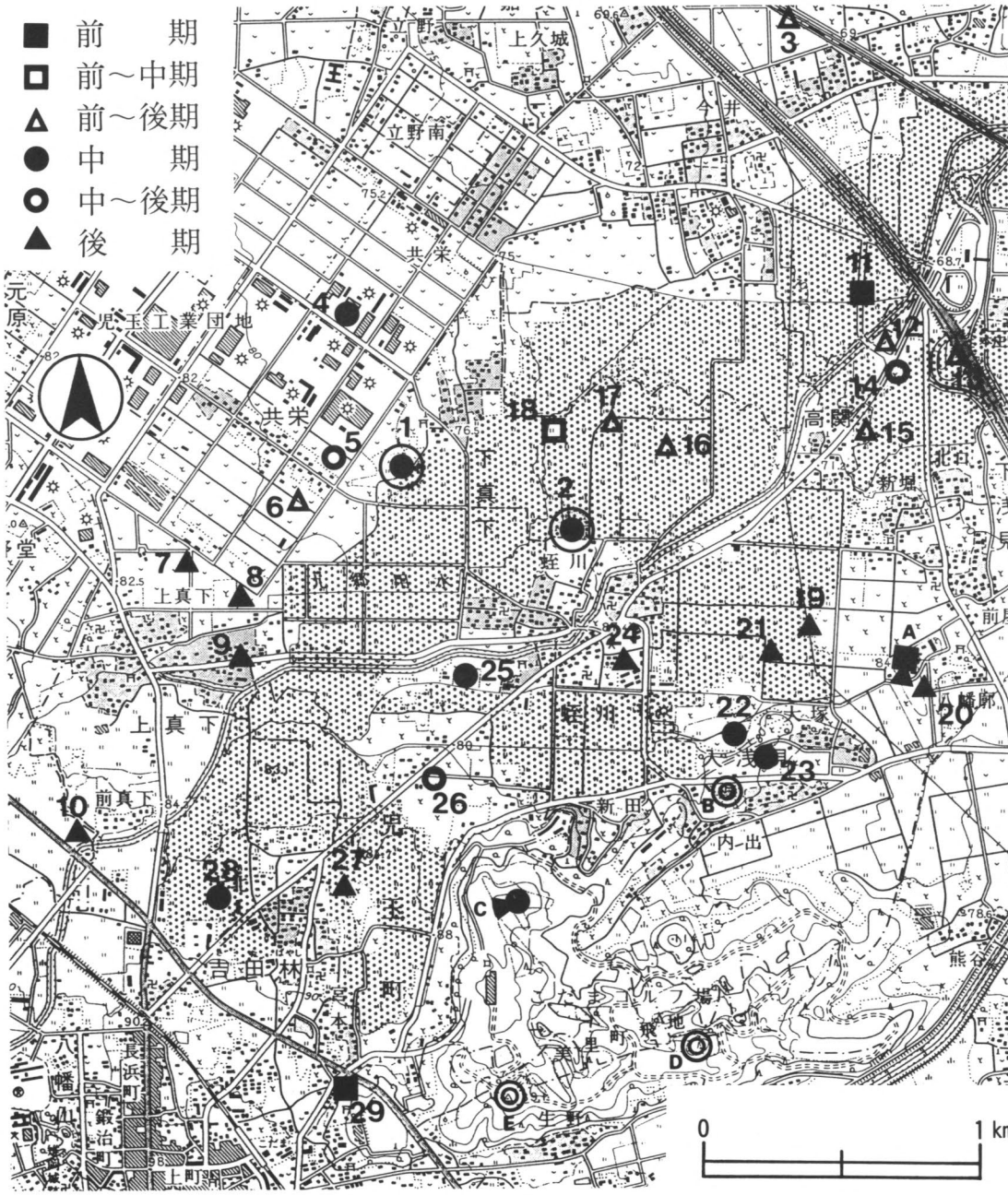
昭和62年度事業については、上記の事前協議に基づき県文化財保護課、県耕地課、本庄土地改良事務所及び町教育委員会が昭和61年12月打ち合せ会議を行った。昭和62年度工区には、『埼玉県遺跡地図』児玉県№54―024に相当する平塚遺跡および児玉条里遺跡（№54―285）があり、やむをえず現状変更される約2,400㎡について発掘調査による記録保存の措置をとることになった。

児玉町教育委員会より昭和62年11月１日付児教社第279号で発掘調査通知を埼玉県教育委員会に進達した。文化庁からは昭和63年７月８日付63委保記第２―2046号をもって発掘調査通知書の受理について通知があった。昭和62年度の発掘調査に関わる事業実施期間は、昭和62年７月31日から昭和63年３月31日である。

昭和63年度事業については、昭和62年12月、本庄土地改良事務所、町教育委員会は埋蔵文化財の取扱についての事前協議を行い、さらに県文化財保護課、県耕地課を交えて調整が実施された。この区域は、『埼玉県遺跡地図』児玉町№54―020に相当する左口遺跡及び児玉条里遺跡（№54―285）等の周知の埋蔵文化財包蔵地が確認されており、協議に基づいて、やむをえず現状変更される約2,800㎡について発掘調査による記録保存の措置をとることになった。

児玉町教育委員会より昭和63年６月20日付児教社第98号で発掘調査通知を埼玉県教育委員会に進達した。文化庁からは平成元年１月18日付63委保記第２―5622号をもって発掘調査通知書の受理について通知があった。昭和63年度の発掘調査に関わる事業実施期間は、昭和63年６月27日から平成元年３月31日である。

（事 務 局）



1：平塚遺跡（本報告）　2：左口遺跡（本報告）　3：諏訪遺跡（柿沼他　1979）　4：古井戸遺跡（井上他　1986）　5：古井戸南遺跡（1984年調査）　6：塚畠遺跡（鈴木他　1991）　7：辻ノ内遺跡（鈴木他　1991）　8：新宮遺跡（1991年調査）　9：上真下東遺跡　10：金佐奈遺跡（1992年調査）　11：一丁田遺跡（富田他　1985）　12：川越田遺跡（富田他　1985・恋河内　1993）　13：後張遺跡（立石他　1982・83）　14：梅沢遺跡（富田他　1985）15：東牧西分遺跡（1988年調査）　16：柿島遺跡（1989年調査）　17：藤塚遺跡（1989年調査）　18：堀向遺跡（1988年調査）　19：浅見境遺跡・浅見境北遺跡（1986年調査・1992年調査）　20：鷲山南遺跡（1983年調査）　21：東田遺跡（1992年調査）　22：城の内遺跡（1991年調査）　23：新屋敷遺跡（1989年調査）　24：共和小学校校庭遺跡（恋河内　1989）　25：蛭川坊田遺跡（1990年調査）　26：南街道遺跡（1991年調査）　27：宮田遺跡（1991年調査）　28：高縄田遺跡（1988年調査）　29：御林下遺跡（1987年調査）
A：鷲山古墳　B：金鑽神社古墳　C：生野山銚子塚古墳　D：生野山将軍塚古墳　E：物見塚古墳

第２図　周辺の古墳時代主要遺跡

第Ⅱ章　遺跡の地理的・歴史的環境

1．地理的環境

本報告の各遺跡は、平塚遺跡が児玉町大字下真下字平塚に、左口遺跡が同町大字蛭川字左口に、児玉条里遺跡が同町大字下真下・上真下・蛭川を中心として所在し、本町北西部に位置する。これらの遺跡をとりまく周辺の地理的環境を概観してみると、遺跡の南西側には秩父山地から連なる上武山地が南西から北東へと展開し、この北東山麓からは児玉丘陵・松久丘陵が北東へと半島状に張り出している。さらにこれらの丘陵に連なるように生野山丘陵・大久保山丘陵、諏訪山丘陵・山崎山丘陵が各々残丘状に点在する。この児玉丘陵の北東側には本庄台地がさらに北東へと広がりをみせている。台地の南西部と生野山丘陵・大久保山丘陵の間は上武山地と児玉丘陵・松久丘陵の間の八王子―高崎構造線断層崖下付近から流れ出す女堀川により開析された低地となっており、南西から北東にかけて帯状に延びているが、生野山丘陵・大久保山丘陵周辺は開析を受けず台地面が残っている。また、この低地帯の中には自然堤防や微高地も存在し、前者は女堀川に沿うように線状に、後者は生野山丘陵・大久保山丘陵周辺に多く点在している。このような地理的環境の中で、本報告の遺跡は本庄台地東側縁辺部とそれらの南東側に展開する低地帯及び自然堤防上に占地している。

2．歴史的環境

古墳時代前期の集落は、本庄台地縁辺部に諏訪遺跡（柿沼、1979）、塚畠遺跡（鈴木他、1991）、自然堤防上に後張遺跡（増田、1977・立石、1982）、また同一集落と考えられている川越田遺跡（富田他、1985・恋河内、1993）・梅沢遺跡（富田他、1985）、その他に下田遺跡（柿沼他、1979）、七色塚遺跡（増田、1987）、東牧西分遺跡（1988年調査）、四方田遺跡（増田、1989）、生野山丘陵周辺の微高地には御林下遺跡（1987年調査）、大久保山丘陵裾部や周辺の台地には雷電下遺跡（駒宮他、1979）・飯玉東遺跡（駒宮他、1979）・浅見境北遺跡（1992年調査）が存在する。これらの遺跡は、弥生時代後期の集落の立地が丘陵部を主体に営まれていたのに対し、台地縁辺部・自然堤防上に積極的に進出して低地帯の谷や湿地を開発し、生産基盤としていたものと思われる。また、扇状地という地形的特徴から河川の表流水は少なく、その大半は伏流していたと思われ、後張遺跡・本庄市一丁田遺跡（富田他、1985）、美里町日の森遺跡（菅谷他、1978）、北貝戸遺跡（菅谷他、1977）、岡部町地神祇A・石蒔B遺跡（佐藤、1978）、西浦北遺跡（佐藤、1979）のような用水路と考えられる溝も検出されており、低地への進出・開発と用水路の開削といった背景には在地首長により労働力が掌握されていたことが推察され、生野山丘陵・大久保山丘陵の間に位置する残丘上

には県内最古とされる全長約60mの前方後方墳の鷺山古墳（坂本他、1986）が築かれている。

古墳時代中期の集落は、前期とほぼ同じ様相を呈するが、自然堤防上の後張遺跡、辻堂遺跡（1990年調査）、南街道遺跡（1991年調査）といった大規模集落、同高縄田遺跡（1988年調査）と台地上・台地縁辺部の古井戸遺跡（井上他、1986）や古井戸南遺跡（1984年調査）、蛭川坊田遺跡（1990年調査）、平塚遺跡（本報告）また、生野山丘陵・大久保山丘陵裾部や周辺の台地縁辺部あるいは微高地には東谷遺跡（柿沼他、1978）、新屋敷遺跡（1989年調査）、根田遺跡（恋河内、1990）、山根遺跡（増田、1990）、城の内遺跡（1991年調査）などが存在し、遺跡数が増加する。特に古井戸遺跡、高縄田遺跡、蛭川坊田遺跡、平塚遺跡、新屋敷遺跡、城の内遺跡、根田遺跡は和泉式期単一の集落でありこの時期の集落のあり方として注目すべき点である。また、用水路の開削も前期に比べより低地へと進み高縄田遺跡、蛭川坊田遺跡では比較的規模の大きな直線状のものが検出されている。この時期には、生野山丘陵北側の支丘陵の先端に周溝外径約100m、同内径約68mを測る円墳の金鑽神社古墳（坂本他、1986）が、生野山丘陵南部には径約60mを測る円墳の生野山将軍塚古墳（柳田、1964）、塚本山の北側の台地には周溝外径96m、同内径65mを測る円墳の公卿塚古墳（坂本他、1986・太田、1991）といった首長墓と思われる大形円墳が近接して築かれているが、他の古墳や立地から各々は別々の系統のものと考えられている。

古墳時代後期の集落は、古墳時代の中で最も遺跡数が増える時期である。本庄台地上・縁辺部には前代から継続的に営まれる諏訪遺跡、古井戸南遺跡、塚畠遺跡の他に辻ノ内遺跡（鈴木他、1991）、新宮遺跡（1991年調査）、上真下東遺跡が、自然堤防上では後張遺跡、川越田遺跡、梅沢遺跡、東牧西分遺跡、辻堂遺跡、南街道遺跡、四方田遺跡、下田遺跡、七色塚遺跡の他に共和小学校校庭遺跡（恋河内、1989）、宮田遺跡（1991年調査）、金佐奈遺跡（1992年調査）が、生野山丘陵・大久保山丘陵裾部とその周辺の台地または微高地では山根遺跡、東谷遺跡、浅見境北遺跡の他に鷺山南遺跡（1983年調査）、浅見境遺跡（1986年調査）、東田遺跡（1992年調査）、そして雷電下遺跡でも新たに集落が営まれるようになる。これらのうち自然堤防上の集落は、後期終末になると断絶し台地縁辺部や残丘裾部や周辺の微高地、また丘陵部に移動する傾向にある。この時期の首長墓は前代の円墳にかわり前方後円墳が築かれるようになり、生野山丘陵の生野山銚子塚古墳・生野山16号墳はともに全長約58mを測り、当地域最大級のものである。その後、当丘陵には生野山古墳群（菅谷他、1973）、大久保山丘陵の南側には塚本山古墳群（増田、1977）といった比較的規模の小さな円墳が継続的に造られ、群集墳を形成するようになる。（大熊季広）

第Ⅲ章　平塚遺跡の調査

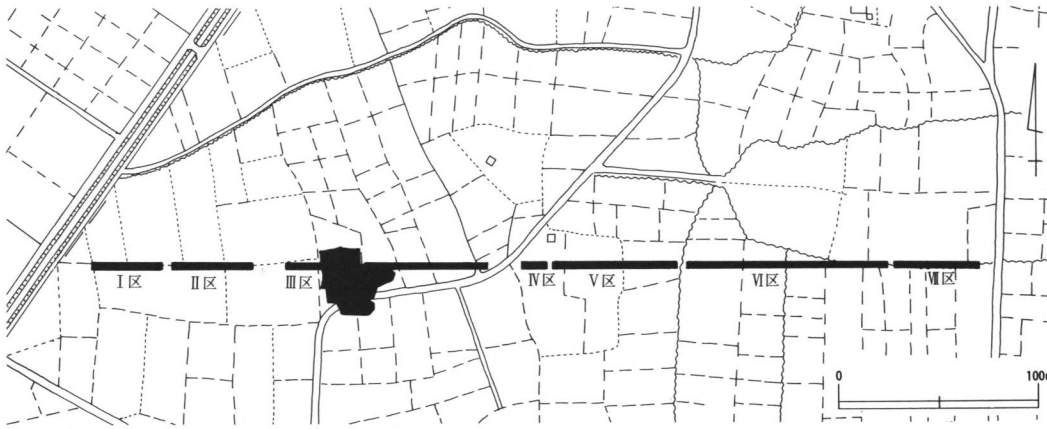
1．遺跡の概要

本遺跡は、埼玉県遺跡地図№54－024に該当しており、遺跡が占地している小字名から平塚遺跡と呼称する。

遺跡の立地は、本庄台地の縁辺部から低地部にあたり特に遺跡の主体を占めている集落跡は、台地縁辺部にあたる微高地に占地している。現状の地形は、微高地から低地部への地形変化が緩やかでありその違いは不明瞭であるが、土地利用の相違を観ると微高地部は桑畑であり低地部は水田というように明瞭な違いを見せている。

本遺跡からは、古墳時代中期（和泉期）の竪穴式住居址７軒および平安時代以降の竪穴状遺構１基、縄文時代中期（加曽利ＥⅢ式）および古墳時代中期（和泉期）等の土坑10基、古墳時代中期（和泉期）の垣状遺構１列、埋没谷２本、河川跡等が検出されている。特に垣状遺構は微高地上に占地している集落の外縁にあたり同時にそれは古墳時代中期においての低地部との境にもあたっている。このほか埋没谷の堆積層からは、６世紀初頭に降灰したとされる榛名二ッ岳渋川軽石（Hr－FA）層を確認している。またこれらの遺構からは加曽利ＥⅢ式、和泉式、国分式などの土器片や須恵器片のほか、石器などが出土している。

調査区は、新設する水路の西側を起点にして現状の農道や水路を境に第Ⅰ区から第Ⅶ区を設定した。調査区域は、当初幅２ｍで調査を行う計画であったが、表土剝ぎの際古墳時代中期の集落跡を検出した第Ⅲ区付近の表土が著しく浅いことが判明し、圃場整備工事の際に遺構が破壊される恐れがあった為第Ⅲ区の一部を拡張して調査を行った。

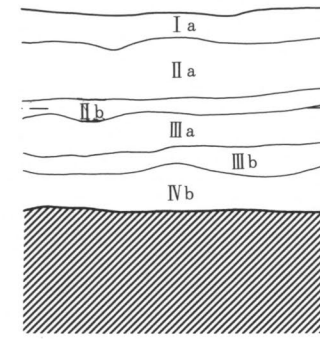


第３図　平塚遺跡調査位置図

2．基本土層（第４図）

図に示した土層は、本遺跡の第Ⅴ区から第Ⅶ区にかけての低地部における基本土層図である。微高地については、開墾が進み耕作土層の直下は、ハードローム面であり、ローム層の上部にあたるＹ．Ｐ混入層は、削り取られている状況であった。

No.1（第６図）



基本土層説明

第Ⅰａ層　灰色土　（As－A）を含む。
現代の耕作土層

第Ⅰｂ層　灰色土　（As－A）を含む。鉄分の沈澱が多い。
現代の水田床土層

第Ⅱａ層　灰色土　（As－A）を含む。鉄分の染みが若干認められる。
近世の耕作土層

第Ⅱｂ層　灰色土　（As－A）と鉄分を多く含む。
近世の耕作土と水田床の互層

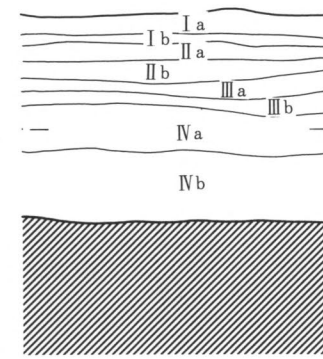
第Ⅲａ層　灰黒色土　粘性が強く、かつ砂質に富む。
（As－A）を多く、鉄分の染み・炭化物粒子を若干含む。
古代水田土層

第Ⅲｂ層　灰黒色土　第Ⅲａ層に準ずるが、鉄分の染みが第Ⅲａ層より少ない。
古代水田土層

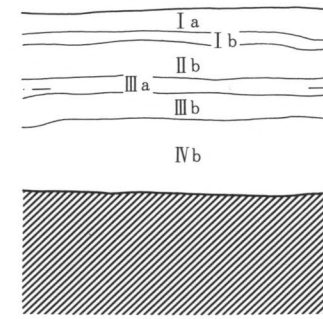
第Ⅳａ層　灰黒色土　鉄分の染みが多い。
基盤粘質土層

第Ⅳｂ層　灰黒色土　マンガン凝集粒（径約２～５㎜）を多く含む。
基盤粘質土層

No.2（第６図）



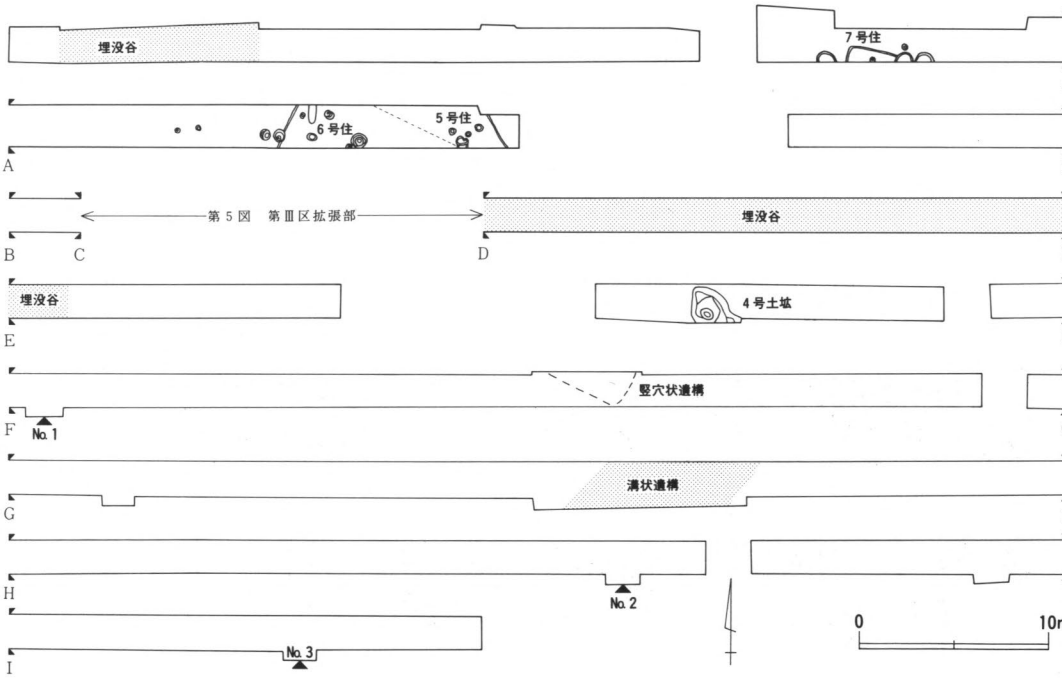
No.3（第６図）



(As－A)　浅間山系Ａ軽石
(As－B)　浅間山系Ｂ軽石
(Hr－FA)　榛名二ッ岳渋川軽石
(As－Ｙ．P)　浅間－板鼻黄色軽石

第４図　平塚遺跡基本土層

第5図　第Ⅲ区拡張部全測図



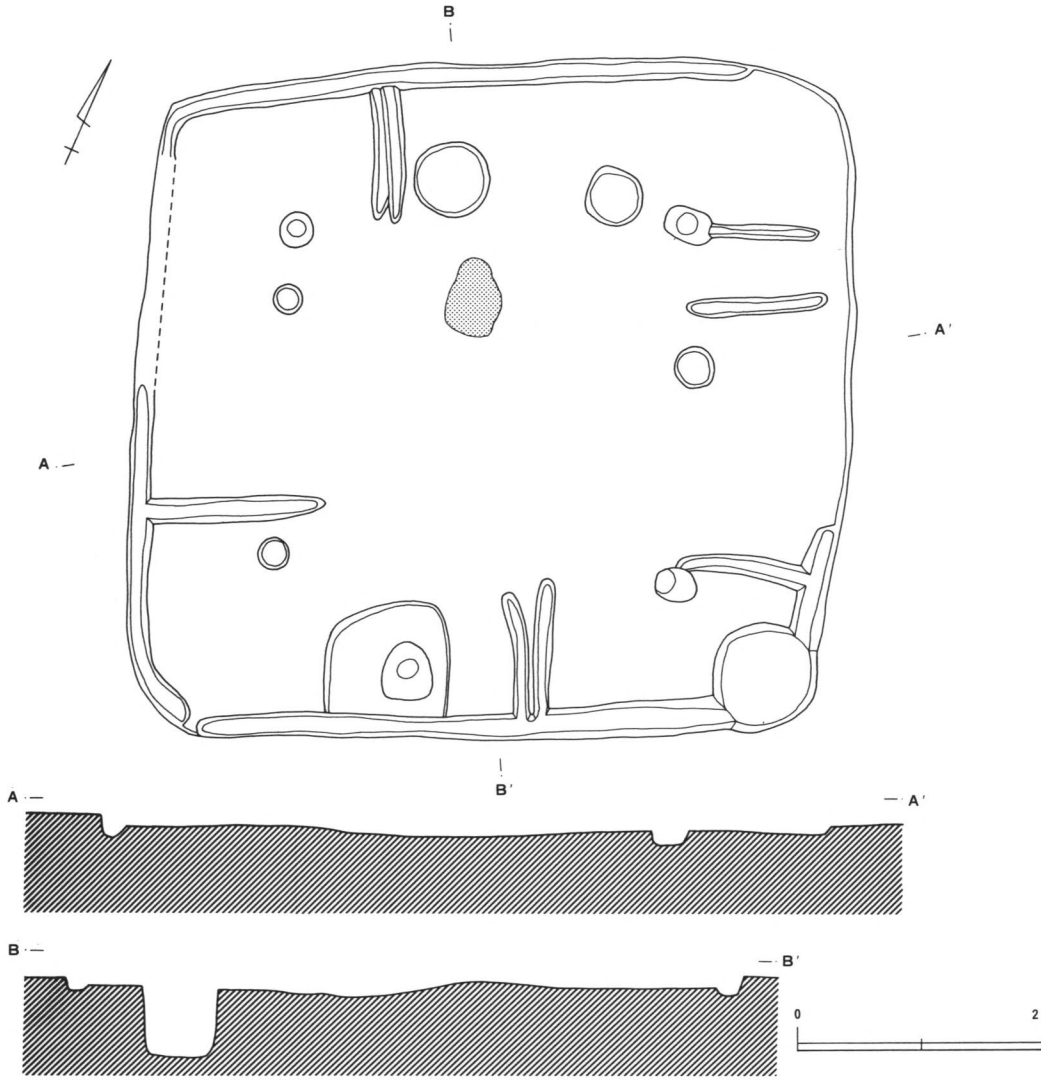
第6図　平塚遺跡全測図

3．遺構の概要

a．竪穴式住居址

第１号住居址（第７図、図版１－１）

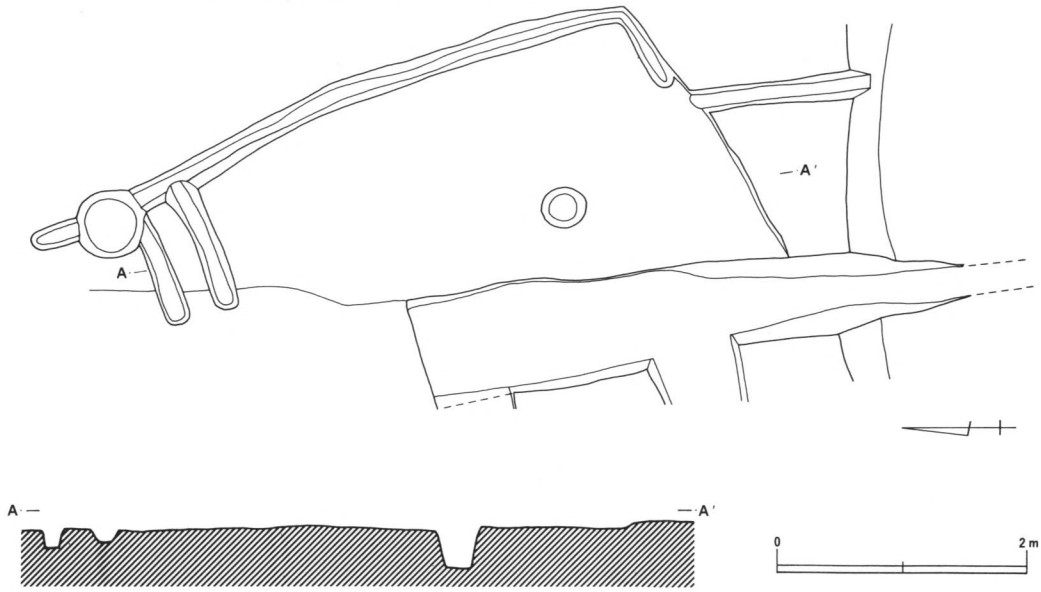
本址は、第Ⅲ区の北西側に検出された。住居址の平面形態は一辺約5.8mの正方形を呈しており、壁高は約11cmを測る。炉址は北側を支える主柱穴間の中央部よりやや南よりに位置している。北東側の一部を除いて壁溝が巡っており、途中で分かれた支溝が間仕切り状を呈している。貯蔵穴は南西付近に位置している。出土遺物により古墳時代中期（和泉期）の所産である。



第７図　第１号住居址

第２号住居址（第８図、図版１－２）

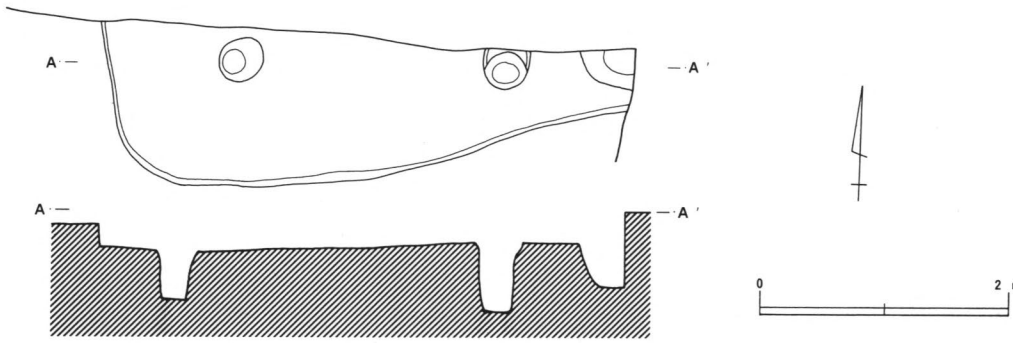
本址は、第Ⅲ区の西端に検出された。平面形態は一辺約5.2mの方形を呈していると予想されるが西側の南北にかけて攪乱が酷く調査は全体の約３割程度に留まった。壁高は約７cmを測る。西壁に壁溝と間仕切り状の溝が検出されており、その一部は住居外に南進して排水溝状を呈している。出土遺物により古墳時代中期（和泉期）の所産である。



第８図　第２号住居址

第３号住居址（第９図、図版２－１）

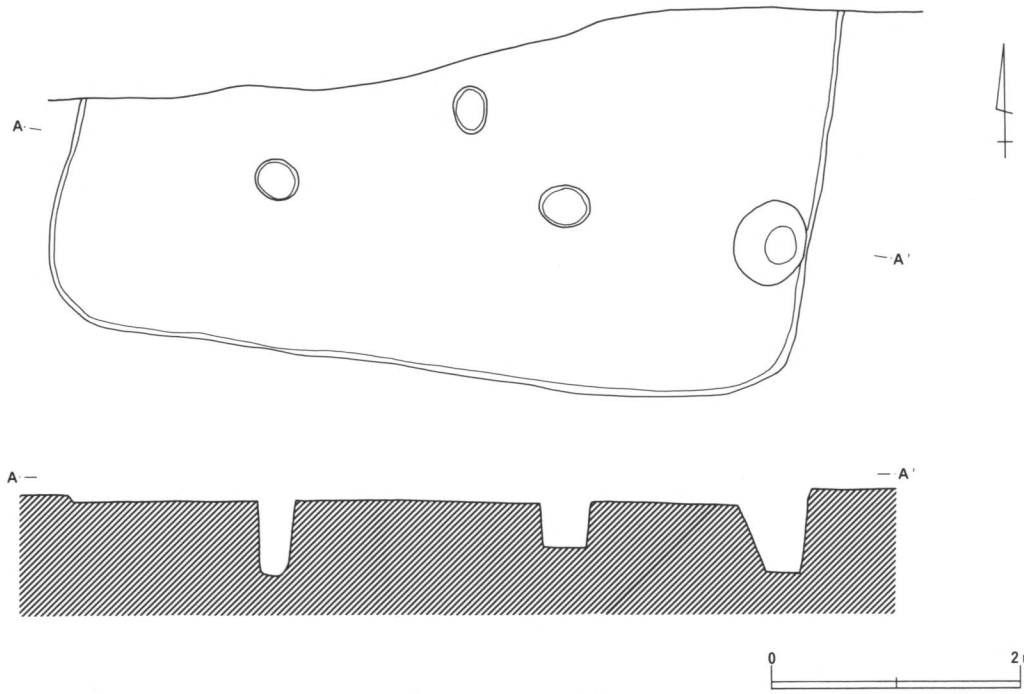
本址は、第Ⅲ区の北隅に検出された。遺構の大部分は調査区外に在るため、調査は全体の約２割程度に留まった。平面形態は不明であるが、周辺の状況から判断して方形を呈すると予想される。壁高は約17cmを測る。壁溝は、確認できなかったが南西側の主柱穴１本が検出されている。出土遺物により古墳時代中期（和泉期）の所産である。



第９図　第３号住居址

第４号住居址（第10図、図版２－２）

本址は、第Ⅲ区の北西側に検出された。平面形態は一辺が約5.8mの方形を呈していると予想されるが、北側約半分が調査区外に在るため、調査は全体の約５割程度を行った。壁溝は確認できなかったが、南側の主柱穴２本が検出されている。壁高は10cmを測る。出土遺物により古墳時代中期（和泉期）の所産であるが、第１～３号住居址とは住居の主軸方向が異なる。



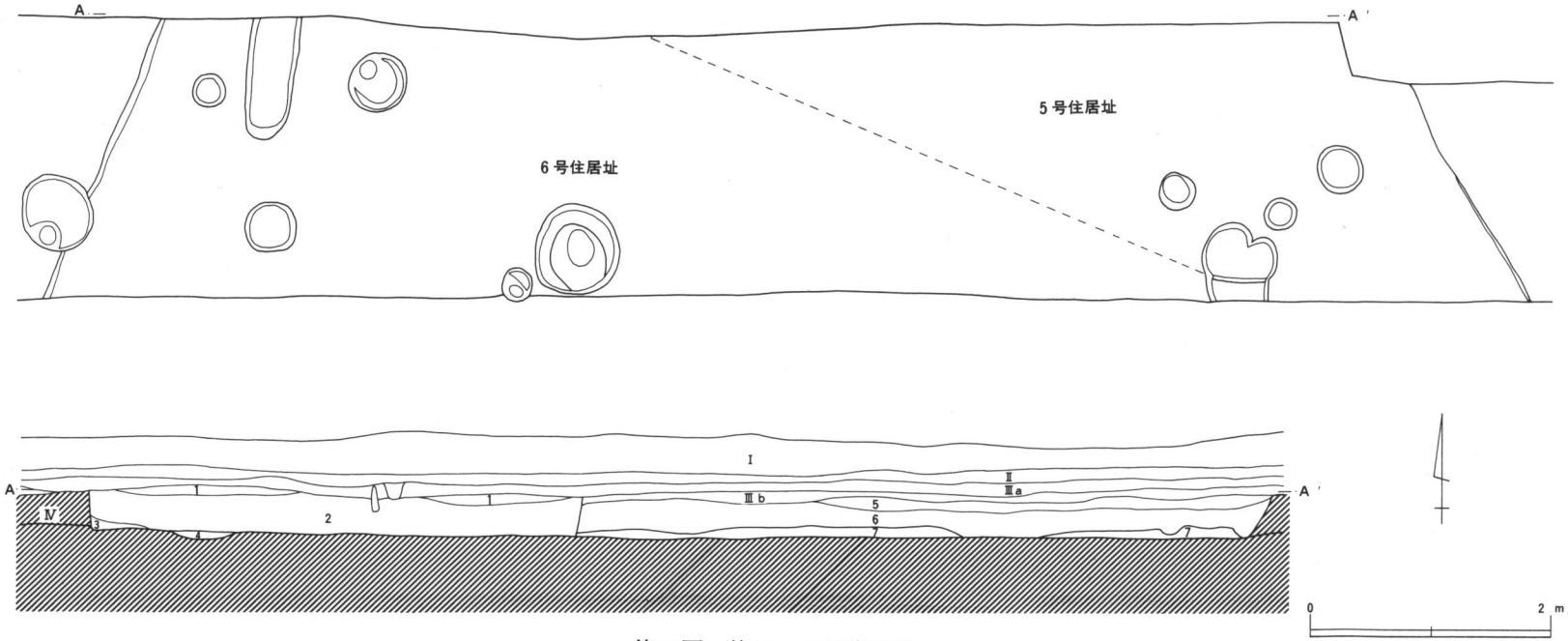
第10図　第４号住居址

第５号住居址（第11図、図版３－１）

本址は、第Ⅱ区の東側に検出された。遺構の西側の大部分は、第６号住居址に切られているため、調査は約２割程度に留まった。平面形態は不明であるが、周辺の状況から判断して方形を呈すると予想される。壁高は38cmを測る。断面観察により、東側には壁溝が検出され、床は貼床状を呈していた。出土遺物は、和泉式の土器片が出土しており、古墳時代中期（和泉期）の所産であると推定される。

第６号住居址（第11図、図版３－１）

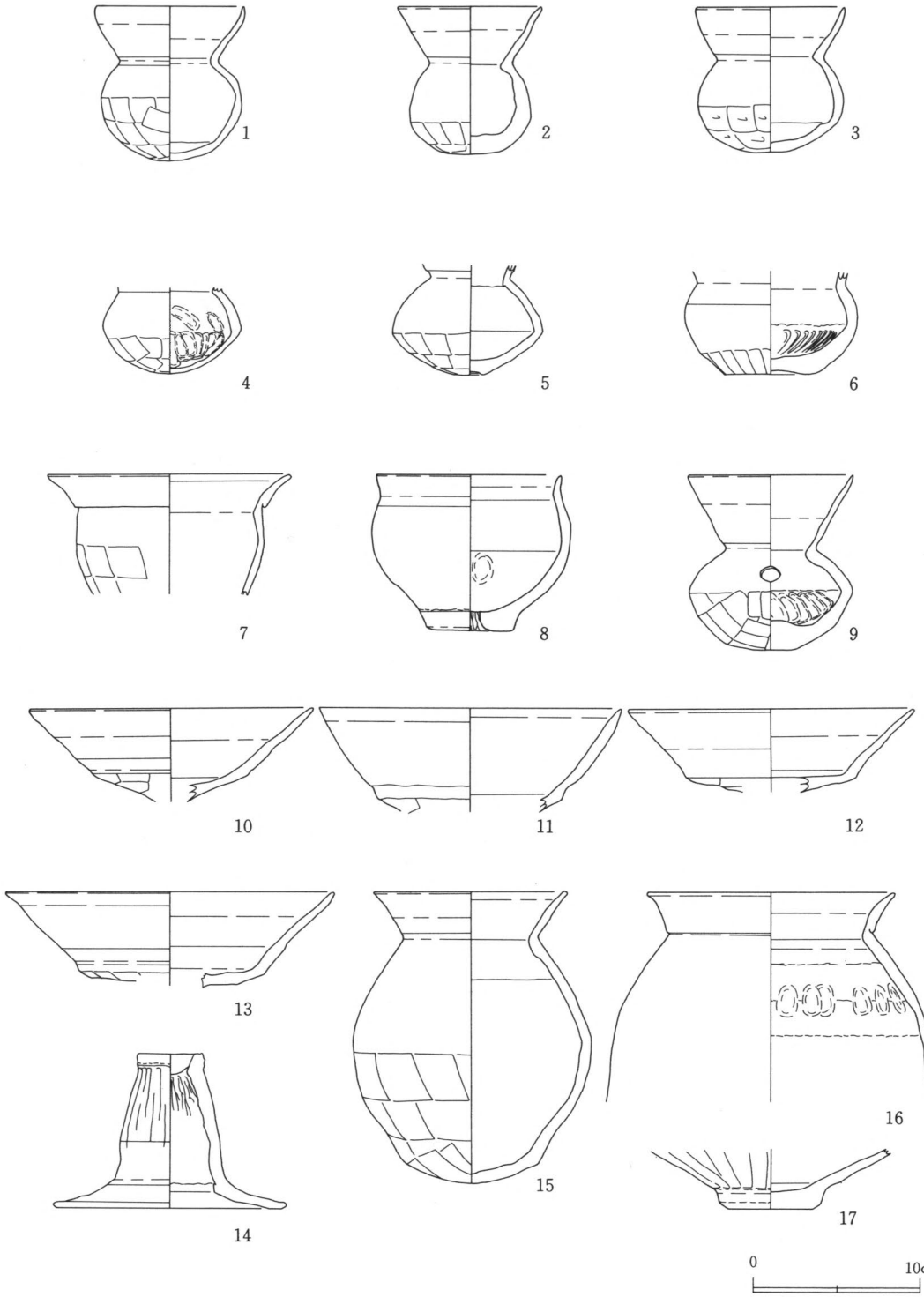
本址は、第Ⅱ区の東側に検出され、第５号住居の西側を切って構築されている。住居の平面形態は不明であるが、周辺の状況から判断して方形を呈すると予想される。壁高は40cmを測る。壁溝は検出されなかった。出土遺物により古墳時代中期（和泉期）の所産である。



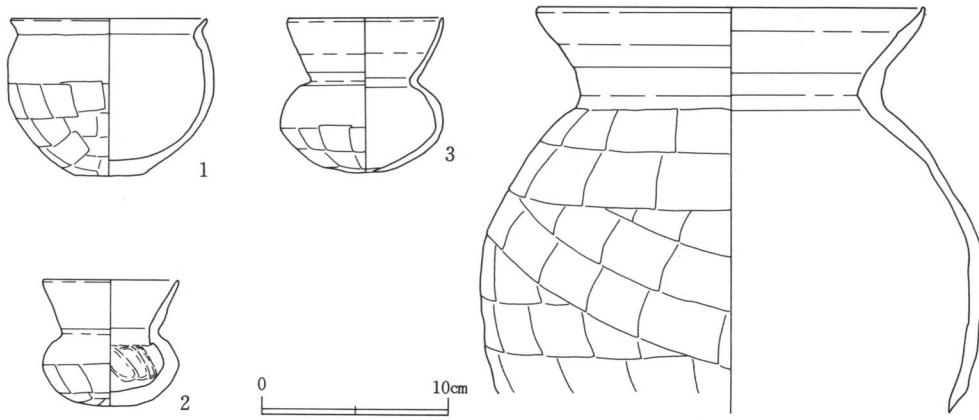
第11図　第５・６号住居址

第５・６号住居址土層説明

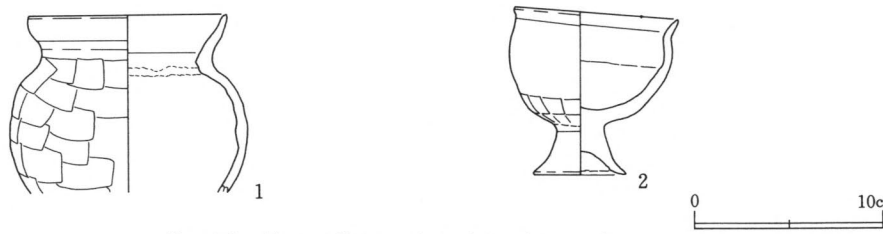
第Ⅰ層	灰色土	(As－A) を含む。
第Ⅱ層	灰色土	(As－A) と鉄分を多量に含む。
第Ⅲa層	灰黒色土	粘性強く、かつ砂質に富む。(As－A) を多く、鉄分の染み・炭化物粒子を若干含む。(古代水田土層)
第Ⅲb層	灰黒色土	第Ⅲa層に準ずるが、鉄分の染みが第Ⅲa層より少ない。(古代水田土層)
第Ⅳ層	灰黒色土	鉄分の染みが多い。下層はマンガン凝集粒（径約２～５㎜）を多く含む。
第１層	暗茶褐色土	白色粒子を微量含み鉄分を含有する。しまりが強く粘性はない。
第２層	明黒褐色土	白色粒子、炭化物微粒を含み灰褐色土を混入する。しまり、粘性共に有する。
第３層	明黒褐色土	白色粒子を微量含む。しまり、粘性共に有するが第２層よりも弱い。
第４層	暗茶褐色土	白色粒子を微量含む。しまり、粘性共に有する。
第５層	暗茶褐色土	白色粒子及び、炭化物粒を微量含む。しまりが強く粘性はない。
第６層	明黒褐色土	第１層に類似するが、混入物の量が多くしまりが若干弱い。
第７層	暗黄灰色土	橙褐色土と灰褐色土を混入する。



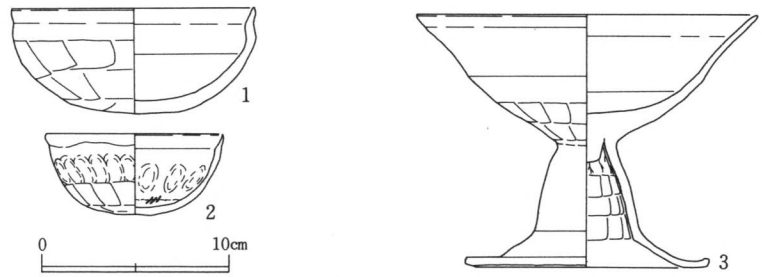
第12図　第１号住居址出土遺物（表－２）



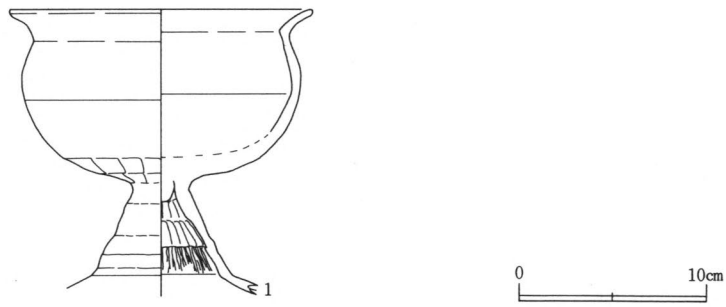
第13図　第２号住居址出土遺物（表－３）



第14図　第３号住居址出土遺物（表－４）



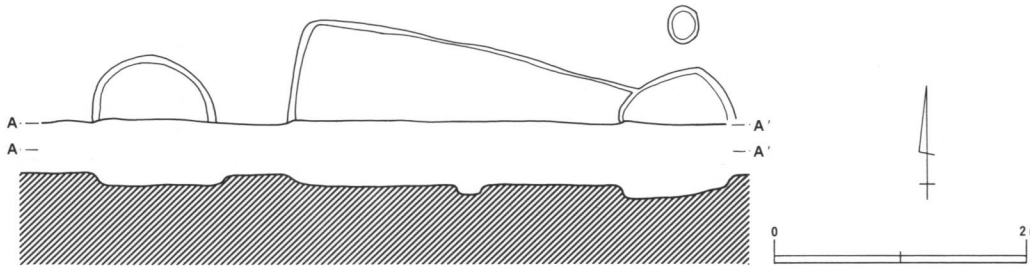
第15図　第４号住居址出土遺物（表－５）



第16図　第６号住居址出土遺物（表－６）

第７号住居址（第17図、図版３－２）

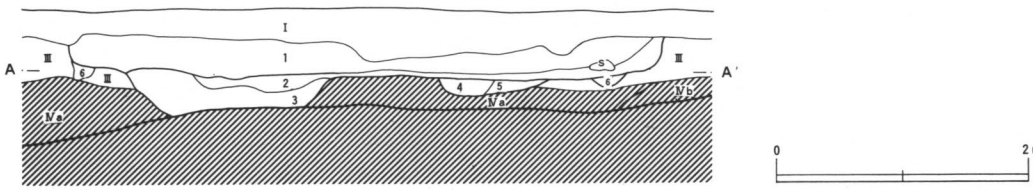
本址は、第Ⅱ区の南西側に北壁の一部が検出された。遺構の大部分は調査区外であり、かつ、北東の端は土坑により切られていたため、調査は全体の約２割程度を行った。規模形態は不明であり、壁溝は検出されなかった。壁高は10cmを測る。出土遺物は和泉式の土器片が出土しており、古墳時代中期（和泉期）の所産であると推定される。



第17図　第７号住居址

竪穴状遺構（第18図）

本址は、第Ⅴ区の東側に検出された。遺構の大部分が調査区外であり、南東の一部が検出されている。規模形態は不明である。壁溝は断面観察により東側に検出された。壁高は14cmを測る。第１～７号住居址からは離れた場所に占地している。基本土層の第Ⅲ層に遺構の掘り込みがあり、平安時代以降の所産であると推定される。



第18図　竪穴状遺構

竪穴状遺構土層説明

第１層　灰色土	焼土粒（径約１～15mm）を多量に含み、焼土（径約１mm以下）・風化粘土も多く含まれる。更に土質は均一である。炭化物（径約１mm）が多少含まれ、炭化材小片も少量含まれる。
第２層　灰色土	第１層に準ずるが、焼土粒（径約３～５mm）に集中。又炭化物風化粒も多量に含まれる。土質は不均一であり層状を成す。
第３層　黒褐色土	第１層に準ずるが、焼土粒の含有量が少ない。
第４層　灰色土	第１層に準ずるが、炭化物がやや多い。土質は均一である。
第５層　黒褐色土	焼土粒（径約３～10mm）が多量に含まれ、炭化物は少量含まれる。粘性が強い。
第６層　灰黒色土	第２層に準ずるが、炭化物は少ない。土質は均一である。

b．土　　坑

第２号土坑（第19図、図版５－２）

本址は、第Ⅲ区の南西端に位置し、平面形態は楕円形を呈している。規模は長軸が南北方向に160cm、短軸が140cm、深さ最大約64cmを測る。底面は緩やかなU字状を呈している。

第４号土坑（第19図）

本址は、第Ⅳ区東側に位置している。平面形態は不定形を呈しており、南側の一部は、調査区外に延びている。規模は長軸が約３ｍであり、深さは最大で90cmであった。内部構造は、なだらかに傾斜する面を中段に持ち、その後底面に向かって垂直に切り込んでいるため、井戸跡の可能性も推定できる。

第５号土坑（第22図）

本址は、第Ⅲ区の第１号住居址南側に位置し、平面形態は円形を呈している。規模は、直径約70cm、深さ22cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がっており、底面は平坦である。

第６号土坑（第22図）

本址は、第Ⅲ区の垣状遺構北西に位置している。平面形態は、円形を呈していて直径約65cm、深さは最大22cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は南側に緩やかに傾斜している。

第７号土坑（第22図）

本址は、第６号土坑の北東に位置している。平面形態は円形を呈し、規模は直径80cm、深さ最大41cmを測る。東壁の立ち上がりはほぼ垂直であるが、西側は緩やかに傾斜している。底面は平坦である。

第８号土坑（第22図）

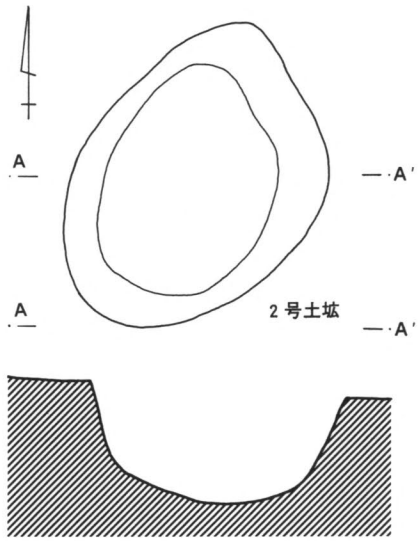
本址は、第７号土坑の北東に位置している。平面形態は主軸を南北方向にもつ楕円形を呈している。規模は長径100cm、短径84cm、深さ最大44cmを測る。南壁はほぼ垂直に立ち上がるが、北側は緩やかに傾斜している。底面は概ね平坦である。

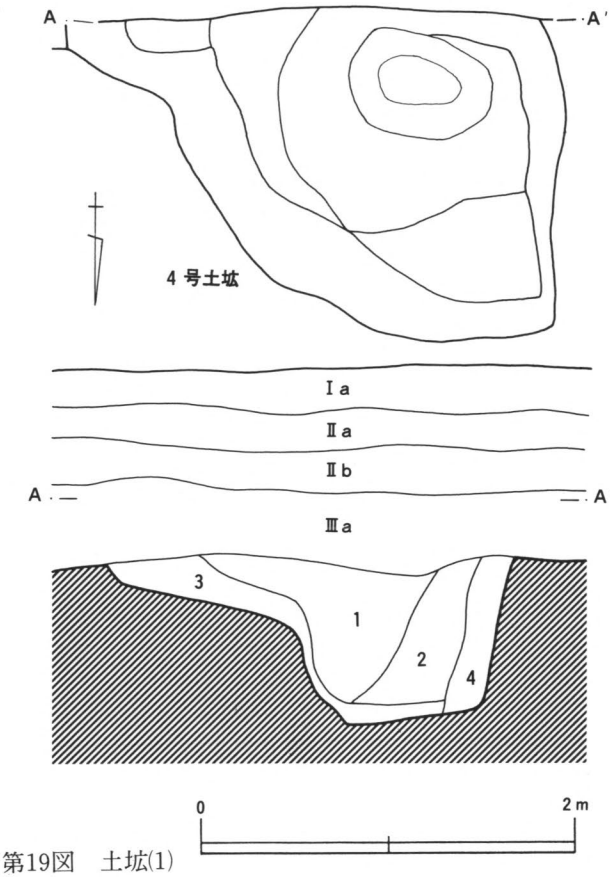
第９号土坑（第22図）

本址は、第Ⅲ区の第２号住居址西側に位置する。平面形態は方形を呈し、規模は一辺の長さが約80cm、深さ10cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は平坦である。

第10号土坑（第22図）

本址は、第１号土坑の南側に位置する。平面形態は円形を呈しており、規模は直径62cm、深さ最大30cmである。壁の立ち上がりはほぼ垂直であり、底面はU字形を呈し、中央部が約10cm程深い。

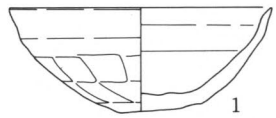


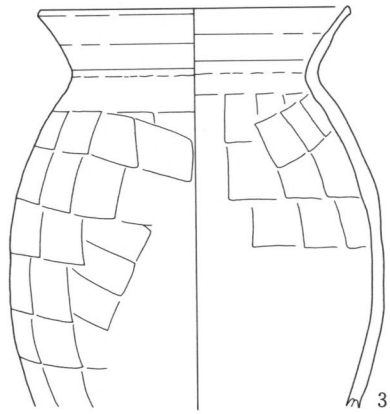


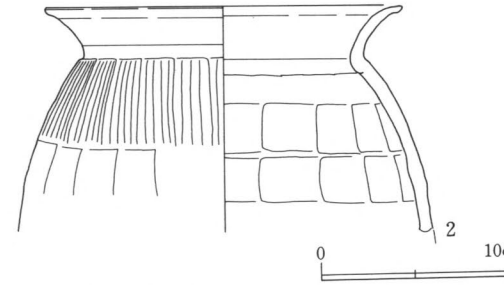
第４号土坑土層説明

第１層	黒茶色土	第Ⅲa層に準ずるが、白色粒子の混入が少ない。
第２層	暗黒茶色土	第Ⅲa層に準ずるが、白色粒子の混入が少なく黒色土も含む。
第３層	黒茶色土	第Ⅲa層に準ずるが、やや帯黒で白色粒子の混入もやや少ない。
第４層	黒茶色土	第Ⅲa層に準ずるが、白色粒子の混入が少なくローム質である。

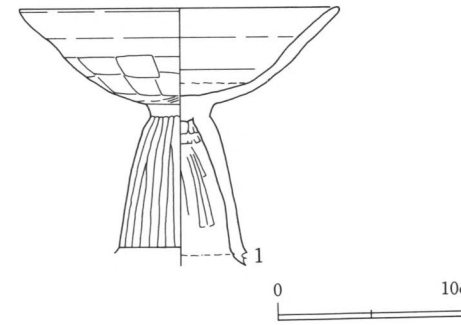
第19図　土坑(1)



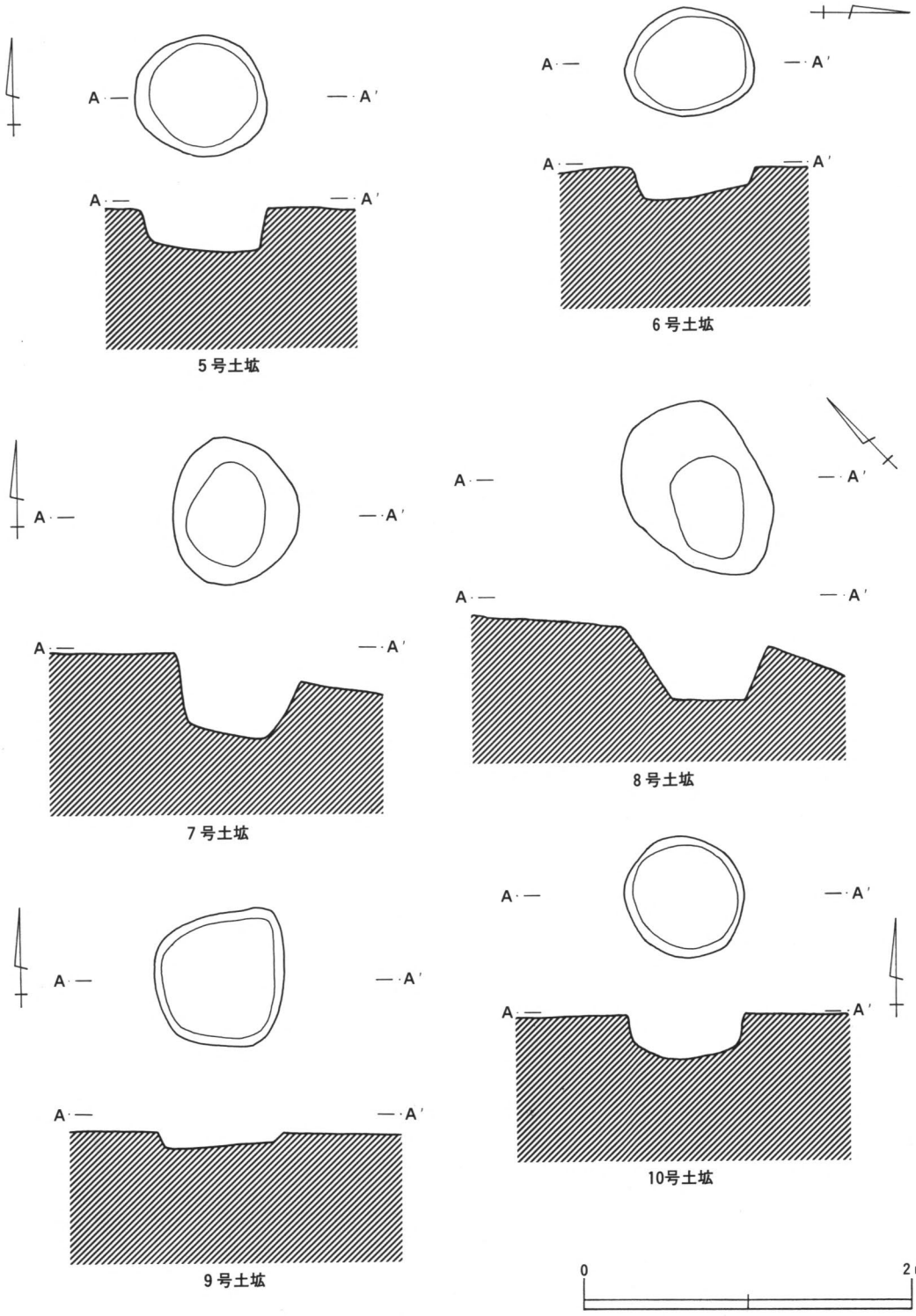




第20図　第２号土坑出土遺物（表－７）



第21図　第４号土坑出土遺物（表－８）

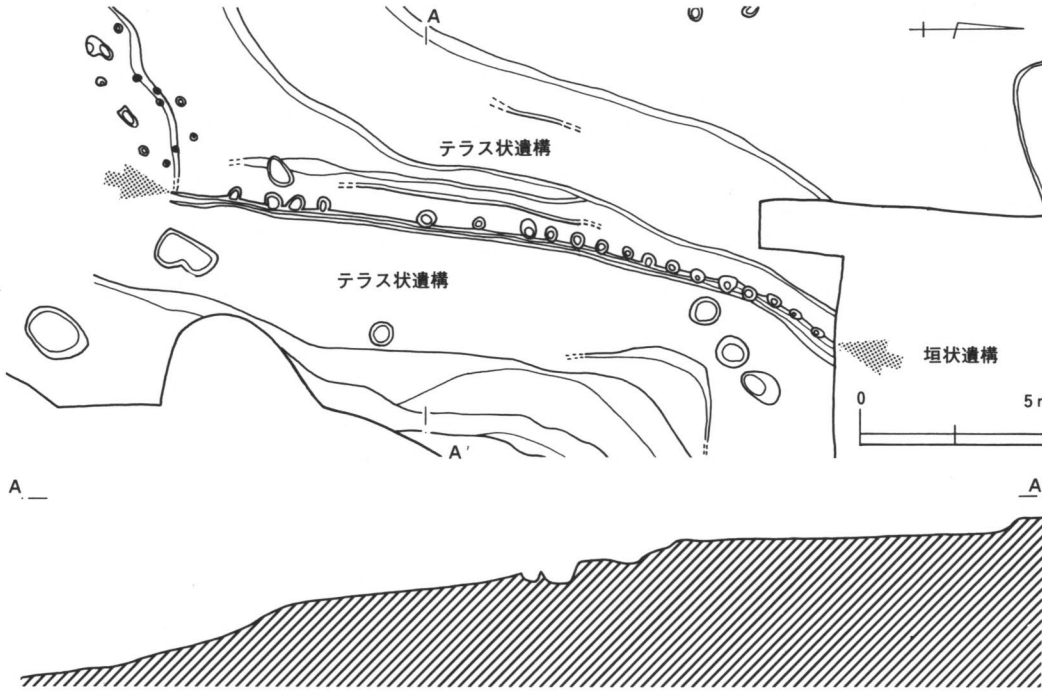


第22図　土坑(2)

C．垣状遺構・テラス状遺構（第23図、図版４－１）

垣状遺構は、第Ⅲ区のほぼ中央に南北方向に延びている。低地部と微高地部の中間位を地形に沿うように構築された溝状遺構の西側縁にピット列を配している。ピットの平面形態は円形を呈し、規模は平均直径約40cm、平均深さ15cmで総じて浅く底面は皿状をなす。ピットの間隔は約40cmで並んでいるが、南側では間隔が広くなる傾向がみられる。ピット列付溝状遺構は覆土の観察および和泉式の土器片が出土していることから、時期は古墳時代中期（和泉期）と推定され、占地も集落地をのせる微高地と低地部の境界にあたることから、集落地とその他を区別する垣状の遺構であったことが考えられる。ピット列には、各々のピットの端に溝状遺構が測ったように構築されており、ピット列が垣状遺構の主列をなし、溝状遺構については主列に付随する補助的な遺構であったと想定したい。また、各ピットは浅く皿状を呈していることから杭を打ち込む柵列とは考えにくい。これらの状況からこのピット列は、一定の間隔で苗木を植えた状態の「生け垣」状になっていたことが推定できる。

テラス状遺構は、垣状遺構を挟むようにして、人為的に削平された平坦部が数段検出されている。斜面にテラス状に平坦部を削り出して数段階に低地部に移行している。各平坦部の高低差は約10cmで幅は平均２ｍを測る。これらのテラス状遺構は地形に沿って構築されており、埋没過程の各期に相当する耕作面であったことが推定される。



第23図　垣状遺構・テラス状遺構

d．第Ⅰ区埋没谷（第24図）

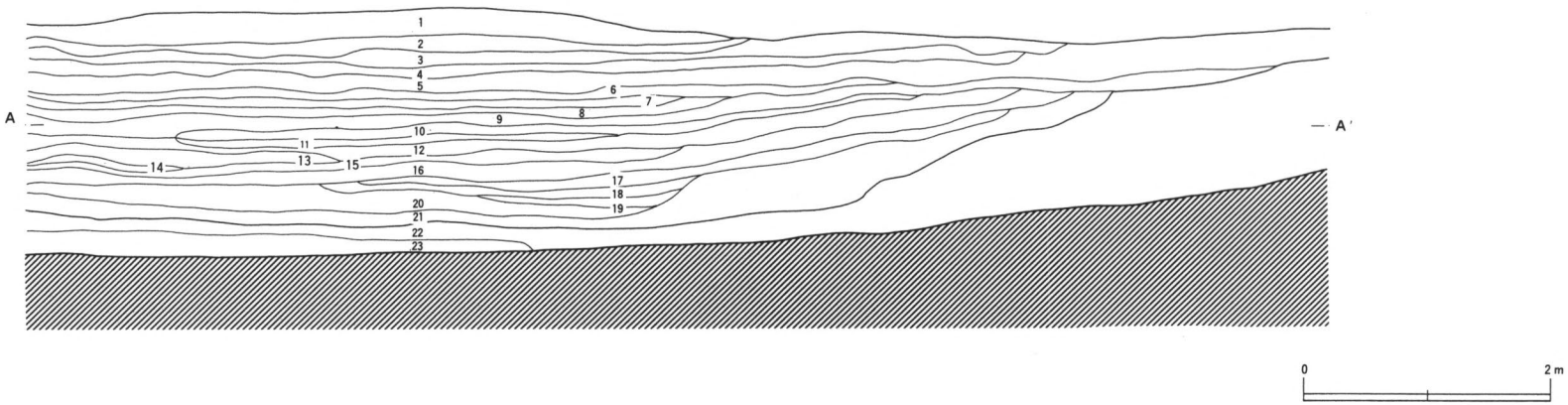
本址は、第Ⅰ区西側で検出し、調査区内にかかる約10mの調査を行ったが、谷西側の立ち上がりは調査区外へ延びており調査は谷東側の一部に留まった。深さは現地表より約1.7mを測り、底面は平坦で、東側の立ち上がりは緩やかである。付近の地形から北東方向へ開口していると推定される。埋没谷の成因は、基盤層がロームであることから本庄台地面が流水等によって開析されたものであると推定される。またその終焉は、覆土下層の第20層に6世紀初頭に降灰したとされる榛名二ッ岳渋川軽石（Hr－FA）が挟み込まれていることと上層の第3・4層に天仁元年（1108年）に降灰した浅間山系B軽石（As－B）が含まれていることから谷の埋没は、古墳時代後期から平安時代末期にかけての期間に進行したものと推定できる。谷の特徴としては、第20層を細かく観察するとシルト質粘質土と泥炭質粘質土および炭化物包含層を薄く交互に堆積した層であり、また非砂質である。この状況から第20層の成因は、流水のない沼地の様な浅い滞水下の堆積状況を示している。これらの状況から（Hr－FA）降下前の本谷の状況は、葦などが繁殖する沼状の地形であったことが推定できる。

e．第Ⅲ区埋没谷（第25図）

本址は、第Ⅲ区集落跡の南東側で検出し、調査区内にかかる約34mの調査を行った。深さは、現地表より約2mを測り底面は平坦である。谷西側の立ち上がりは、台地部と低地部の境に当たっており明瞭であるが、東側に付いては不明瞭である。付近の地形から北東方向へ開口していると推定される。埋没谷の成因は、基盤層がローム層下の砂礫を含む粘質土であることから本庄台地縁辺部の湧水等によって開析されたものであると推定される。谷底からは、土師器の完形品を含む多数の破片が出土している。さらに勾玉が1点出土しているが、祭祀に関わる遺構等の明確なものは検出されていない。また土器の出土状況は集落に沿った地点に集中していることから、集落から谷底へ廃棄していた状況を推定することができる。

f．第Ⅵ区溝状遺構（第26図）

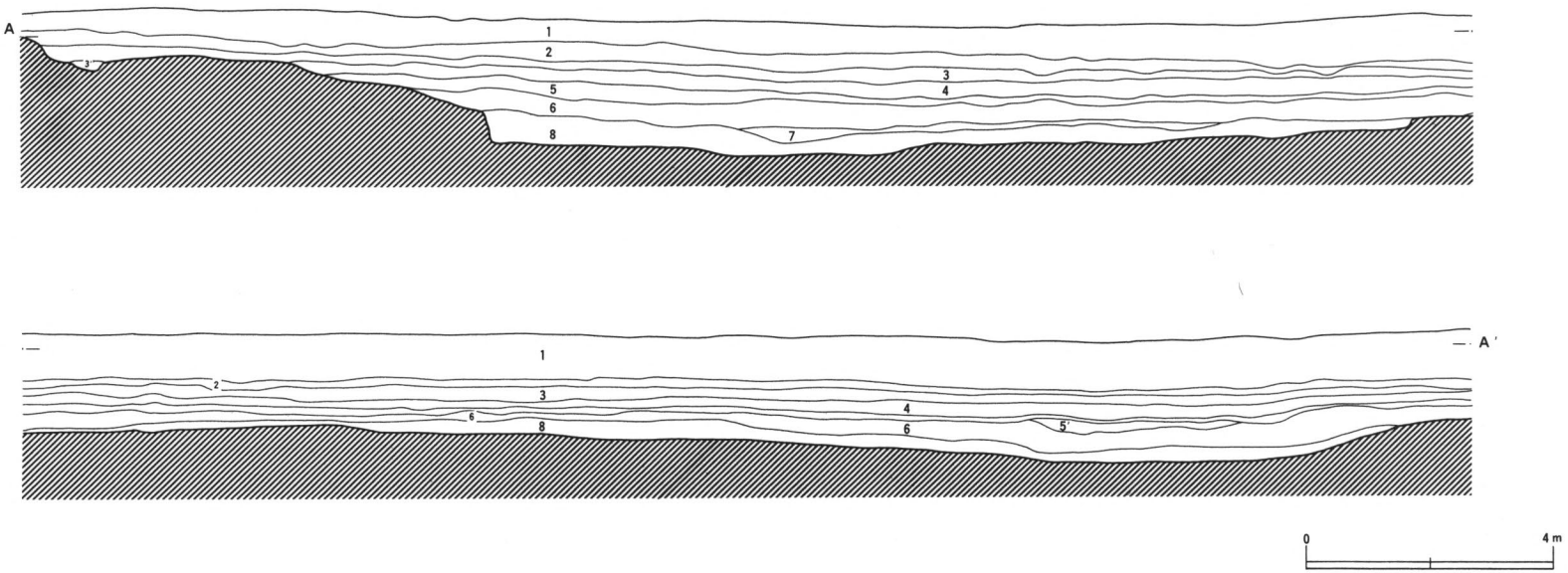
本址は、第Ⅵ区中央よりやや東側で検出し、調査区にかかる約9.3mの調査を行った。遺構内の覆土は、砂礫層と粘質土が交互に堆積している。ただし、第13層には鉄分がパイプ状に凝集した痕跡が多く認められた。これらは、葦等湿地帯に生息する植物の痕跡であると推定され溝の導水時期に季節性があったことを示唆するものである。遺構は、調査区内を南西から北東に横切っており児玉条里北側を台地縁辺部に沿って流下していたと推定できる。また本溝の性格は、地図上で本溝より北に条里地割りが見受けられないため、九郷用水から引き込まれた用水の児玉条里遺構最北部の支溝と推定できる。



第24図　第Ⅰ区埋没谷土層断面図

第Ⅰ区埋没谷土層説明

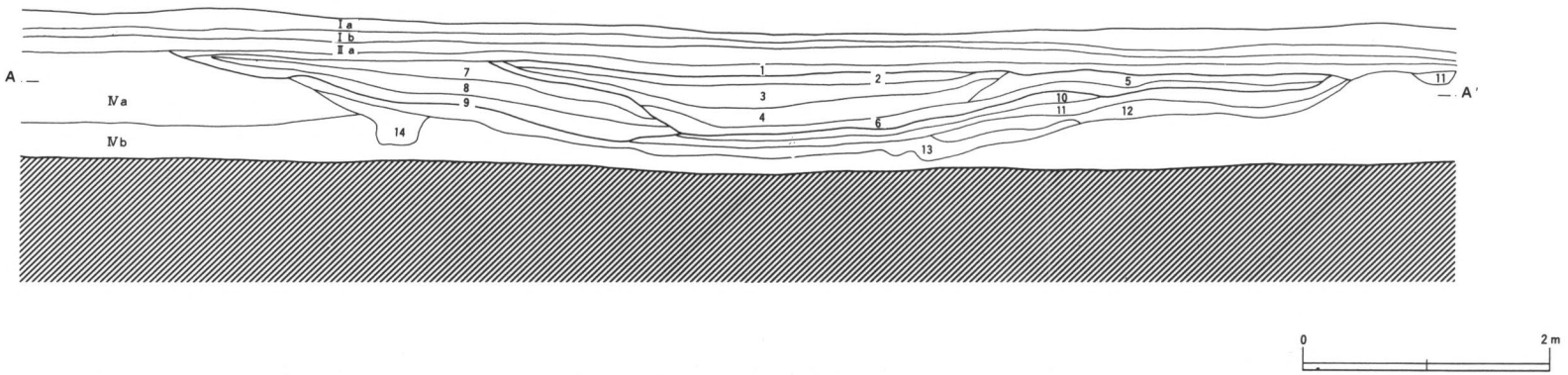
第 1 層	灰茶色土	(As−A) を含む。第Ⅰ層に対比される。(現代耕作土層)
第 2 層	茶褐色土	(As−A) を多量に含む。若干の鉄により黄茶色を帯びる。第Ⅱ層に対比される。(現代耕作床層)
第 3 層	灰黒色土	若干の (As−B) を含む。
第 4 層	灰黒色砂土	(As−B) を多量に含み、砂質である。
第 5 層	灰黒色土	微量の鉄分の染みを含み、弱粘性を示す。
第 6 層	黄灰黒色土	第5層に多量の鉄分が染みた層であり、弱粘性を示す。
第 7 層	黒褐色土	第6層に準ずるが、洗出された白色粒子 (径約1～2mm) が多く含まれる。若干砂質である。
第 8 層	黒褐色土	白色粒子と鉄分の染みを若干含み、やや砂質である。
第 9 層	黒褐色土	白色粒子を若干含み、鉄分の染みがある粘質土で、やや砂質である。
第 10 層	黒褐色土	第9層に準ずるが、やや砂土質である。
第 11 層	橙褐色土	第9層に橙色粒子が混入した層である。橙色粒子 (径約1～3mm) を多量に含む。
第 12 層	橙褐色砂土	第9層に準ずるが、やや砂質である。
第 13 層	黒色土	細砂を多く含む粘質土であり、鉄分の薄色の斑文がある。炭化物 (径約2～5mm) を若干含む。
第 14 層	黒色砂土	第13層に準ずるが、やや砂量が多い。
第 15 層	黒色土	黄褐色粘質土が縞状に散っている。混入砂は少ない。
第 16 層	黒色粘質土	炭化物を多く含む粘質土であり、混入砂は少なく、鉄分を含有していない。
第 17 層	黒色粘質土	第16層に準ずるが、鉄分の染みが斑状に若干有り、やや茶色を呈する。
第 18 層	黒褐色粘質土	多くの細砂、及び炭化物 (径約1～3mm) を多量に含み、鉄分の染みが斑状に多く含有される。
第 19 層	黒色粘質土	第18層に準ずるが、色調は第18層より黒色である。
第 20 層	黒色粘土	黒色粘質土・(Hr−FA)・炭化物の互層であり、非砂質である。
第 21 層	黒褐色砂土	マンガン粒 (径約2～5mm) を多く含み、粘質土・炭化物を若干含む。
第 22 層	黒褐色砂土	第21層に準ずるが、やや砂質である。
第 23 層	黒褐色礫土	第21層に準ずるが、円礫 (径約5～100mm) が、混入している。



第25図　第Ⅲ区埋没谷土層断面図

第Ⅲ区埋没谷土層説明

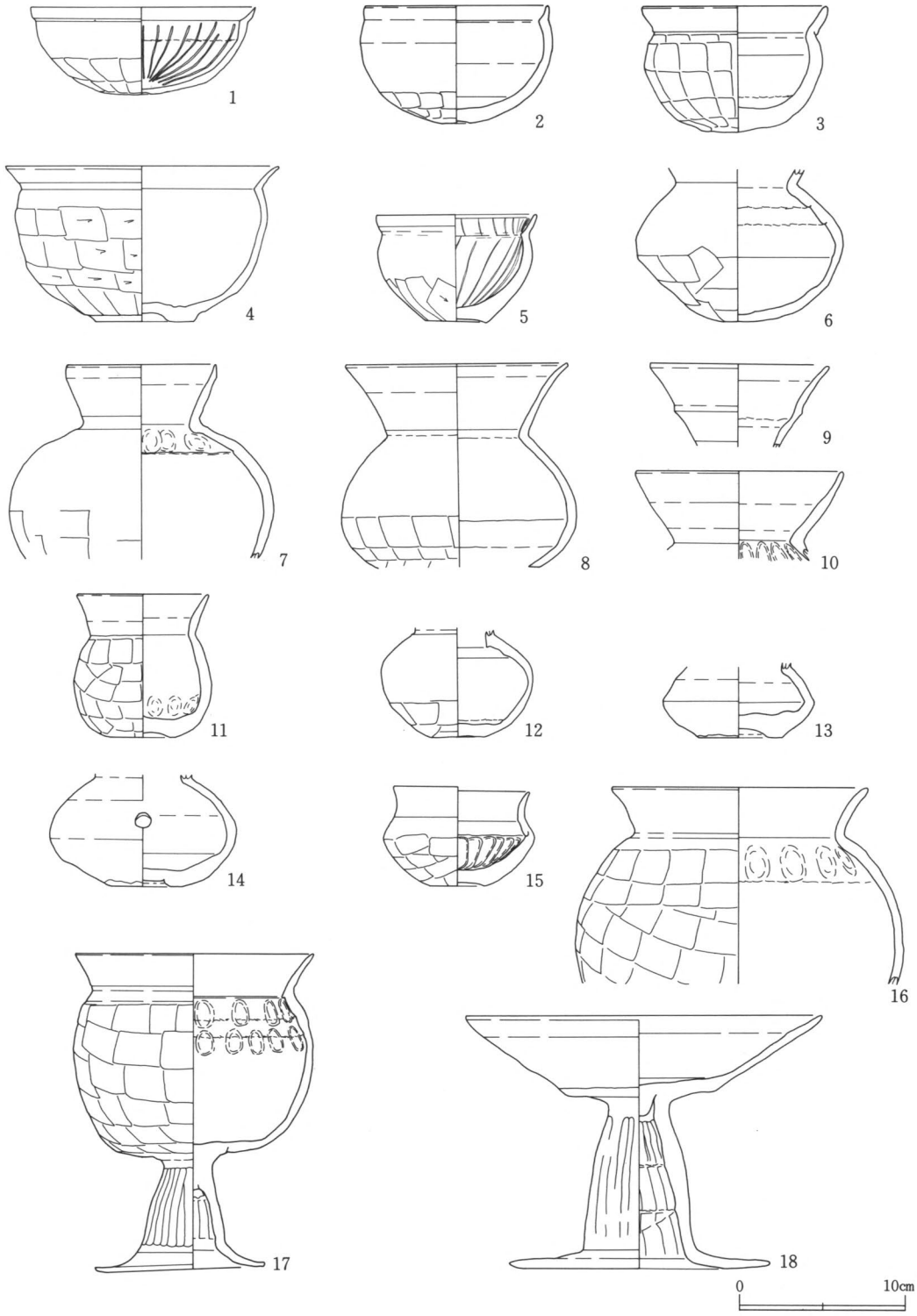
第 1 層	灰 色 土	第Ⅰa層に対比される。
第 2 層	灰色粘土	砂質で鉄斑粒と、洗出された白色粒子を多く含み、小礫（径約5～10mm）も多少含む。
第 3 層	灰色粘質土	粘質土主体であり、洗出された白色粒子・鉄分を若干含む。鉄分は層状を呈す。
第 3′層	灰色粘質土	第3層に準ずるが、白色粒子をほとんど含まない。
第 4 層	灰色粘質土	第2層に準ずるが、やや砂の混入が多い。
第 5 層	灰色粘質土	第3層に準ずるが、やや砂と鉄斑粒の混入が多い。
第 5′層	灰色粘質土	第5層に準ずるが、鉄斑粒が多量みられる。
第 6 層	褐色粘質土	褐色粘質土・(Hr－FA)・細砂・炭質粘質土の互層であるが下半は砂質である。
第 7 層	褐 色 砂	下半は礫（径約5～20mm）を多少含み、部分的に粘質土（灰色）が混入する細砂層である。土器片、炭化物を多量に含む。
第 8 層	褐色砂礫	褐色粘質土に砂・礫・小礫が多量に混入した層。土器小片を少量含む。



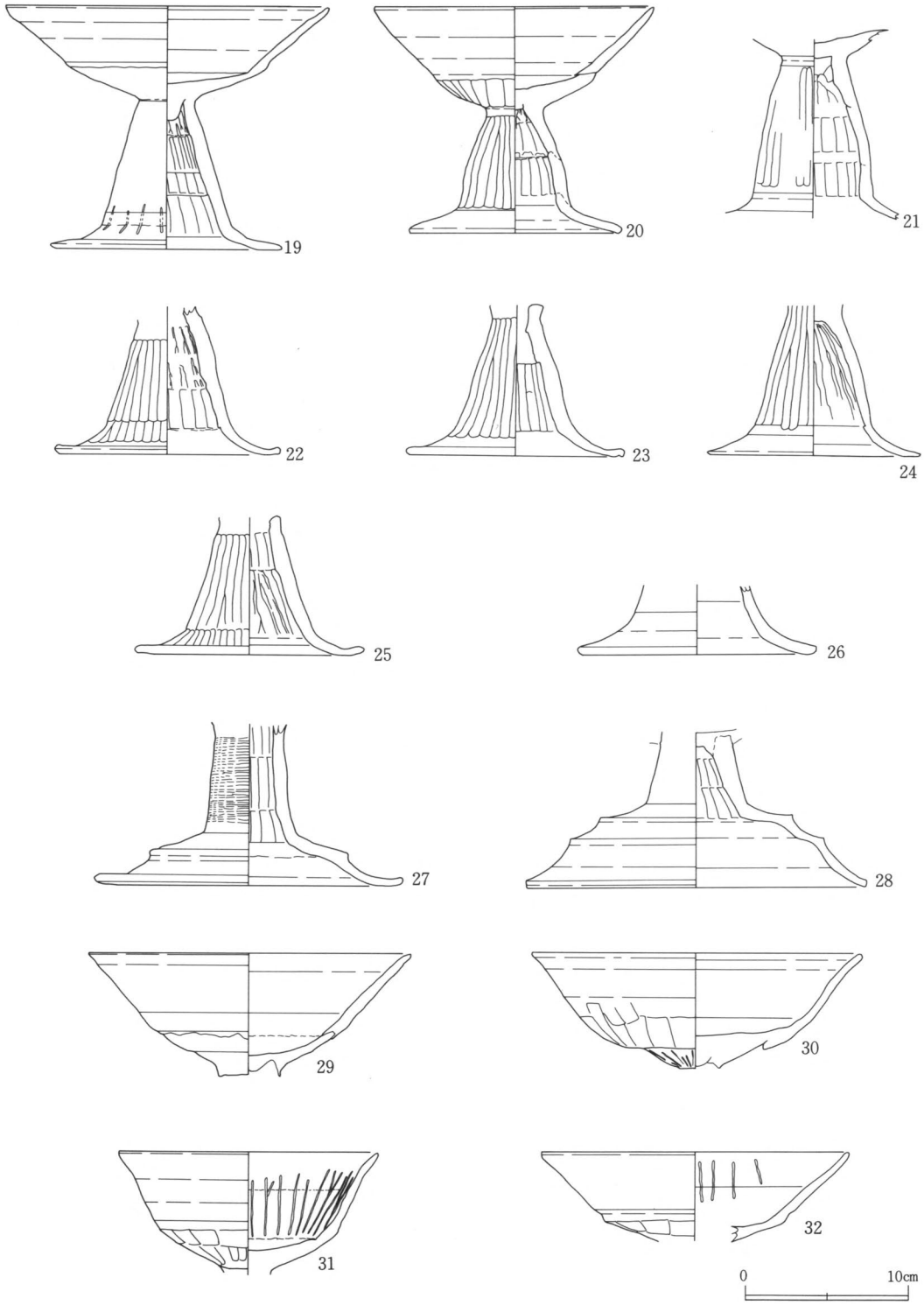
第26図　第Ⅵ区溝状遺構土層断面図

第Ⅵ区溝状遺構土層説明

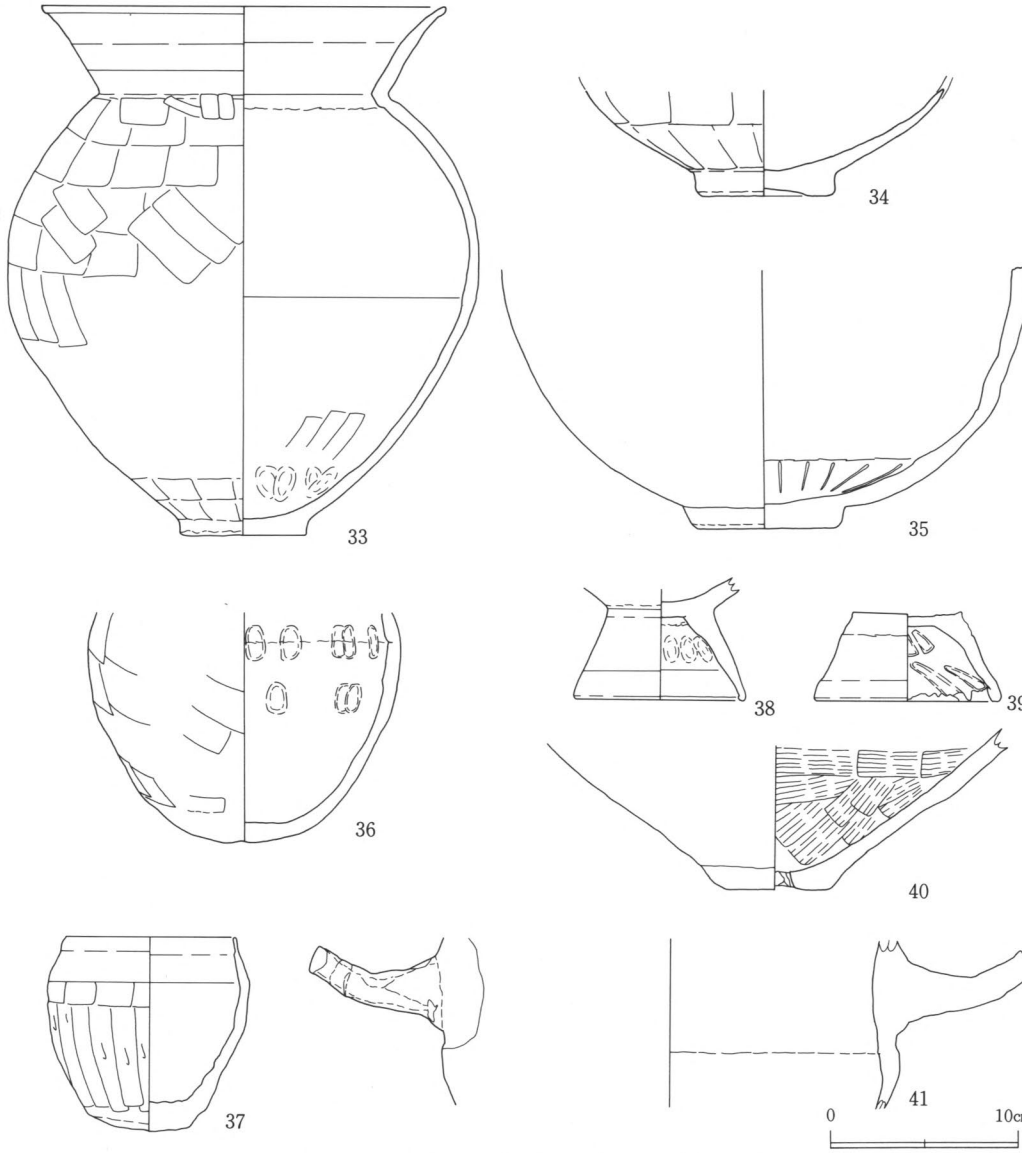
第Ⅰa層	灰色土	(As－A) を含む。(現代耕作土層)
第Ⅰb層	灰色土	(As－A) を含む。鉄分の沈澱が多い。(現代水田床層)
第Ⅱa層	灰色土	(As－A) を含む。鉄分の染みが若干認められる。(近世耕作土層)
第Ⅳa層	灰黒色土	鉄分の染みが多い。(基盤粘質土層)
第Ⅳb層	灰黒色土	マンガン凝集粒 (径約2～5mm) を多く含む。(基盤粘質土層)
第1層	黒色土	白色粒子 (径約1～3mm) を多く含み、かつ焼土粒 (径約3mm程度) を少量含む。やや粘性均一。
第2層	黒色土	第1層に準ずるが、土質はやや粘性があり均一である。色調は鉄分により黄色化している。
第3層	灰黒色砂土	第1層に準ずるが、多量の砂を含む。色調は鉄分により黄色化している。
第4層	灰色粘質土	鉄分の染みを多く含む粘土層。微砂も下半に多く含有。
第5層	灰色砂	鉄分の染みを多く含む微砂 (径約1mm以下) 層。
第6層	灰色砂	中央では砂利 (径約10～20mm) に富み側方では粘土質。色調は鉄分によりやや黄色を呈す。
第7層	白色砂	下方では小礫 (径約5～20mm)、上方では微砂の層。色調は、上半は鉄分により黄色を呈す。
第8層	灰色粘土	鉄分の染層部を互層状に含み、更に微砂を多く含む粘土質土。
第9層	灰色粘土	第8層に準ずるが、鉄分の染みが少ない。
第10層	灰色砂	小礫 (径約5mm) を多く含む砂層。やや層状に鉄分の染みが見受けられる。
第11層	灰色粘質砂土	砂質 (径約2～3mm) に富む粘質土であり、斑状の鉄粒を含む。
第12層	灰色粘質砂土	第11層に準ずるが、やや混入砂の量が少ない。
第13層	灰色粘土	砂を含まない粘質土層。広面に鉄の沈澱層有り。
第14層	灰茶色粘土	第Ⅳb層に砂が混入した層である。染み状の鉄分を含み、下半はやや砂質性が強い。非水成層である。



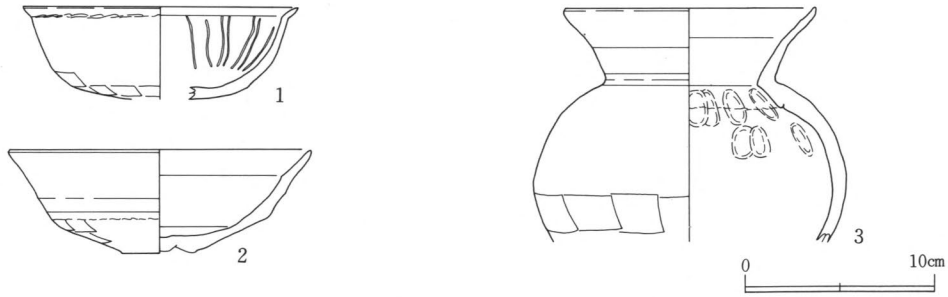
第27図　第Ⅲ区東側谷出土遺物(1)（表－９）



第28図　第Ⅲ区東側谷出土遺物(2)（表－９）



第29図　第Ⅲ区東側谷出土遺物(3)（表－９）



第30図　第Ⅲ区西側谷出土遺物（表－10）

表－2　第1号住居址出土遺物観察表

番号	器　種	大きさ	胎　土	焼成	色　調	残存	出土位置・調整・備考
1	坩	8.8 9.3	白色粒子 角閃石 片岩粒 雲母粒 マンガン粒	良	外一淡橙褐色 内一赤褐色	80％	内面底・体部にヨゴレが付着。 外面口縁部に焼きムラがある。 調整は外面は口縁部はヨコナデ、頸部から体部中位はナデ、下半はヘラケズリ。内面は口縁部はヨコナデ、体部横位にナデ、体部下半部は工具によるナデ。
2	坩	(8.7) (8.8)	角閃石 片岩粒	普	外一淡赤褐色 内一赤褐色	45％	床面よりやや浮いて出土。 外面体部下半から底部にススが付着。 内面体部にヨゴレが付着。 調整は外面は口縁部はヨコナデ、体部は下半までナデ、下半はヘラケズリ。内面は口縁部はヨコナデ、体部下半までナデ、下半は指頭によるナデ。
3	坩	(8.8) 8.7	白色粒子 砂　礫 片岩粒	普	外一淡黄橙褐色 内一暗赤褐色	60％	床面よりやや浮いて出土。 外面体部上半から下半の一部にススが付着。 混和・混入材が器面に露出しており、非常に雑なつくり。 調整は外面は口縁部はヨコナデ、頸部はナデのちヨコナデ、体部上半はナデ、下半はヘラケズリ。内面は口縁部はヨコナデ、体部下半までナデ、体部下半は指頭によるナデ。
4	坩		小　礫 片岩粒 雲母粒 石　英 鉄質分	普	外一暗茶褐色 内一茶褐色	90％	床面よりやや浮いて出土。 内面にヨゴレが付着。 調整は外面は体部上半はミガキ、下半はヘラケズリ。内面は上半はヨコナデ、一部指頭痕が残る。下半は指頭によるナデ。
5	坩	1.8	片岩粒 輝　石 雲母粒	良	外内一茶褐色	70％	床面よりやや浮いて出土。 口縁部下端に段を有する。 調整は外面は頸部から体部上半はヨコナデ、下半はヘラケズリ、底部はナデ。内面は口縁部はヨコナデ、体部上半はヨコナデ、下半から底部にかけてナデ。
6	坩	5.1	砂　礫 鉄質分 角閃石 輝　石 雲母粒	普	外内－淡黄褐色		内面全体にヨゴレが付着。 調整は外面は口縁部から体部上位までヨコナデ、中位は指頭によるナデ、下位はヘラケズリ。底部は指頭によるナデ。内面は口縁部から体部上半までヨコナデ、下半は指頭によるナデ。
7	甑	(14.8)	片岩粒 雲母粒 鉄質分 輝　石	良	外内一淡赤褐色	15％	床面よりやや浮いて出土。 内外面ともヨゴレが付着。 調整は、内外とも丁寧に行われている。 口縁部の折り返し痕が明瞭に残る。 調整は外面は口縁部はヨコナデ、体部上位はナデ、中位はヘラケズリ。内面は口縁部はヨコナデ、体部はナデ。
8	甑	(11.0)	鉄質分	普	外一赤褐	40％	焼成後に穿孔。

番号	器種	大きさ	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・調整・備考
		9.4 3.2	マンガン粒		色・淡褐色 内一赤褐色		内面底部にややヨゴレが付着。 調整は外面は口縁部から体部上位まではヨコナデ、体部中位はナデ、下位はケズリ、下端はナデ。内面は口縁部はヨコナデ、体部上半は工具によるナデ、下半はナデ。
9	甕	9.9 10.5 (2.8)	石英 角閃石	良	外一橙褐色 内一黄褐色	65％	内面体部下半から底部にかけてヨゴレが付着。 調整は外面は口縁部はヨコナデ、頸部から体部上半はナデ、体部下半はヘラケズリ。内面は口縁部はヨコナデ、体部上半はナデ、下半から底部にかけて指頭によるナデ。
10	高坏	(17.2)	鉄質分 角閃石 マンガン粒 片岩粒 石英	普	外一淡赤褐色 内一褐色・暗褐色	30％	床面よりやや浮いて出土。 調整は外面は口縁部はヨコナデ、口縁部と底部の接合部はナデのちヨコナデ、底部はヘラケズリ。内面は口縁部はヨコナデ、底部はナデ。
11	高坏	(18.2)	マンガン粒 鉄質分 角閃石 チャート	良	外内一淡橙褐色	20％	床面よりやや浮いて出土。 調整は外面は口縁部はヨコナデ、口縁部と底部の接合部はナデ、底部はヘラケズリ。内面は口縁部はヨコナデ。
12	高坏	(17.2)	角閃石 片岩粒 鉄質分 石英	良	外内一茶褐色	50％	床面よりやや浮いて出土。 坏底部と坏体部の接合痕が外面に明瞭に残る。 調整は外面は口縁部はヨコナデ、口縁部と底部の接合部は指頭によるナデ。内面は口縁部はヨコナデ。
13	高坏	19.8	片岩粒 鉄質分 白色粒子 角閃石 石英	良	外内一淡赤褐色・黄褐色	90％	調整は外面は口縁部下半までヨコナデ、下半はナデ、底部はヘラケズリ。内面は口縁部下半までヨコナデ、下半から底部はナデ。
14	高坏	(14.1)	輝石 片岩粒 角閃石	良	外内一淡赤褐色	35％	貯蔵穴と覆土から破片で出土。 坏底部は黒色処理。 脚内部に絞り痕が残る。 調整は外面は脚部上位から中位までヘラミガキ、下位はヘラミガキのち指頭によるナデ、裾部はヨコナデ。内面は脚部はナデ、裾部はヨコナデ。
15	甕	(11.8) 17.5	角閃石 雲母粒 砂礫粒 片岩粒	普	外内一赤褐色	60％	二次焼成の結果、体部に黒斑があり、体部上位の器面が剝落。 調整は外面は口縁部はヨコナデ、体部上位はヘラミガキ、中位上半はナデ、体部下半はヘラケズリ。内面は口縁部はヨコナデ、体部上半はナデ、下半は指頭によるナデ。
16	甕	(14.9)	多量の砂粒 石英 片岩粒	良	外一口縁は赤褐色 体部は暗	15％	内面にややヨゴレが付着。 頸部に口縁部の折返し痕が残る。 体部に粘土紐痕が明瞭に残る。

番号	器　種	大きさ	胎　土	焼成	色　調	残存	出土位置・調整・備考
			角閃石		黄褐色 内一淡褐色		調整は外面は口縁部はヨコナデ、体部はナデ。内面は口縁部はヨコナデ、体部は指頭によるナデ。
17	甕	6.2	鉄質分 角閃石 片岩粒 砂礫粒	普	外一暗褐色 底部・内は淡橙褐色	80％	床面よりやや浮いて出土。 外面は二次焼成の為体部がほぼ全体的に黒化している。 調整は外面は体部下端はヘラケズリ、底部はナデ。内面は体部下端は木口状工具によるナデ、底部は指頭によるナデのち木口状工具によるナデ。

表―3　第2号住居址出土遺物観察表

番号	器　種	大きさ	胎　土	焼成	色　調	残存	出土位置・調整・備考
1	埦	(10.6) 8.3 3.8	白色粒子 雲母粒	普	外一暗茶褐色 内一暗茶褐色	40％	外面体部全域にススが付着。 調整は外面口唇部から体部中位までヨコナデ、体部中位から底部までケズリ。内面は口縁部はヨコナデ、体部は上位から指頭によるナデ、ヨコナデ、ナデと施される。
2	坩	(7.2) 7.7 1.6	石英 雲母粒 角閃石 片岩粒	普	外一赤褐色・黄褐色 内一黄褐色	70％	外面体部下半から底部にかけて黒斑。 調整は外面口縁部はヨコナデ、頸部はナデ、体部上半は横及び斜にナデ、体部下半はヘラケズリのちナデ。内面は口縁部はヨコナデ、頸部はナデ、体部は指頭によるナデ。
3	坩	8.3 8.2	白色粒子 雲母粒 片岩粒 鉄質分	良	外一淡赤褐色・淡黄褐色 内一口縁部は淡褐色	80％	底部破片は第1号住居址床面から出土。 体部中位以下、及び口縁部に黒斑。 焼成後に穿孔。 調整は外面口縁部はヨコナデ、頸部から体部上半にかけてナデ、体部下半はヘラケズリ。内面は口縁部はヨコナデ、頸部から体部はナデ、底部は工具によるナデ。
4	甕	(20.8)	鉄質分 マンガン粒 砂礫 片岩粒	普	外一淡褐色 内一褐色	30％	床面よりやや浮いて出土。 外面体部中下半にススが付着。 調整は外面は口縁部はヨコナデ、頸部はナデ、体部はヘラケズリ。内面は口縁部はヨコナデ、頸部はナデ、体部上位はナデのち木口状工具によるナデ、それ以下は木口状工具によるナデ。

表－4　第3号住居址出土遺物観察表

番号	器　種	大きさ	胎　土	焼成	色　調	残存	出土位置・調整・備考
1	鉢	10.5	角閃石 片岩粒 石　英 鉄質分 雲母粒	普	外一口縁部は赤褐色 体部は赤褐色・淡赤褐色 内一赤褐色	40％	床面よりやや浮いて出土。 体部中半にヨゴレが付着。 つくりは非常に雑であり、粘土紐を接合した部分（特に頸部）は土器の割れる原因となっている。 調整は外面は口縁部中位までヨコナデ、口縁部下位から頸部までナデ、体部はヘラケズリ。内面は口縁部はヨコナデ、頸部から体部上位までナデ、それ以外が木口状工具によるナデ。
2	有脚埦	(8.8) 8.6 4.9	白色粒子 片岩粒	良	外一暗茶褐色 内一赤褐色	50％	外面埦底部から口唇部までヨゴレが付着。 脚部に対し、体部が傾いて接合されている。 調整は外面は体部下半までヨコナデ、底部はナデ、脚部はヨコナデ。内面は口縁部から体部中位までヨコナデ、脚部はナデ。

表－5　第4号住居址出土遺物観察表

番号	器　種	大きさ	胎　土	焼成	色　調	残存	出土位置・調整・備考
1	埦	9.4	白色粒子 石　英 砂　粒	普	外一体部上半は黒色 下半は淡黄褐色 内一黒色	ほぼ完形	床面よりやや浮いて出土。 内面は黒色処理。外面は口縁部より体部⅓程黒色処理。 口縁部は折り返しており、外面に明確に痕跡を残す。 調整は外面は口縁部はナデ、体部中位は指頭によるナデ、体部下半より底部にかけてケズリ。内面は口縁部から体部上半はナデ、体部中位は指頭によるナデ、下半は所々工具を用いたナデ。
2	埦	12.8 5.6	砂礫粒 白色粒子 角閃石 片岩粒 マンガン粒 鉄質分	良	外一赤褐色・橙褐色 内一暗橙褐色	80％	内面口縁部から底部にかけて黒斑。 外面口縁部から底部にかけて黒斑があるが、内面よりやや薄く対応しない。 調整は外面口縁部はヨコナデ、体部はヘラケズリ。内面は口縁部から体部上位はヨコナデ、体部中位から底部はナデ。
3	高坏	18.0 13.4 (13.0)	マンガン粒 白色粒子 角閃石 雲母粒 鉄質分	良	外内一赤褐色	90％	床面よりやや浮いて出土。 内外に対応する位置で、坏体部に黒斑。 脚端部は段状になりやや上湾する。 坏内面底部剝落等損傷がはげしい。 調整は外面は坏口縁部はヨコナデ、口縁部と底部接合部はナデ、坏部と脚部の接合部はナデ、脚部は横及び斜位にナデ、脚部と裾部の接合部は指頭によるナデ、裾部はヨコナデ。内面は口縁部はヨコナデ、底部は不明、脚部はヘラケズリ、裾部はヨコナデ。

表―6　第6号住居址出土遺物観察表

番号	器　種	大きさ	胎　土	焼成	色　調	残存	出土位置・調整・備考
1	有脚埦	(16.1)	片岩粒 石　英	普	外内―淡赤褐色	30％	床面よりやや浮いて出土。 調整は外面は口縁部から体部中位までヨコナデ、体部下半はナデ、下半から底部はヘラケズリ、脚部はナデ、裾部はヨコナデ。内面は口縁部から体部中位までヨコナデ、下半はナデ、底部は剝落の為不明、脚部は上位からヘラケズリ・ヘラミガキ・ヘラケズリ、裾部はヨコナデ。

表―7　第2号土坑出土遺物観察表

番号	器　種	大きさ	胎　土	焼成	色　調	残存	出土位置・調整・備考
1	埦	14.0 15.5 3.2	角閃石 雲母粒 鉄質分 片岩粒 白色粒子	良	外内―赤褐色	80％	床面よりやや浮いて出土。 内面口縁部の一部にススが付着。 内面の底部上端より口縁部にかけて、また外面口唇部にヨゴレが付着。 調整は外面は口縁部はヨコナデ、体部から底部にかけて右回転にヘラケズリ。内面は口縁部はヨコナデ、体部から底部にかけてナデ。
2	甕	(19.0)	砂礫粒 雲母粒 角閃石 石　英	普	外―淡橙褐色 内―淡褐色	30％	床面よりやや浮いて出土。 体部中半に黒斑。 調整は外面は口縁部はヨコナデ、体部上端は木口状工具によるナデ、中位はナデ。内面は口縁部はヨコナデ、体部上部はヘラケズリ。
3	甕	(16.7)	片岩粒 角閃石 雲母粒 石　英	普	外―口縁部は暗黄褐色 体部は黄褐色 内―淡黄褐色	20％	床面よりやや浮いて出土。 外面体部中位より下位にかけてススが付着し、二次焼成痕がある。 調整は外面は口縁部はヨコナデ、頸部から体部上端はナデ、体部はヘラケズリ。内面は口縁部はヨコナデ、頸部はナデ、体部上半はヘラケズリ、下半はナデ。

表―8　第4号土坑出土遺物観察表

番号	器　種	大きさ	胎　土	焼成	色　調	残存	出土位置・調整・備考
1	高坏	(17.0)	白色粒子 輝　石 角閃石 石　英	良	外内―赤褐色	70％	床面よりやや浮いて出土。 調整は外面は口縁部中位までヨコナデ、下位はヘラケズリ、底部は工具によるナデ、坏部と脚部の接合部はナデ、脚部はヘラナデ。内面は口縁部はヨコナデ、底部はナデ、脚部はヘラナデ。

表―9　第Ⅲ区東側谷出土土器観察表

番号	器　種	大きさ	胎　土	焼成	色　調	残存	出土位置・調整・備考
1	埦	13.7 5.3 2.0	小砂利 白色粒子 角閃石 片岩粒 雲母粒	普	外内―茶褐色	80％	内面の一部に暗茶褐色化した部位あり。 つくりは全体的に雑である。 内面体部から底部にかけて暗文。 調整は外面は口縁部はヨコナデ、頸部はナデ、体部上半はヨコナデ、下半はヘラケズリ。内面は口縁部はヨコナデ、体部はミガキ、底部は指頭によるナデ。
2	埦	(11.0) 7.1 1.6	片岩粒 鉄質分	良	外内―淡赤褐色	70％	調整は外面は口縁部より体部中位までヨコナデ、下半はヘラケズリ、底部はヨコナデ。内面は口縁部より体部下半までヨコナデ、底部はナデ。
3	鉢	11.2 7.7	白色粒子 鉄質分 片岩粒 マンガン粒 角閃石 小　礫	普	外―淡赤褐色 内―淡赤褐色・淡黄褐色	完形	外・内面底部及び体部の一部（対応せず）、また内面口縁部に黒斑。 内面体部上位まで著しいヨゴレが付着。 口縁部の折り返し痕が明瞭に残る。 体部と底部の接合痕が明瞭に残る。 整形・調整ともかなり雑。 調整は外面は口縁部はヨコナデ、体部はヘラケズリ。内面は口縁部はヨコナデ、体部はナデ。
4	鉢	16.4 9.4 6.0	多量の鉄質分 片岩粒 角閃石 雲母粒	良	外―暗橙褐色 内―淡赤褐色	40％	外面底部及び体部下半に黒斑。 丁寧なつくりである。 内面底部は外面からの圧により盛り上がっている。 調整は外面は口縁部はヨコナデ、体部上位はナデ、体部中位から下位までヘラケズリ、体部下端部はナデ、底部器接面はヘラケズリ、底部上げ底の部分はナデ。内面は口縁部はヨコナデ、体部から底部にかけてナデ。
5	鉢	9.5 6.4 3.8	白色粒子	良	外内―暗赤褐色	完形	調整は外面は口縁部から体部上半にかけて指ナデ、体部下半はヘラナデ。内面は口縁部はヘラナデ、体部は指ナデ後工具によるミガキ。暗文を残す。
6	坩		角閃石 雲母粒 白色粒子 鉄質分 片岩粒	良	外―淡赤褐色・淡黄褐色 内―淡赤褐色	95％	内面体部上半までヨゴレが付着。 外面体部中半上位から下半にかけての一部にスス状のヨゴレが付着。 器形に多少いびつな点があるが丁寧につくられている。 体部内面上位に粘土紐痕が明瞭に残る。 調整は外面は頸部から体部中位にかけて工具によるナデ、体部中位以下はヘラケズリ。内面は頸部から体部中位にかけてナデ、中位以下は横位にナデ。
7	坩	9.0	角閃石 鉄質分 輝　石 片岩粒	普	外内―淡褐色	35％	内面体部上半にヨゴレが付着。 調整は外面は口縁部はヨコナデ、頸部はナデ、体部上半は横位及び斜位にナデ、下半はヘラケズリ。内面は口縁部はヨコナデ、頸部から体部上位にかけて指頭によるナデ、それ以下はナデ。

番号	器　種	大きさ	胎　土	焼成	色　調	残存	出土位置・調整・備考
8	坩	(13.4)	片岩粒 砂礫粒 角閃石	良	外内一橙褐色	35％	調整は外面は口縁部はヨコナデ、体部上半はナデ、下半はケズリ。内面は口縁部はヨコナデ、体部上半はナデ、下半は工具によるナデ。
9	坩	15.8	片岩粒 角閃石	普	外一淡黄褐色 内一暗黄褐色	70％	調整は内外面ともにヨコナデ。
10	坩	(12.5)	雲母粒 片岩粒 共に若干	良	外内一赤褐色	40％	内外面ともにススが付着。 調整は外面は口縁部はヨコナデ、頸部はナデ。内面は口縁部はヨコナデ、頸部は指頭によるナデ。
11	坩	(8.0) 9.6 (3.6)	片岩粒 砂　礫 チャート 鉄質分 雲母粒	普	外一淡褐色 内一淡赤褐色	75％	外面にススが付着。 内面に体部から口縁部にかけてヨゴレが付着。 調整は外面は口縁部はヨコナデ、体部はヘラケズリ、底部はナデ。内面は口縁部はヨコナデ、体部はナデ、体部下半に指頭痕がある。
12	坩	3.4	輝　石 鉄質分	良	外内一淡茶褐色	100％	口縁部と体部の接合部位に余分の粘土が、はみ出すようになっている。 内部はヨゴレにより、暗褐色化している。 調整は外面は体部上半はナデ、体部下半から底部はケズリ。内面は頸部はヨコナデ、体部上位はナデ、それ以下の体部はナデ、底部は指頭によるナデ。
13	坩	(5.3)	角閃石 鉄質分 石　英	普	外一淡赤褐色 内一赤褐色	55％	外面体部下半にススが付着。 内面にややヨゴレが付着。 調整は外面は体部上位はヨコナデ、体部下位から底部までヘラケズリ。内面は体部はヨコナデ、底部は指頭によるナデ。
14	甕	5.0	雲母粒 角閃石 鉄質分	良	外内一赤褐色	60％	内面体部上半までヨゴレが付着。 調整は外面は体部上位はヨコナデ、中位はヨコナデのち工具によるナデ、下位から底部にかけてナデ。内面は体部はヨコナデ、底部はナデ。
15	壺	8.2 6.0 3.2	片岩粒 マンガン粒 鉄質分 砂　礫 白色粒子 角閃石	良	外一赤褐色（内面よりやや薄い） 内一赤褐色	80％	内面体部上半までヨゴレが付着。 外面体部中位に黒斑。 外面の器壁がやや荒れている。 調整は外面は口縁部はヨコナデ、体部上半はナデ、下半はヘラケズリ、底部は指頭によるナデ。内面は口縁部はヨコナデ、体部上半はナデ、下半から底部にかけては指頭によるナデ。
16	壺	(15.4)	片岩粒 鉄質分	普	外内一淡褐色	40％	外面体部にススが付着。 調整は外面は口縁部はヨコナデ、頸部から体部上位はナ

番号	器　種	大きさ	胎　土	焼成	色　調	残存	出土位置・調整・備考
			角閃石				デ、それ以下はヘラケズリ。内面は口縁部はヨコナデ、体部上位は指頭によるナデ、それ以下は木口状工具によるナデ。
17	有脚埦	14.4 19.1 10.4	角閃石 片岩粒 石　英	良	外一赤褐色・暗黄褐色 内一赤褐色	70％	内面体部にはヨゴレ、外面体部中上半にはススが付着。 脚は底部中央ではなくやや偏って、さらに曲がって接合されている。 調整は外面は埦部口縁はヨコナデ、頸部はナデ、体部はケズリ、底部はナデ、脚部はミガキ、裾部はヨコナデ。内面は口縁部はヨコナデ、体部上位は指頭によるナデ、中位以下はナデ、脚部はヘラケズリ、裾部はヨコナデ。
18	高坏	(22.2) 15.3 15.8	鉄質分 片岩粒 角閃石 マンガン粒	普	外内一淡赤褐色	70％	脚裾の内外面の一部にススが付着。 調整は外面は坏部口縁はヨコナデ、底部はナデ、脚部はナデのちヘラミガキ、裾部はヨコナデ。内面は坏部はヨコナデ、坏底部はナデ、脚部は上からヘラナデ、ヘラケズリ、裾部はヨコナデ。
19	高坏	(19.6) 19.7 (14.1)	雲母粒 石　英	良	外内一赤褐色 脚内面一暗赤褐色	45％	脚部内面には明瞭に絞り込み痕が残る。 調整は外面は坏口縁部はヨコナデ、口縁部と底部の接合部はナデ、底部はヘラナデ、脚部はヘラナデ、脚部と裾部の接合部は工具によるナデのちナデ、裾部はヨコナデ。内面は坏口縁部はヨコナデ、底部はナデ、脚部はヘラケズリ、裾部はヨコナデ。
20	高坏	(16.8) 13.7 12.9	鉄質分 マンガン粒 片岩粒 角閃石 石　英	良	外内一赤褐色	70％	脚部内面にタール状のヨゴレが付着。 調整は外面は坏部口縁はヨコナデ、口縁と底部の接合部はナデ、底部はヘラケズリ、坏部と脚部の接合部はナデ。脚部はヘラナデ、裾部はヨコナデ。内面は坏口縁部はヨコナデ、底部はナデ、脚部はヘラケズリ、裾部はヨコナデ。
21	高坏		片岩粒 雲母粒 白色粒子 石　英	良	外内一橙褐色 一部淡橙褐色	50％	脚部内面に絞り込み痕。 調整は外面は坏底部はヘラケズリ、坏部と頸部の接合部は指頭によるナデ、脚部はナデのちヘラミガキ、脚部と裾部の接合部はナデ、裾部はヨコナデ。
22	高坏	(13.1)	鉄質分 片岩粒 角閃石	良	外内一褐色	60％	脚裾部と体部に明瞭に接合痕を残す。 脚部内面に絞り込み痕。 調整は外面は脚部はヘラナデ、脚部と裾部の接合部はナデ、裾部はヨコナデ。内面は裾部上位はナデ、それ以下はヨコナデ。
23	高坏	(13.8)	片岩粒 マンガン粒 鉄質分 白色粒子 角閃石 雲母粒	良	外内一橙褐色	40％	脚部内面に絞り込み痕。 調整は外面は脚部はヘラナデ、裾部はヨコナデ。内面は脚部はヘラケズリ、裾部はヨコナデ。

番号	器種	大きさ	胎土	焼成	色調	残存	出土位置・調整・備考
24	高坏	(13.2)	片岩粒 鉄質分 角閃石	普	外内―淡褐色	55％	脚裾部先端、ヨコナデ時に端部に圧を加え端部下面に段をつくっている。 調整は外面は脚部はヘラナデ、裾部はヨコナデ。内面は脚部は上位からナデ、ヘラケズリ、裾部はヨコナデ。
25	高坏	(14.0)	マンガン粒 鉄質分 角閃石 片岩粒 砂礫	良	外内―淡赤褐色	70％	脚部に絞り込み痕が残る。 調整は外面は脚部から裾部中位までヘラミガキ、裾部下位はヨコナデ。内面は脚部はヘラケズリ、裾部はヨコナデ。
26	高坏	(14.4)	片岩粒 雲母粒 石英 角閃石	良	外内―褐色	40％	調整は外面は脚部はナデ、裾部はヨコナデ。内面は脚部はナデ、裾部はヨコナデ。
27	高坏	(18.8)	マンガン粒 チャート 片岩粒 角閃石	良	外内―赤褐色 一部淡褐色	50％	脚裾部内面にシミ状にススが付着。 調整は外面は脚部はミガキのち一部に棒状の工具を上下に回転させる。裾部はヨコナデ。内面は脚部はヘラケズリ、裾部はヨコナデ。
28	高坏	20.6	鉄質分 角閃石 雲母粒 砂礫粒	普	外内―淡褐色	95％	調整は外面は脚部は横位にナデ、裾部上位は工具によるナデ、裾部それ以下はヨコナデ。内面は脚部はヘラケズリ、裾部はヨコナデ。
29	高坏	(19.6)	雲母粒 片岩粒 鉄質分 角閃石	普	外内―褐色	60％	調整は外面は坏部口縁上半はヨコナデ、下半から底部にかけてナデ。内面は坏部口縁上半はヨコナデ、下半から底部にかけてナデ。
30	高坏	20.0	片岩粒 小礫 角閃石 輝石 雲母粒	良	外内―褐色	70％	内面に黒斑。 調整は外面は口縁部上半はヨコナデで一部ヘラケズリが入る。下半はヘラケズリ、底部は木口状工具によるナデ。
31	高坏	15.8	角閃石 石英 輝石	良	外内―赤褐色	90％	内面にややヨゴレが付着。 調整は外面は坏部口縁中位までヨコナデ、下半から底部にかけてヘラケズリ。内面は口縁部に暗文が残る。底部はナデ。
32	高坏	(18.6)	マンガン粒	良	外―橙褐色 内―淡橙褐色	20％	調整は外面は口縁部はヨコナデ、口縁部と底部の接続部はナデ、底部はケズリ。内面は口縁部はヨコナデ、口縁部と底部の接続部は指頭によるナデ、底部はナデ。
33	甕	21.4	角閃石	普	外―橙褐	65％	体部上半から下半にかけて二次焼成のススが付着。

番号	器　種	大きさ	胎　土	焼成	色　調	残存	出土位置・調整・備考
		23.1 6.6	砂礫粒 鉄質分 マンガン粒 片岩粒		色 内一橙褐色・黄褐色		調整は外面は口縁部はヨコナデ、口縁部下端から頸部にかけてナデ、体部上半はヘラケズリ、下半はナデ、下端はヘラケズリ、底部器接面はヘラケズリ。内面は口縁部はヨコナデ、体部上半から中位まではヘラナデ、中位はナデ、下半は工具によるナデ、底部は指頭によるナデ。
34	甕	7.4	片岩粒 小石 (径5㎜程) 白色粒子	普	外一暗褐色 内一底部は灰褐色 体部は暗灰褐色	40％	外面は二次焼成によってほぼ全体が黒化している。 調整は外面は体部下半はヘラケズリ、底部はナデ。内面は体部下半は木口状工具によるナデ、底部は指頭によるナデ。
35	甕	7.4	石英 鉄質分	良	外内一赤褐色	20％	外面に黒斑。 内面底部にヨゴレが付着。 調整は外面は体部下半はナデ、底部はケズリ。内面は体部下半はナデ、体部下端から底部にかけて工具によるナデ。
36	甕		片岩粒 雲母粒 白色粒子 石英 鉄質分	普	外内一淡橙褐色	60％	内面ほぼ全面にわたってヨゴレが付着。 形態はいびつな楕円形体となっている。 調整は外面は体部下半はヘラケズリ。内面は体部中位は指頭によるナデ、下半はナデ。
37	甕	(8.9) 10.2	鉄質分 白色粒子 角閃石 砂礫粒 石英 片岩粒	普	外一淡赤・赤褐色 内一暗黄褐色 底部は淡赤褐色	55％	内面底部から体部中位（上位は損壊の為不明）に黒斑。 調整・整形など非常に雑につくられている。 調整は外面は口縁部はヨコナデ、体部はヘラケズリ、体部下端はナデ、底部はヘラケズリ。内面は口縁部はヨコナデ、体部上半はナデ、中位はヘラナデ、体部下半から底部にかけてナデのちヘラナデ。
38	台付甕	(9.2)	雲母粒 角閃石 片岩粒 鉄質分	普	外内一赤・褐色 底部は暗褐色	60％	調整は外面は体部と台部の接合部より台部中位までナデ、台部下半はヨコナデ。内面は底部から台部中位まで指頭によるナデ、台部下半はヨコナデ。
39	台付甕	10.0	多量の砂礫 チャート 石英 角閃石	普	外内一赤黄褐色	50％	底部に折り返し痕が明瞭に残る。 調整は外面は台部中位は縦位及び横位のナデ、下位は横位に指頭によるナデ。内面はヘラケズリが行われるがほとんど未調整。
40	甑	5.4	輝石・雲母粒 ともに若干	良	外内一暗赤褐色	15％	外面にはススが付着。 内面にはヨゴレが付着。 底部に焼成後の穿孔がある。 調整は外面は体部下半は縦位にヘラケズリ、底部はナデ。内面は木口状工具によるナデ。

番号	器　種	大きさ	胎　土	焼成	色　調	残存	出土位置・調整・備考
41	甑		鉄質分 角閃石 石　英 片岩粒	良	外一橙褐色・黄褐色 内一橙褐色	10％	調整は外面は体部は指頭によるナデ、把手付け根はナデ、把手は指頭によるナデ。内面は指頭によるナデ。

表―10　第Ⅲ区西側谷出土遺物観察表

番号	器　種	大きさ	胎　土	焼成	色　調	残存	出土位置・調整・備考
1	椀	(14.6)	雲母粒 白色粒子 片岩粒 石　英	良	外一淡赤褐色 内一赤褐色	30％	内面体部に暗文。 調整は外面は口縁部はヨコナデ、体部上半はヨコナデのちヘラミガキ、頸部に工具痕を残す。下半はヘラケズリ。内面は口縁部はヨコナデ、体部上半はヘラミガキ、下半はナデ。
2	高坏	16.2	鉄質分 輝　石 石　英 雲母粒 角閃石	良	外内一赤褐色	80％	外面はやや黒化している。 調整は外面は口縁部はヨコナデ、口縁部と底部の接合部はナデ、底部はヘラケズリ。内面は口縁部はヨコナデ、底部はナデ。
3	甕	13.2	片岩粒 白色粒子 雲母粒 石　英 角閃石	良	外内一淡褐色	50％	調整は外面は口縁部上半はヨコナデ、下半から頸部にかけてナデ、体部上半はナデ、下半はヘラケズリ。内面は口縁部上半はヨコナデ、下半はナデ、体部上位は指頭によるナデ、中位はナデ。

第Ⅳ章　左口遺跡の調査

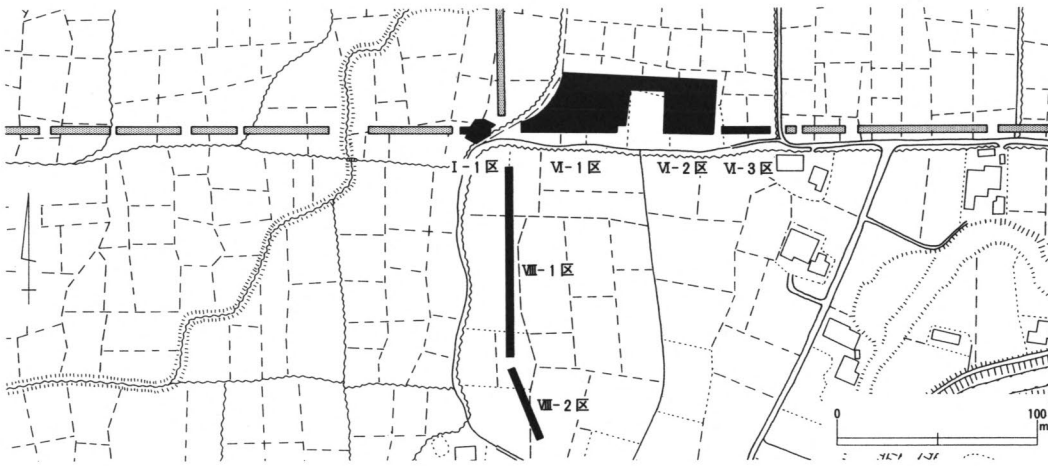
1．遺跡の概要

本遺跡は、埼玉県遺跡地図№54－020に該当しており、遺跡が占地している小字名から左口遺跡と呼称する。

遺跡の立地は、女堀川の右岸に形成された自然堤防上にあたり、特に遺跡の集落跡は、北方に児玉条里が展開する微高地の縁辺部に占地している。現状の地形は、微高地から低地部への地形変化が緩やかでありその違いは不明瞭であるが、土地利用の相違を観ると微高地部は桑畑であり低地部は水田というように明瞭な違いを見せている。

本遺跡からは、古墳時代前期（五領期）の方形周溝墓１基、古墳時代後期（鬼高期）の竪穴式住居址３軒、時期不明４軒の他、土坑51基、垣状遺構２列、溝状遺構39本、鍛冶状遺構跡１基等が検出されている。またこれらの遺構からは五領式、鬼高式などの土器片などが出土している。

調査区は児玉条里内に新設する水路を第Ⅰ区から第Ⅷ区として格子状に設定したが、調査区域内において集落址を検出した児玉条里南側にあたる微高地の部分を左口遺跡として児玉条里遺跡から分離した。また、調査区は幅２ｍの水路部であったが、垣状遺構が２条検出された第Ⅰ－１区と表土剝ぎの際、表土が著しく浅いことが判明した第Ⅵ－１・２区は、圃場整備工事の際に遺構が破壊される恐れがあった為、これらの区域は一部を拡張して調査を行った。また、第Ⅵ－１・２区の間に関してはその接続部に大規模な攪乱があることが判明し調査は行わなかった。



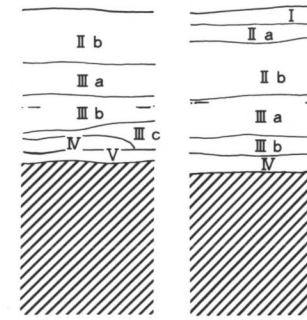
第31図　左口遺跡調査位置図

2．基本土層（第32図）

第32図に示した土層は、本遺跡のⅥ－１区からⅧ－２区にかけての微高地における基本土層図である。

第Ⅵ－１・２区基本土層説明

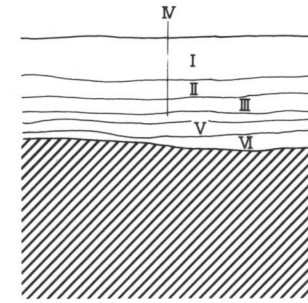
第Ⅰ層	灰色土	（As－A）を多く含み、やや粘性がある。 現代耕作土
第Ⅱa層	灰色土	（As－A）を多く含み、径約1mmの炭化物を多少含む。 近世耕作土
第Ⅱb層	灰褐色土	（As－A）を多く含み、均一でやや粘性がある。 近世耕作土
第Ⅲa層	茶褐色土	径約1～2mmの焼土粒や、（As－B）を多少含む。 中世耕作土
第Ⅲb層	茶褐色土	第Ⅲa層に類似するが（As－B）を多少多く含む。 中世耕作土
第Ⅲc層	茶褐色土	第Ⅲb層・Ⅳ層の中間点様相に（As－B）が混じったものである。 古代耕作土
第Ⅳ層	黄褐色土	ローム漸移層
第Ⅴ層	黄褐色土	ローム最上位層
第Ⅵ層	黄色土	ローム層



No.1（第36図）　No.2（第36図）

第Ⅵ－３区基本土層説明

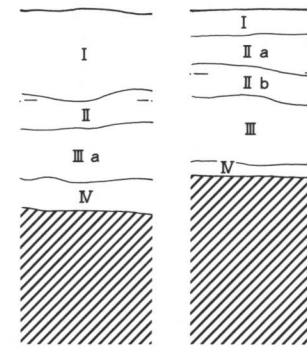
第Ⅰ層	灰色土	（As－A）を多く含み、固く凝固している。 現代耕作土
第Ⅱ層	茶褐色土	旧耕作土層にして、（As－A）を多少含む。 近世耕作土
第Ⅲ層	黄色土	ロームの二次堆積土層。 （以下、軽石は含まない）
第Ⅳ層	黄色土	径約2～5mmのマンガン粒を多く含む。
第Ⅴ層	黄色土	粘性が強く粘土質で、やや多くマンガン凝集粒を含む。
第Ⅵ層	黄色土	第Ⅴ層に準ずるが更に粘土質である。マンガン凝集粒は少ない。



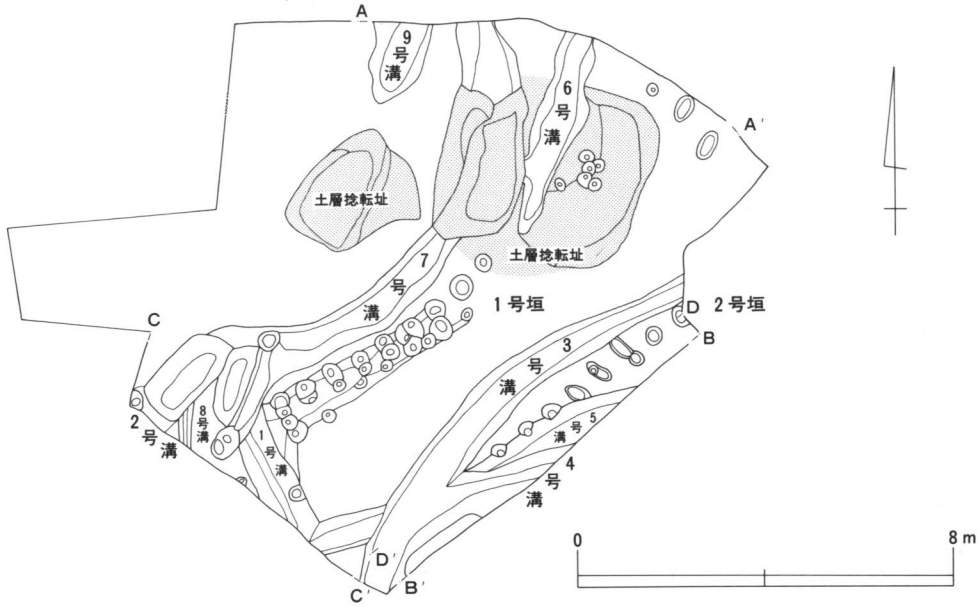
No.3（第44図）

第Ⅷ－１・２区基本土層説明

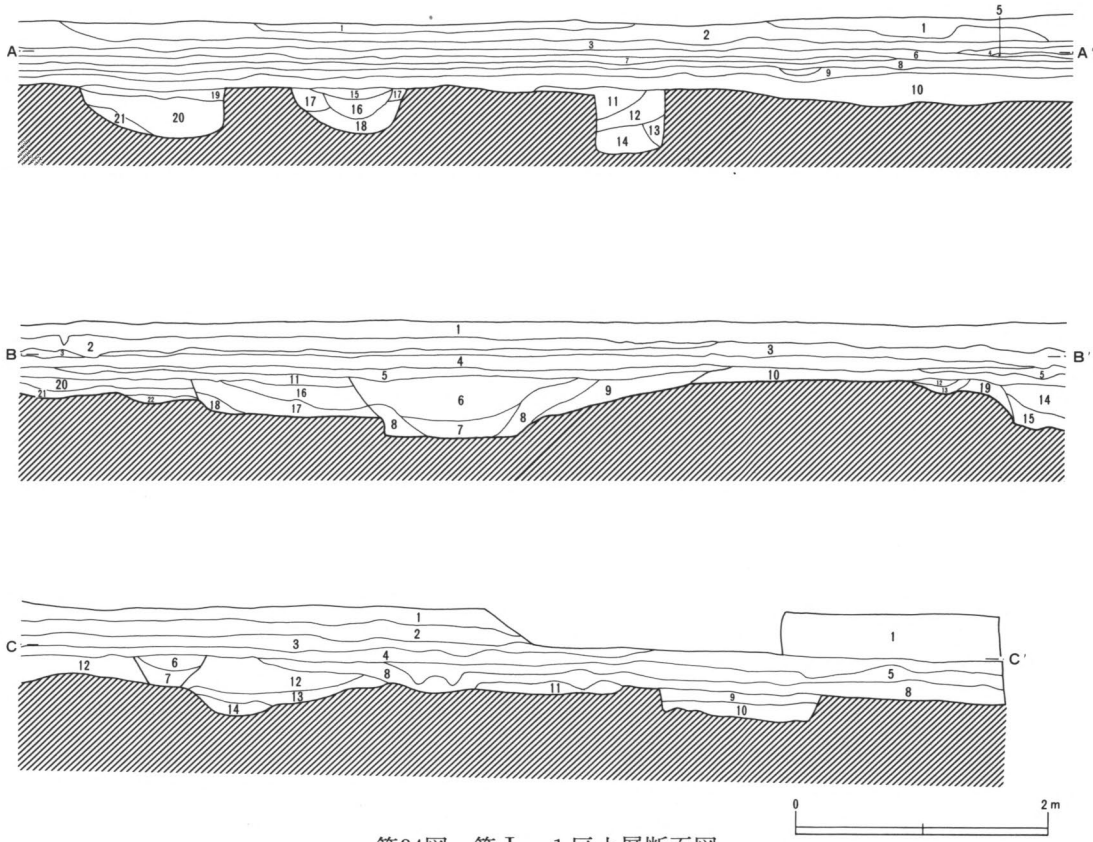
第Ⅰ層	明茶褐色土	圃場整備のための客土
第Ⅱa層	暗褐色土	（As－A）、白色粒子、ローム微粒を含む。しまり良く粘性はない。 現代耕作土
第Ⅱb層	暗茶褐色土	現耕作土（As－A）、ローム粒、白色粒子、小礫を含む。しまり良く粘性を有する。
第Ⅲa層	黒色土	白色粒子を多量に含み、ローム風化土を混入する。しまり弱く粘性はない。
第Ⅲb層	明黒褐色土	白色粒子を少量含み、ローム風化土が混入する。しまり弱く粘性を有する。
第Ⅳ層	暗黄褐色土	ローム層



No.4（第47図）　No.5（第62図）



第33図　第Ⅰ－1区全測図



第34図　第Ⅰ－1区土層断面図

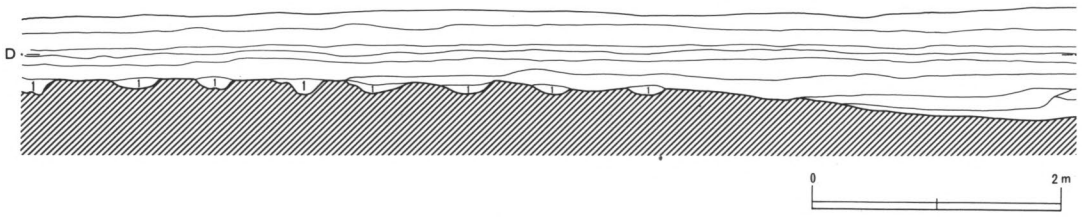
2．遺構の概要

Ⅰ－1区

a．垣状遺構

第1号垣状遺構（第33・35図、図版8－1）

調査区東側に検出された。南西部分は第2、4号および5号溝と重複しているため検出されなかった。方向は調査区を北東から南西へ延びており、現在の地形に沿っている。各ピットの間隔は約25～30cmでほぼ等間隔に配している。各ピットの平面形態は総じて東西に楕円を呈するものがほとんどであるが円形のピットが重複していることも考えられる。規模は平均で長軸60cm、短軸28cmを測る。深さは約8cmと浅く、壁はなだらかに立ち上がる。底面は東側にわずかに傾斜する皿状を呈している。



第35図　第1号垣状遺構土層断面図

第2号垣状遺構（第33図、図版8－1）

調査区ほぼ中央に第3号溝と重複して検出された。南西部分は4号溝と重複しているため、検出されなかった。方向は第6号溝の東側に位置しているピット群を通り、南東から北東へ延びていると考えられる。現在の地形に沿っている。各ピットの間隔は約25～30cmでほぼ等間隔に配している。各ピットの平面形態は東西に円形を呈するものが東西方向に重複しており、ピット列が複数列あると考えられる。規模は、平均で直径36cm前後を測り、深さは約10cmである。壁は、総じてなだらかに立ち上がる。底面は、東側にわずかに傾斜する皿状を呈している。第1号垣状遺構と方向、規模および各ピットの形状ともにほぼ一致している。

b．溝状遺構

第1号溝（第33・34図）

調査区南西側に第7号溝と重複して検出された。方向は調査区を南東から北西であるが、第7号溝より北西側は検出されていない。規模は上幅約80cm、下幅約16cm、深さは最大27cmを測る。壁は緩やかに傾斜して立ち上がり、底面は西側に傾斜している。

第2号溝（第33・34図）

調査区南東側に第4号溝および第5号溝と南側の一部を重複して検出された。方向は調査区を南から北東に延びており、現在の溝に沿っている。壁はほぼ垂直に立ち上がる。規模は上幅約96cm、下幅48cm、深さは最大30.9cmを測る。底面は平坦であるが西側にわずかに傾斜している。

第3号溝（第33・34図）

本址は第7号溝の東側に東側壁を削られる形で検出された。南西側は第1号溝と重複している。方向は調査区を南西から北東へ延びており、現在の溝に沿っている。規模は上幅80cm、下幅32cm、深さは13.7cmを測る。壁は非常に緩やかに立ち上がる。底面は第2号垣状遺構と重複しているため不明である。

第4号溝（第33・34図）

調査区北側に第2号溝と重複して検出された。方向は調査区の南側を西から東へ横切っている。規模は上幅100cm、下幅20cm、深さは最大46.2cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は平坦である。

第5号溝（第33・34図）

調査区南東側に第4号溝と重複して検出された。方向は調査区の南側を南西から東へ横切っている。規模は第4号溝より浅いため、南側壁が削られており、不明である。深さは最大12cmを測る。壁はやや急に立ち上がる。底面はほぼ平坦であると推定される。

第6号溝（第33・34図）

調査区北側に一部が検出された。方向は調査区を南西から北へ延びている。規模は上幅104cm、下幅60cm、深さは55cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦である。

第7号溝（第33・34図）

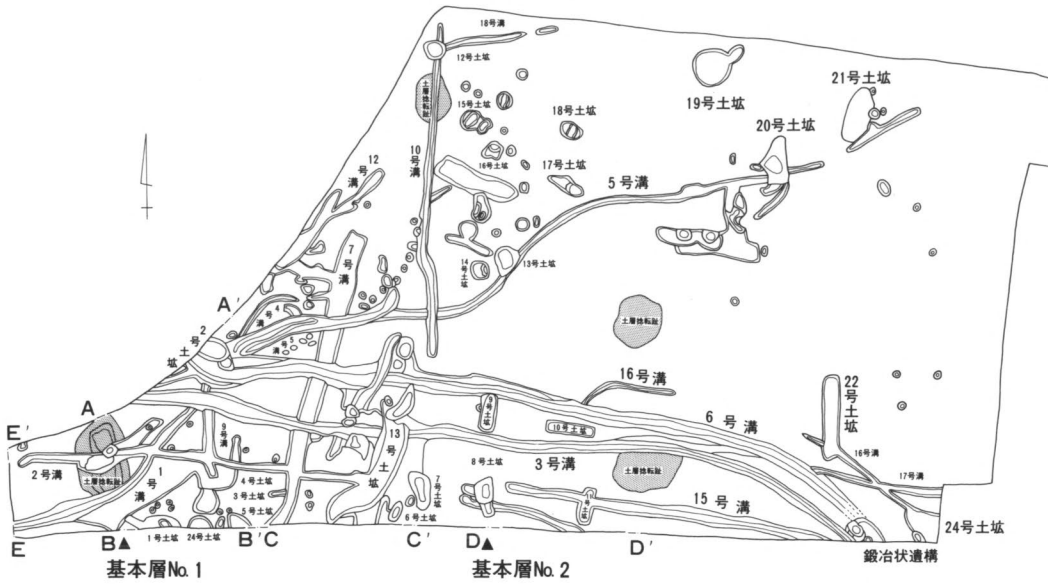
第6号溝の西側に検出された。方向は調査区を南西から北東へ弓なり状を呈して延びており、現在の溝に沿っている。規模は上幅84cm、下幅52cm、深さは29cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦である。

第8号溝（第33・34図）

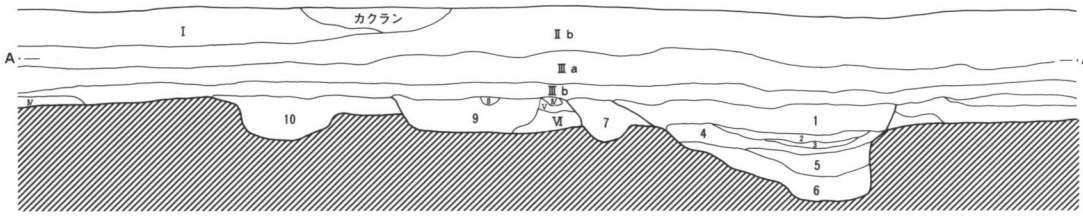
調査区南西部に一部が第7号溝と重複して検出された。方向は調査区を南から北へ延びる。規模は上幅28cm、下幅8cm、深さは9cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は平坦である。

第9号溝（第33・34図）

調査区北側第7号溝の西側に一部が検出された。方向は調査区を南西から北東へ延びている。規模は上幅152cm、下幅72cm、深さは34.6cmを測る。壁は東側は緩やかに立ち上がり、西側はほぼ垂直に立ち上がる。

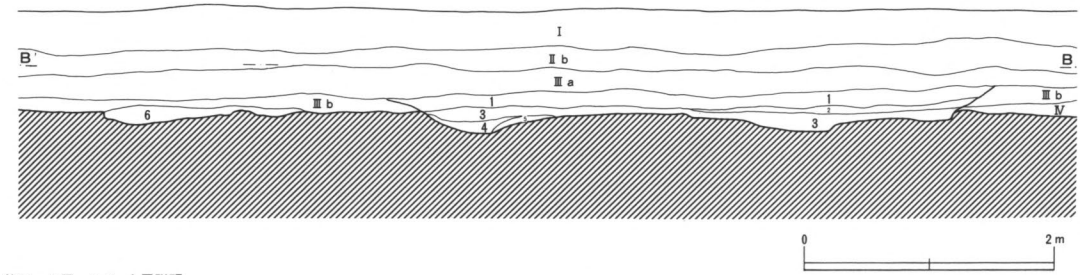


第36図　Ⅵ－１区全測図



第Ⅵ－１区 No.1 土層説明

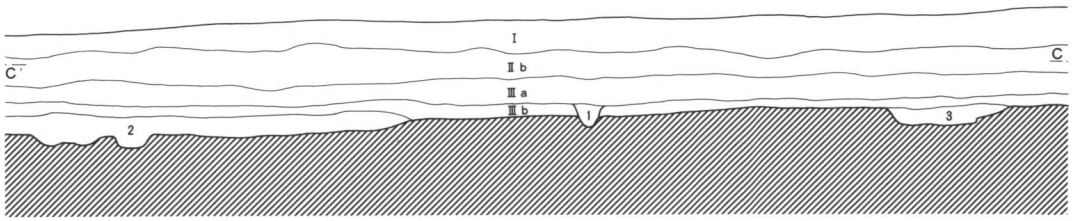
第Ⅱb層　灰褐色土　（As－A）を多く含む。均一でやや粘性がある。近世耕作土。
第Ⅲa層　茶褐色土　径約１～２mmの焼土粒や（As－A）を多少含む。中世耕作土。
第Ⅲb層　茶褐色土　第Ⅲa層に類似するが（As－B）を多少含む。中世耕作土。
第Ⅲc層　茶褐色土　第Ⅲb層、Ⅳ層の中間点様相に（As－B）が混入したものである。古代耕作土。
第Ⅳ層　黄褐色土　ロームの漸移層。
第Ⅴ層　黄褐色土　ローム最上位層。
第Ⅵ層　黄褐色土　ローム層
第１層　黒色土　径約１～５mmのローム風化土粒と径約５～10mmの風化焼土粒を多少含む。しまりはややあり、多少砂質である。
第２層　黒色土　第１層に径約５～20mmのロームブロックが混入したもの。
第３層　黒色土　第１層に準ずるが粘性がややある。
第４層　黒色土　第１層に径約10～20mmのロームブロックが混入したもの。
第５層　黒色土　第１層に径約３～20mmのロームブロックが混入したもの。
第６層　黒色土　第１層に径約５mmのロームブロックが混入したもの。強い粘性を有する。
第７層
第８層　茶褐色砂　（As－B）の純層。
第９層　黒色土　径約５mmのマンガン粒を多く含む。強い粘性をもち、しまりも強い。多少砂質である。
第10層　黒灰色土　径約３mmのロームブロックを多少含み、径約１～５mmの炭化物を多く含む。微砂層で強い粘性をもち、固くしまる。



第Ⅵ－１区　No.2　土層説明

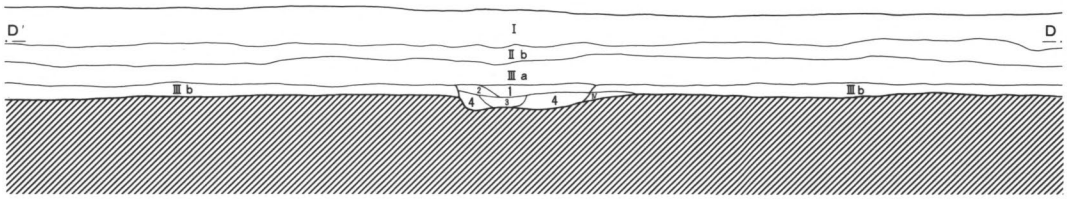
第Ⅰ層　灰色土　（As－A）を多く含む。やや粘性がある。現耕作土。
第Ⅱb層　灰褐色土　（As－A）を多く含む。均一でやや粘性がある。近世耕作土。
第Ⅲa層　茶褐色土　径約１～２mmの焼土粒や（As－A）を多少含む。中世耕作土。
第Ⅲb層　茶褐色土　第Ⅲa層に類似するが（As－B）を多少含む。中世耕作土。
第１層　黒黄色土　第Ⅲb層に類似するが、ローム風化粒を含む。しまりはなく、均一。
第２層　黒黄色土　第１層にローム粒を混ぜたもの。
第３層　黒黄色土　第１層に径約５～20mmの風化ロームブロックがまじったもの。
第４層　黒黄色土　第１層に準ずる。ややローム風化粒が少ない。
第５層　黒黄色土　第２層に準ずる。径約５mmのロームブロックを多少含む。
第６層　黒黄色土　第Ⅳ層を起源とし、径約５～20mmの未風化ロームブロックを多く含む。やや固くしまり、多少砂質で不均一である。

第37図　Ⅵ－１区土層断面図(1)



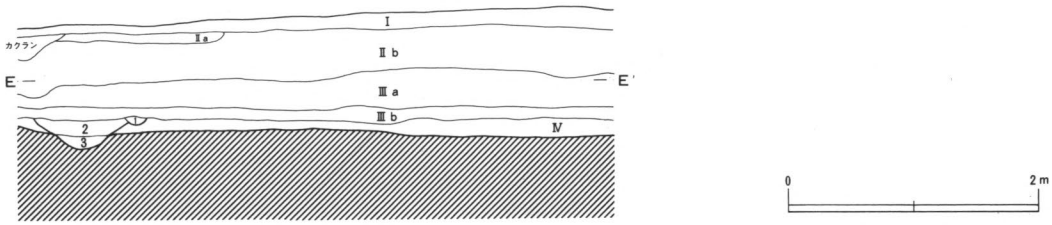
第Ⅵ－1区 No.3 土層説明

第Ⅰ層	灰色土	(As－A) を多く含む。やや粘性がある。現耕作土。
第Ⅱb層	灰褐色土	(As－A) を多く含む。均一でやや粘性がある。近世耕作土。
第Ⅲa層	茶褐色土	径約1～2mmの焼土粒や (As－A) を多少含む。中世耕作土。
第Ⅲb層	茶褐色土	第Ⅲa層に類似するが (As－B) を多少含む。中世耕作土。
第1層	黒色土	第Ⅲb層を起源とする。非常に固くしまる。ロームブロックは含まない。
第2層	黒色土	第Ⅳ層を起源とし、径約5～30mmの風化ロームブロックを多く含む。固くしまる砂質で不均一である。
第3層	黒黄色土	第Ⅳ層を起源とし、径約20～30mmの未風化ロームブロックを含む。砂質で凝固している。



第Ⅵ－1区 No.4 土層説明

第Ⅰ層	灰色土	(As－A) を多く含む。やや粘性がある。現耕作土。
第Ⅱb層	灰褐色土	(As－A) を多く含む。均一でやや粘性がある。近世耕作土。
第Ⅲa層	茶褐色土	径約1～2mmの焼土粒や (As－A) を多少含む。中世耕作土。
第Ⅲb層	茶褐色土	第Ⅲa層に類似するが (As－B) を多少含む。中世耕作土。
第1層	黄褐色土	第Ⅲb層を起源とする。やや砂質で均一である。凝固していない。
第2層	黄褐色土	第1層に径約3mmの風化ロームブロックが混入したもの。
第3層	黄褐色土	第1層に第Ⅳ層がやや混入したもの。
第4層	黒黄褐色土	第Ⅳ層の再堆積土層。固くしまっている。



第Ⅵ－1区 No.5 土層説明

第Ⅰ層	灰色土	(As－A) を多く含む。やや粘性がある。現耕作土。
第Ⅱa層	灰色土	(As－A) を多く含む。径約1mmの炭化物を多少含む。近世耕作土。
第Ⅱb層	灰褐色土	(As－A) を多く含む。均一でやや粘性がある。近世耕作土。
第Ⅲa層	茶褐色土	径約1～2mmの焼土粒や (As－A) を多少含む。中世耕作土。
第Ⅲb層	茶褐色土	第Ⅲa層に類似するが (As－B) を多少含む。中世耕作土。
第Ⅳ層	黄褐色土	ロームの漸移層。
第1層	茶褐色砂	(As－B) の純層。
第2層	黒茶褐色土	第Ⅳ層を成分とする。固く凝固している。
第3層	黒茶褐色土	第2層がややローム質成分を多く含んだもの。

第38図　Ⅵ－1区土層断面図(2)

Ⅵ－１区

a．土　　坑

第１号土坑（第39図）

調査区南壁西側に位置している。平面形態は南側が調査区外に延びているため不明である。規模は東西方向に210cm、深さ10cmを測る。壁は緩やかに立ち上がり、底面は平坦である。

第２号土坑（第39図）

調査区北西壁に第４号溝と重複して検出された。平面形態は、北西側の一部が調査区外に延びているが楕円を呈すると推定される。規模は南北方向に約94cm、深さ約18cmを測る。壁の立ち上がりはやや急な傾斜を持ち、底面は平坦である。

第３号土坑（第39図）

第１号土坑の北東に位置し、第４号土坑の南壁の一部と重複して検出された。平面形態は不定楕円で、規模は南北方向に140cm、東西に最大128cm、深さ約20cmを測る。立ち上がりはやや急な傾斜を持ち、底面は平坦である。

第４号土坑（第39図）

第３号土坑の北に第２号溝と重複されて検出された。平面形態は不定形を呈しており、規模は東西方向最大220cm、深さは８cmを測る。壁は緩やかに立ち上がり、底面は平坦である。

第５号土坑（第39図）

第４号土坑の南に位置している。平面形態は南側が調査区外に延びているため不明である。規模は東西方向に112cm、深さ８cmを測る。壁は緩やかに立ち上がり、底面は平坦である。

第６号土坑（第39図）

第13号溝の東側に位置している。平面形態は楕円を呈し、規模は長軸100cm、短軸64cm、深さ40cmを測る。壁は緩やかに立ち上がり、底面はわずかに東へ傾斜している。

第７号土坑（第39図）

第６号土坑の北東側に位置している。平面形態はほぼ楕円を呈し、規模は長軸198cm、短軸88cm、深さ30cmを測る。西壁は緩やかに立ち上がり東壁は傾斜が強い。底面はわずかに西へ傾斜している。

第８号土坑（第39図）

第７号土坑の東側に位置している。平面形態はほぼ楕円を呈し、規模は長軸140cm、短軸102cm、深さ74cmを測る。東壁はほぼ垂直に立ち上がるが、西壁は緩やかに立ち上がり、底面は平坦である。

第９号土坑（第39図、図版10－１）

第８号土坑と第６号溝との北側の一部と重複して検出された。平面形態は長方形を呈し、規模は長軸108cm、短軸80cm、深さ24cmを測る。壁はやや急に立ち上がる。底面は平坦である。

第10号土坑（第39図、図版10－２）

第３号溝と第６号溝の間に位置している。平面形態は長方形を呈し、規模は長軸260cm、短軸64cm、深さ16cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は平坦である。

第11号土坑（第39図）

第15号溝の西側と重複して検出された。平面形態は長方形を呈し、規模は長軸193cm、短軸80cmを測る。深さ12cmで第15号溝より浅い。壁は緩やかに立ち上がり、底面は平坦である。

第12号土坑（第39図、図版11－１）

調査区北西の隅に第15・18号溝と重複して検出された。平面形態は円形を呈し、規模は直径118cm、深さ30cmで第15、18号溝より深い。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は平坦である。

第13号土坑（第40図）

調査区ほぼ中央西よりに第５号溝と重複して検出された。平面形態はほぼ円形を呈し、規模は南北方向に154cm、東西に138cmを測る。深さは30cmで第５号溝より深い。北西壁はほぼ垂直に、南東壁はやや緩やかに立ち上がる。底面は中央部分がわずかに盛り上がる。

第14号土坑（第40図）

第13号土坑の西側に位置している。平面形態は円形を呈し、規模は直径110cm、深さは最大28cmを測る。壁は西壁中位に平坦部を持ち、その後緩やかに底部へ向かって切り込む。底面は平坦である。

第15ａ・ｂ号土坑（第40図）

調査区北東部に土坑が２つ重複して検出された。平面形態は明確ではない。東側の第15ａ号土坑の規模は、南北方向に約70cm、深さ40cmを測る。東壁はほぼ垂直に立ち上がる。底部は平坦である。西側の第15ｂ土坑の規模は南北に100cm、深さは最大30cmを測る。壁は西壁中位に平坦部を持ち、その後緩やかに切り込む。底面は平坦である。

第16号土坑（第40図）

第15号土坑の南東に位置している。平面形態は不定形で、規模は南北方向に92cm、東西方向最大106cm、深さ最大46cmを測る。北壁はほぼ垂直に、南壁は緩やかに立ち上がる。底面は平坦である。

第17号土坑（第40図）

第16号土坑の南東に位置している。平面形態は不定長方形で、規模は長軸202cm、短軸86cm、深さ最大74cmを測る。南東壁はほぼ垂直に、北西壁は上位に平坦部を持ち、その後、傾斜角度を変えて緩やかに底部へ移行する。底面は平坦である。

第18号土坑（第40図、図版11－２）

第17号土坑の北側に位置している。平面形態は楕円形を呈し、規模は長軸120cm、短軸86cm、深さ最大32cmを測る。壁は総体的にやや急であるが、中位で一旦平坦部を持ち、その後、底部に向けて緩やかに移行する。底面はやや平坦である。

第19号土坑（第40図、図版12－１）

調査区北壁ほぼ中央に位置している。平面形態は不定形で、規模は南北方向に96cm、東西方向最大300cm、深さ20cmを測る。壁はやや急に立ち上がり、底面は平坦である。

第20号土坑（第40図、図版12－２）

第19号土坑の南東に第５号溝と重複して検出された。平面形態は不定形である。規模は南北方向に252cm、東西方向最大158cmを測る。深さは約104cmを測り、第５号溝より深い。東壁はやや急に、西壁は垂直に立ち上がる。底面は平坦である。

第21号土坑（第40図、図版13－１）

第20号土坑の北東にピットと重複して検出された。平面形態は楕円形を呈し、規模は長軸306cm、短軸122cm、深さ40cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦である。

第22号土坑（第40図、図版13－２）

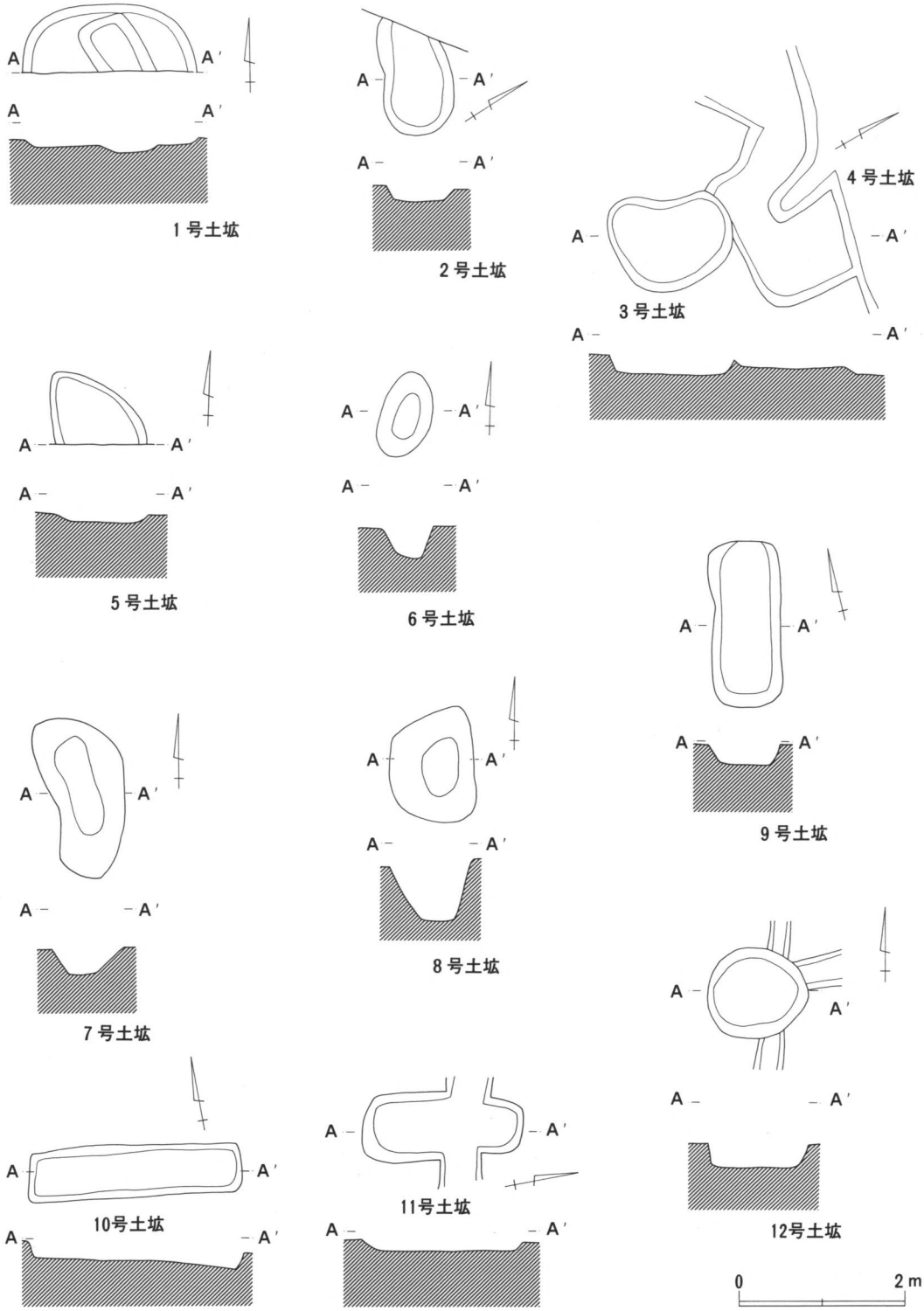
調査区南東に遺構南側を第16号溝と重複して検出された。平面形態は長方形を呈し、規模は長軸454cm、短軸86cm、深さ20cmを測る。壁は緩やかに立ち上がり、底面は平坦である。

第23号土坑（第40図）

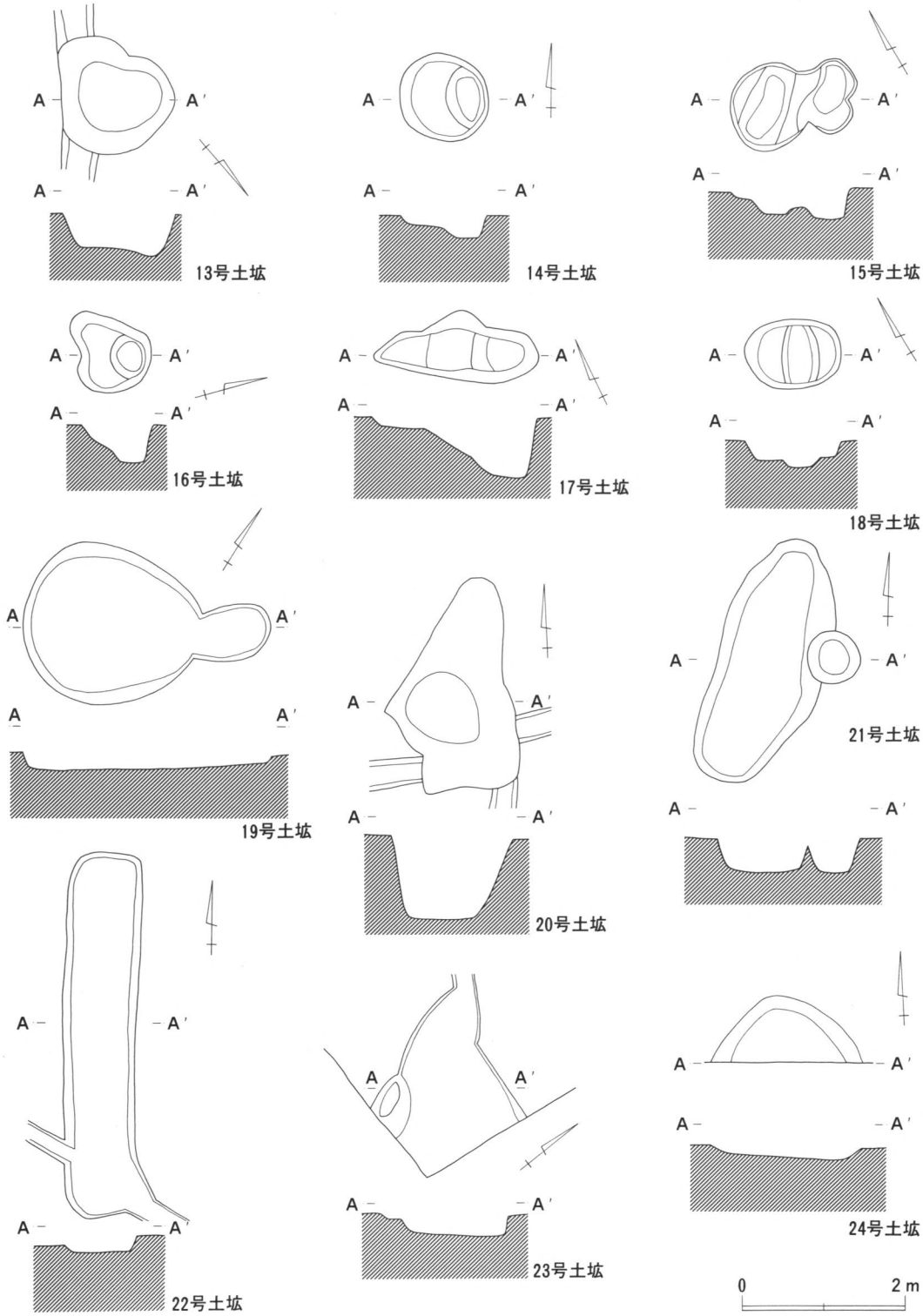
第１号土坑の東側に位置している。平面形態は南側が調査区外に延びているため不明である。規模は東西方向に185cm、深さ14cmを測る。壁は緩やかに立ち上がり、底面は平坦である。

第24号土坑（第40図）

調査区南東隅に第16号溝と重複して北西部分の一部が検出された。遺構の約７割が調査区外のため、平面形態、規模共に不明である。深さは24cmを測り、壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦である。


A
A′
1 号土坑
2 号土坑
3 号土坑
4 号土坑
5 号土坑
6 号土坑
7 号土坑
8 号土坑
9 号土坑
10号土坑
11号土坑
12号土坑
0
2 m

第39図　土坑(1)


A
A′
13号土坑
14号土坑
15号土坑
16号土坑
17号土坑
18号土坑
19号土坑
20号土坑
21号土坑
22号土坑
23号土坑
24号土坑
0
2 m

第40図　土坑(2)

b．溝状遺構（第36・37・38図、図版14、15）

第Ⅵ－１区では第１号溝から第18号溝までが検出された。これら複数の溝は北流する溝と東流する溝に大別できるが、条里の坪線に沿うものは検出されなかった。これら２つに大別した溝のうち、北流する溝は女堀川から堰あげた用水溝として、また東流する溝は排水溝として、利用されていたと推定できるが、それぞれの溝の時期に付いては明確に捉えることはできなかった。

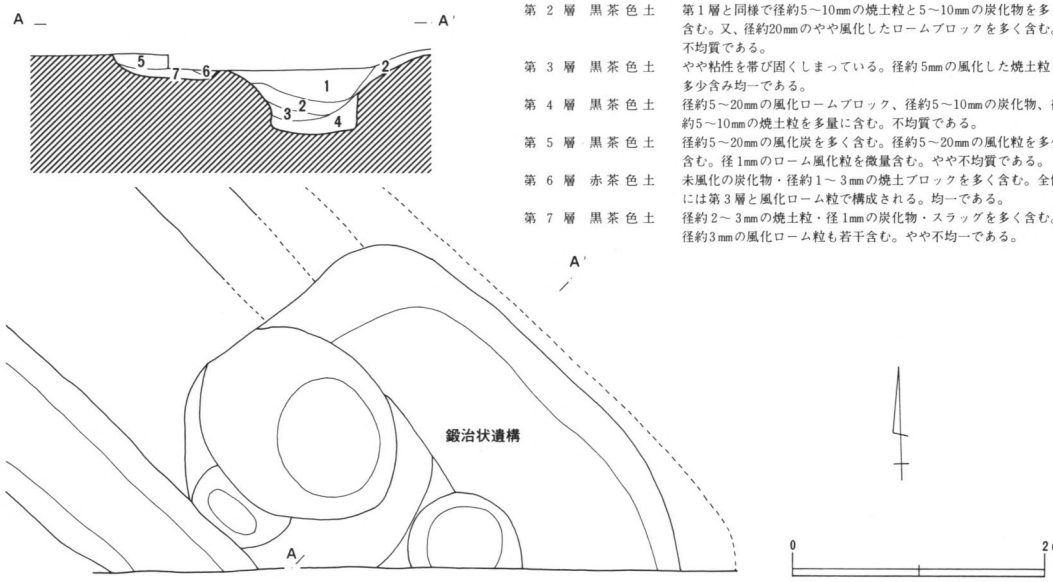
c．鍛冶状遺構（第41図、図版16－１）

調査区南東端近くに検出された。遺構の南側が調査区外に延びており、また西側は第３号溝と重複しているため、形態、規模ともに明確ではない。平面形態は長方形を呈すると推定され、規模は検出部分で北東方向に最大145cm、北東方向に最大165cmを測る。深さは約７cmを測るが、北東部分に焼土を覆土としたピットを有しており、最大で41cmを測る。壁は緩やかに立ち上がり、底面は平坦である。またピットは楕円を呈しており、長軸70cm、短軸60cmを測る。壁は中位までほぼ垂直に立ち上がるが、中位より上層は緩やかに立ち上がる。また、調査区南壁に一部かかるピットが検出されたが、鍛冶状遺構に関連するものかは明確ではない。

遺物は検出されず時期は不明であるが付近の集落に付随する施設、または、児玉条里遺跡に隣接していることから、農作業をする上で鉄製用具等を応急措置的に補修する出先施設であったなどの可能性を考えることができる。

鍛冶状遺構土層説明

第１層	黒茶色土	径約5～20mmの多少風化した焼土粒、径約5～20mmの炭化物を多少含む。径約5mm前後のやや風化したロームブロックを少量含む。やや不均質である。
第２層	黒茶色土	第１層と同様で径約5～10mmの焼土粒と5～10mmの炭化物を多く含む。又、径約20mmのやや風化したロームブロックを多く含む。不均質である。
第３層	黒茶色土	やや粘性を帯び固くしまっている。径約5mmの風化した焼土粒を多少含み均一である。
第４層	黒茶色土	径約5～20mmの風化ロームブロック、径約5～10mmの炭化物、径約5～10mmの焼土粒を多量に含む。不均質である。
第５層	黒茶色土	径約5～20mmの風化炭を多く含む。径約5～20mmの風化粒を多少含む。径1mmのローム風化粒を微量含む。やや不均質である。
第６層	赤茶色土	未風化の炭化物・径約1～3mmの焼土ブロックを多く含む。全体には第３層と風化ローム粒で構成される。均一である。
第７層	黒茶色土	径約2～3mmの焼土粒・径1mmの炭化物・スラッグを多く含む。径約3mmの風化ローム粒も若干含む。やや不均一である。

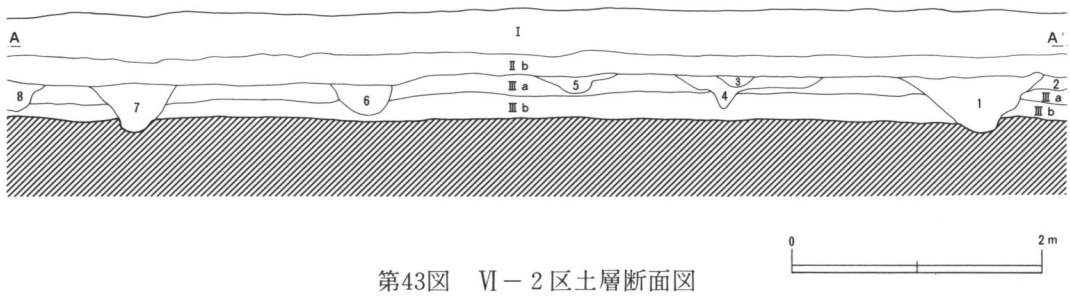


第41図　鍛冶状遺構

第Ⅵ－2区　溝状遺構土層説明

第Ⅰ層	灰色土	(As－A) を多く含む。やや粘性がある。現耕作土。
第Ⅱb層	茶褐色土	(As－A) を多く含む。均一でやや粘性がある。近世耕作土。
第Ⅲa層	茶褐色土	径約1～2mmの焼土粒や (As－A) を多少含む。中世耕作土。
第Ⅲb層	茶褐色土	第Ⅲa層に類似するが (As－B) を多少含む。中世耕作土。
第1層	黒色土	径約3mm程度のローム風化土を多く含む。微砂質で強い粘性をもつ。
第2層	黒色土	第Ⅲa層に類似し、砂質である。
第3層	黒色土	微砂質で鉄斑を多く有する。粘性強い。
第4層	黒色土	微砂質で鉄斑を多く有する。粘性強く、凝固している。
第5層	黒色土	径約1mmの焼土粒を多少含む。粘性は強く、やや凝固している。
第6層	黒色土	第Ⅲa層に径約3mmの焼土粒と径約2mmの炭化物がまじったもの。粘性は強く、均一である。
第7層	黒色土	第Ⅲa層に類似しているが、やや砂質で多少凝固している。

第42図　Ⅵ－2区全測図



第43図　Ⅵ－2区土層断面図

第Ⅵ－2区

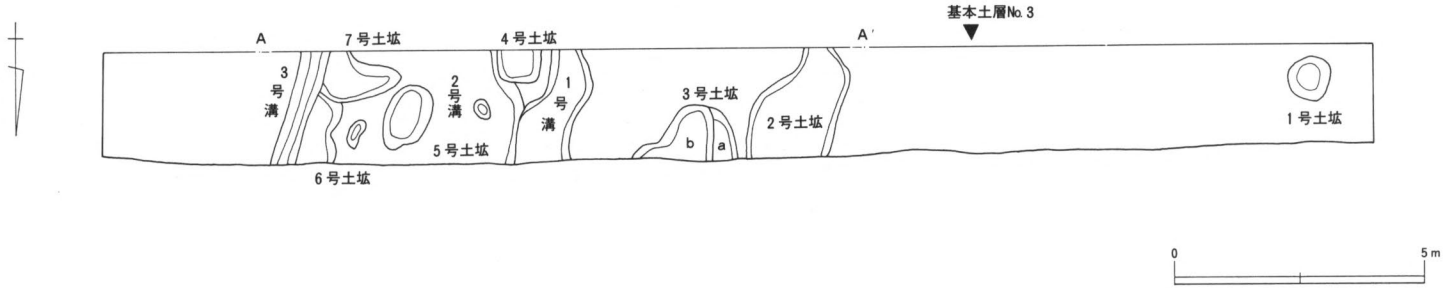
a．溝状遺構

第1号溝（第42・43図）

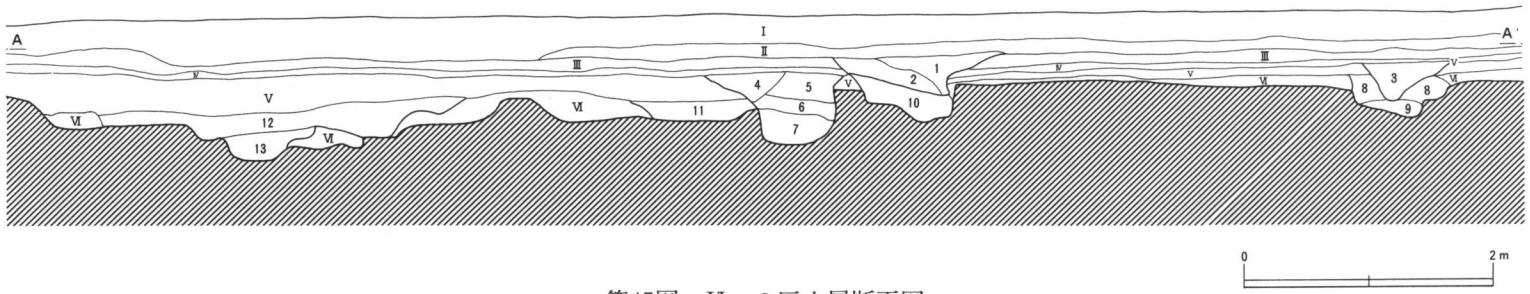
調査区中央に位置している。方向は南から北西へ調査区を横切っている。規模は上幅28cm、下幅10cm、深さ25.5cmを測る。西壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は平坦である。

第2号溝（第42・43図）

調査区東側に位置している。方向は南から北へ調査区を横切っている。規模は上幅24cm、下幅12cm、深さ18cmを測る。西壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は平坦である。



第44図　Ⅵ－３区全測図



第45図　Ⅵ－３区土層断面図

第Ⅵ－３区　土層説明

第Ⅰ層	灰色土	(As－A) を多く含み、固く凝固している。現代耕作土。
第Ⅱ層	茶褐色土	旧耕作土層にして (As－A) を多少含む。近世耕作土。
第Ⅲ層	黄色土	ロームの二次堆積土層（以下、軽石は含まない。）
第Ⅳ層	黄色土	径約２～５mmのやや多くマンガン凝集粒を含む。
第Ⅴ層	黄色土	粘性が強く粘土質で、マンガン凝集粒を含む。
第Ⅵ層	黄色土	第Ⅴ層に準ずるが更に粘土質である。マンガン凝集粒は少ない。
第１層	褐色土	(As－A) を多少含む。粘性があり、固くしまっている。
第２層	褐色土	第１層に径約5～20mmのやや風化したロームブロックが多量に混入したもの。
第３層	黒色土	粘性を帯び、凝固した黒色粘土質の層。
第４層	褐色土	第Ⅴ層を起源とし、やや風化した径約5～20mmの粘土ブロックを多く含む。粘性が強く、固く凝固している。
第５層	褐色土	第４層に類似するがより固く、粘性は弱い。径約3mmのマンガンを少量含んでいる。
第６層	褐色土	第５層に準ずるがロームは少ない。
第７層	黄色土	第Ⅵ層に準ずるが、やや粘性が強い。
第８層	黄色土	第Ⅴ層を起源としてやや砂質である。凝固している。
第９層	黒色土	第８層に類似するが、やや粘土質である。
第10層	褐色土	第２層に比べて (As－A) は少なく、ロールブロックも小さい。
第11層	褐色土	径約5～20mmのロームブロックを多く含む。やや粘性があり、砂質である。
第12層	褐色土	第Ⅲ層に類似する。(As－A) は含まれない。粘性強く、やや凝固している。鉄のしみを多く含む。
第13層	黒褐色土	粘性が強く、凝固していない。

Ⅵ－3区

a．土　　坑

第1号土坑（第46図）

調査区の西端に位置している。平面形態は円形を呈し、規模は直径88cm、深さは最大16cmを測る。壁は緩やかに立ち上がる。底面はU字状を呈している。

第2a・b号土坑（第44・45図）

調査区ほぼ中央に重複して検出された。第2a号土坑は直下の第2b号土坑を切っていることが断面により観察された。第2a号土坑の平面形態は不明であるが、断面観察により底面はV字状を呈していた。第2b号土坑の平面形態は不定形で長軸を南北に持ち、調査区外まで延びている。規模は南北方向165cm、深さは最大17cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がるが、東側の中段に一旦平坦部を持つ。底面は東側に傾斜している。

第3a・b号土坑（第44・45図）

第2号溝の東側に第3b号土坑と重複しており、検出された。第3a号土坑が第3b号土坑を切っており、第3a号土坑の方が新しい。平面形態は不定形をしており、調査区外北側に延びている。規模は南北方向が108cm以上、東西方向に168cm、深さ24cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は平坦である。

第3b号土坑は西壁が検出された。北側が調査区外に延びており、かつ第3a号土坑に大半が切られているため、平面形態、規模とも不明である。深さは16cmを測る。壁は垂直に立ち上がり、底面は平坦であると予想される。

第4号土坑（第44・45図）

第1号溝と第2号溝の間に第2号溝と重複して検出された。遺構の南側約半分程度が調査区外に延びると予想される。第2号溝を切っており、平面形態は方形を呈すると推定される。規模は東西に80cm、深さは最大56cmを測る。壁は断面観察によると中位より上は緩やかに傾斜しているが、中位より下は垂直に切り込む。底面はU字状を呈している。

第5号土坑（第46図）

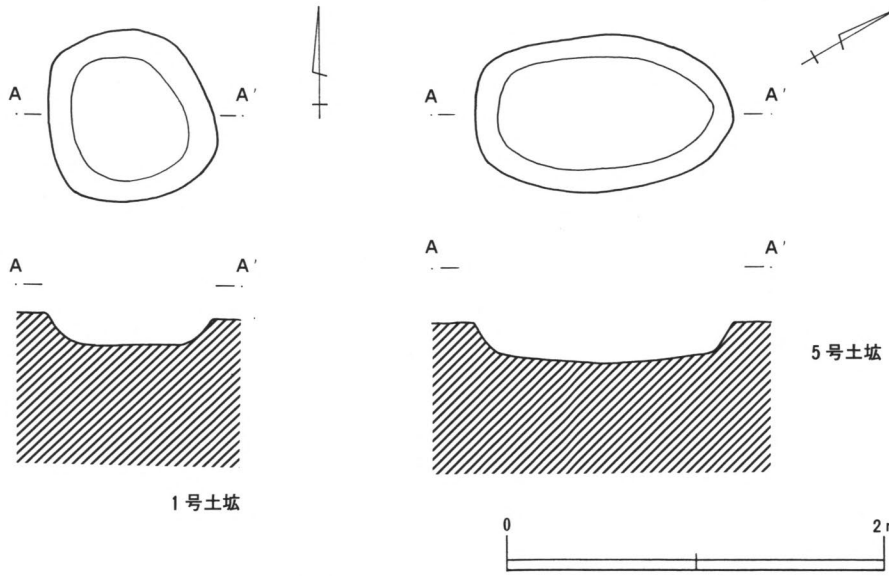
第6号土坑の西側に位置している。平面形態は南北に長軸を持つ楕円形を呈している。規模は長軸120cm、短軸約100cm、深さは最大23cmを測る。壁はなだらかに立ち上がり、底面はU字状である。

第6号土坑（第44・45図）

第5号土坑の西側に位置している。北側の一部が調査区外に延びており、かつ東側部分が第3号溝に切られているため、規模は不明である。平面形態は不定形を示すが2つの土坑の重複の可能性もある。壁は緩やかに立ち上がり、底面はU字状であると推測される。深さは最大で17cmを測る。

第７号土坑（第44・45図）

第６号土坑の南側に位置する。南側の一部は調査区外に延びている。平面形態は不定形である。規模は東西方向に最大188cm、深さは約15cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は東側に傾斜している。



第46図　第１・５号土坑

b．溝状遺構

第１号溝（第44・45図）

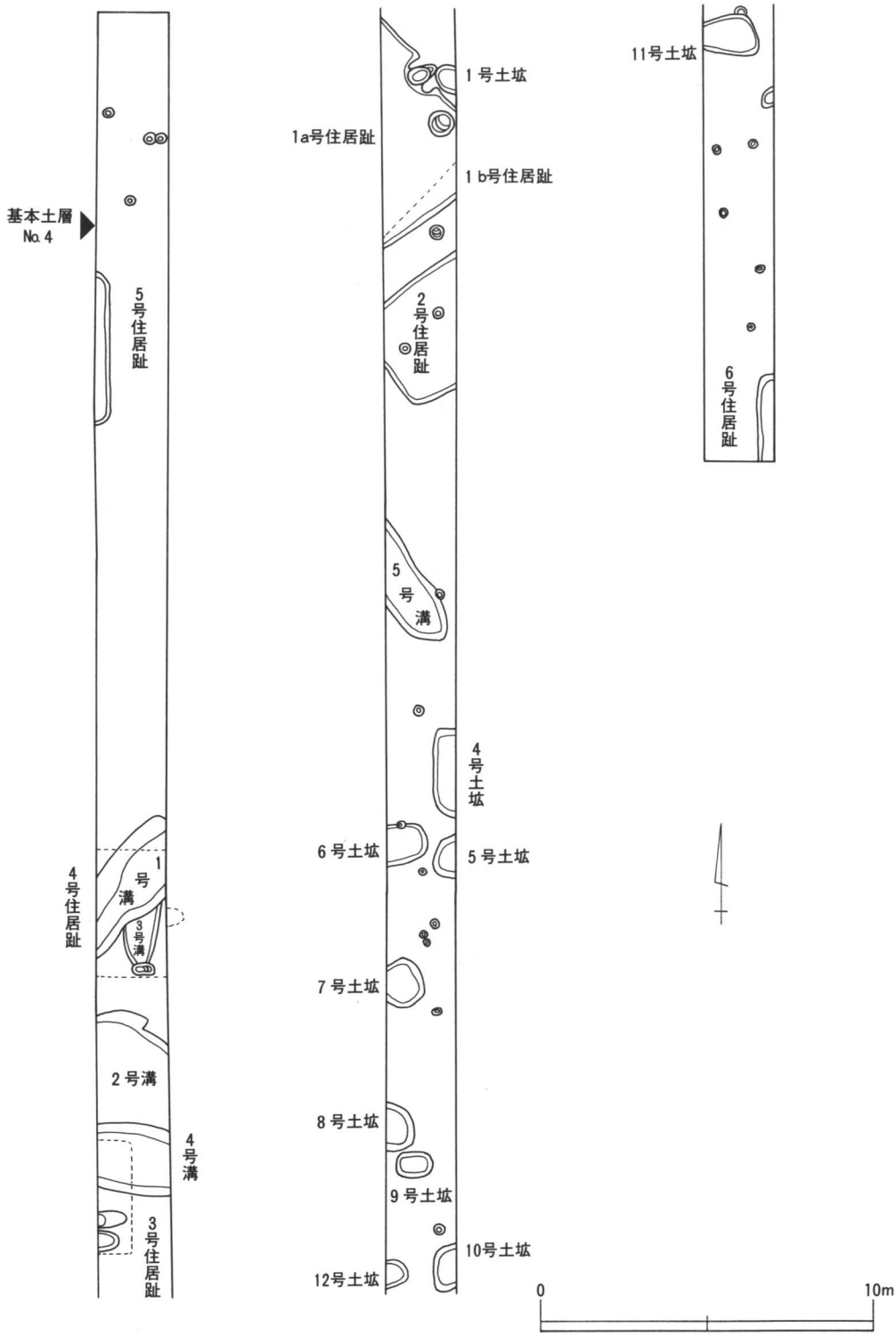
調査区中央のやや東側に位置している。方向は北から南へ調査区を横切っている。規模は上幅100cm、下幅78cm、深さ30cmを測る。西壁はほぼ垂直に立ち上がるが、東壁は中位より上は緩やかに立ち上がり、一旦平坦部を持ち、下部は垂直に立ち上がる。底面は不定形である。

第２号溝（第44・45図）

第１号溝の東側に隣接し、西壁を第１号溝および第４号土坑に切られている。方向は北から南へ調査区を横切る。規模は東壁が検出されなかったため、不明。深さは16cmを測る。壁は緩やかに立ち上がり、底面は平坦である。

第３号溝（第44・45図）

調査区の東側に第６号土坑と重複して検出された。方向は北から南へ調査区を横切る。規模は上幅48cm、下幅24cm、深さ22cmを測る。壁は緩やかに立ち上がり、底面はU字状を呈している。


基本土層
No.4
5号住居趾
4号住居趾
1号溝
3号溝
2号溝
4号溝
3号住居趾
1a号住居趾
1号土坑
1b号住居趾
2号住居趾
5号溝
4号土坑
6号土坑
5号土坑
7号土坑
8号土坑
9号土坑
10号土坑
12号土坑
11号土坑
6号住居趾
0
10m

第47図　Ⅷ－1区全測図

Ⅷ－１区

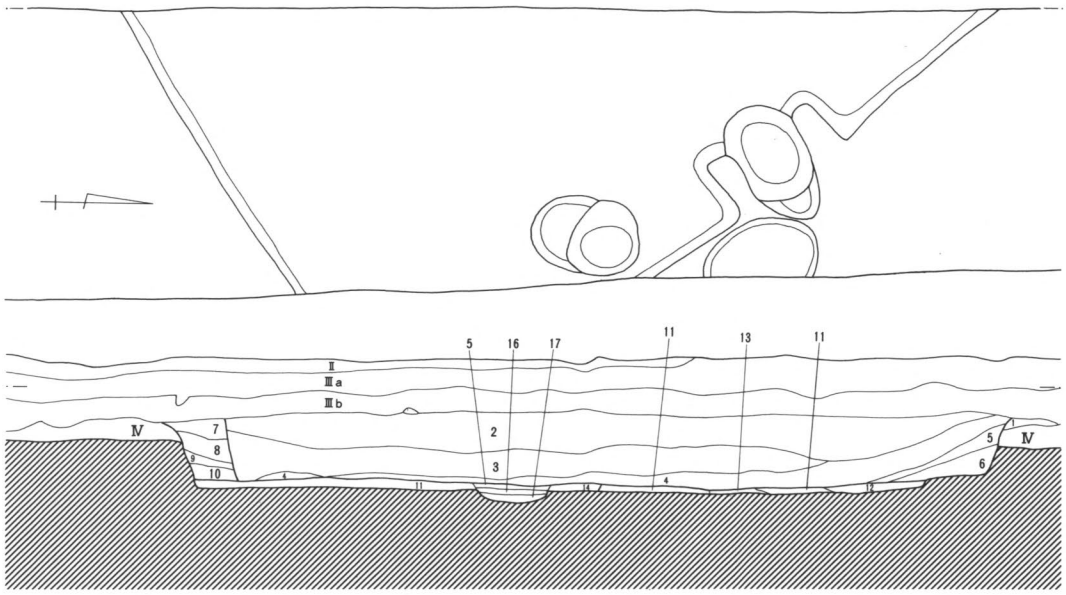
ａ．竪穴式住居址

第１ａ号住居址（第48図、図版18、19）

本址は、調査区のほぼ中央に第１ｂ住居址と重複して検出された。相互の重複関係は、第１ｂ住居址を本址が切っている。本址は南東の端南西壁および北西壁が調査区外に延びているため、規模は不明である。北東壁にカマドを有する。壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高は60cmを測る。床面は良好であった。カマド東側に貯蔵穴が検出されている。壁高および主柱穴は検出されなかった。鬼高期の所産と考えられる。

第１ｂ号住居址（第48図、図版18－１）

本址は、第１ａ住居址と重複して検出された。大部分を第１ａ住居址に切られている。住居形態は不明である。壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高は70cmを測る。壁溝とカマドは検出されていない。床面は掘方を持ち、貼床が施されている。



第48図　第１ａ・ｂ号住居址

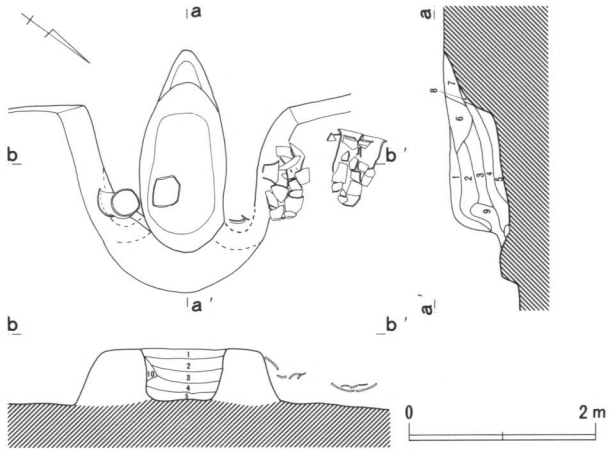
0　2m

第１ａ・第１ｂ号竪穴住居址土層説明

第１層　明褐色土　ローム質で住居の盛土の残りと思われる。
第２層　暗茶褐色土　ローム粒、白色粒子を均一に、小礫を少量含む。しまりは強いが粘性はない。
第３層　暗茶褐色土　ローム粒、白色粒子を均一に含み、ローム風化土が斑点状に混入する。しまり、粘性共に有するが弱い。
第４層　明黒褐色土　ローム粒、ロームブロック、焼土粒、炭化物粒を多く含む。しまり弱く粘性を有する。
第５層　暗茶褐色土　白色粒子、ローム粒、炭化物を多量に含む。しまり弱く粘性もない。
第６層　明褐色土　白色粒子を多量に、ローム粒を少量含み、ローム風化土が混入する。しまり、粘性共にない。
第７層　暗茶褐色土　ローム粒を多量に、白色粒子を少量含み、小砂利が混入する。しまり強く粘性はない。
第８層　暗茶褐色土　ローム粒、白色粒子を均一に含み、小礫、砂利を多く含む。しまり、粘性共に有する。
第９層　明黒褐色土　焼土粒、炭化物粒、白色粒子を含み、小礫が混入する。しまり弱く粘性を有する。
第10層　暗褐色土　ローム粒、白色粒子を少量含み、ローム風化土が混入する。しまり、粘性共に有するが弱い。
第11層　黒褐色土　ローム粒、ロームブロック、炭化物粒を多量に含む。しまり強く粘性を有する。
第12層　明黒褐色土　ローム粒、白色粒子を少量含み、ローム風化土が混入する。しまり弱く、粘性はない。
第13層　明褐色土　ロームブロックを多量に含む。しまりは強いが粘性はない。
第14層　暗茶褐色土　焼土粒、炭化物粒を均一に、ローム粒、白色粒子を微量含む。しまり、粘性共に有する。
第15層　明黒褐色土　ローム粒、ロームブロック、焼土ブロック、白色粒子を均一に含む。しまり、粘性共に有する。
第16層　明灰褐色土　白色粘土を主体とし、焼土が混入する。しまり、粘性共に強い。
第17層　暗茶褐色土　焼土粒、炭化物粒を多量に、ローム粒を少量含む。しまり、粘性共に有するが弱い。

第１ａ号住居址カマド（第49図、図版19－１）

住居址の北東壁の中央に設置されており、遺存状態は普通である。全長は117㎝、幅110㎝を測る。袖部の長さ約60㎝、焚口部は細長く、燃焼部下全体に緩い窪みを有している。



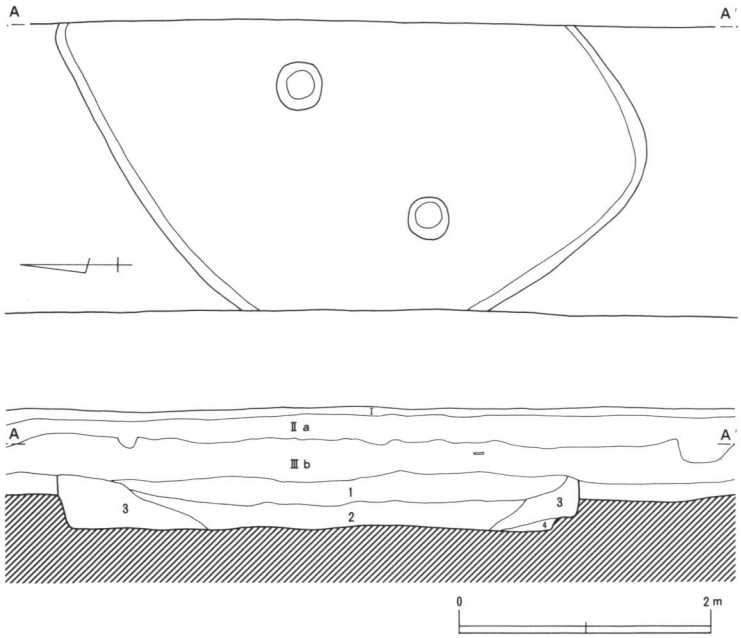
第49図　第１a号住居址カマド

第１ａ号住居址カマド土層説明

第 1 層	暗茶褐色土	焼土粒、ローム粒、白色粒子を均一に、炭化物粒を微量含む。しまりは有するが粘性はない。
第 2 層	明茶褐色土	ローム質土を主体とし、白色粒子を少量含む。しまりは有するが粘性はない。
第 3 層	暗橙褐色土	焼土粒、焼土ブロック、ローム粒、白色粒子、炭化物粒を含む。しまり、粘性共にない。
第 4 層	明黒褐色土	炭化物粒、焼土粒、灰分を多量に、ローム粒を小量含む。しまり、粘性共にない。
第 5 層	暗赤褐色土	焼土を主体として大量の灰分及び少量の炭化物粒を含む。しまり、粘性共にない。
第 6 層	茶 褐 色 土	焼土粒を多量に、ローム粒、白色粒子、炭化物粒を少量含む。しまりは有するが粘性はない。
第 7 層	暗橙褐色土	第３層に類似するが焼土ブロックの含有量が多い。
第 8 層	暗黄褐色土	灰分を多量に、焼土粒を少量含む。しまり、粘性共にない。
第 9 層	暗茶褐色土	組成は第２層に類似するがローム質土が少ない。
第 10 層	橙 褐 色 土	焼土粒、ローム粒、炭化物粒を多量に含む。しまり、粘性共にない。

第２号住居址（第50図、図版20－１）

本址は、第１号住居址の南側に検出された。第１ａ号住居址と同じ主軸をもつ。住居形態は東西に主軸をもつ長方形を呈する。規模は南北方向360㎝、壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高は20㎝を測る。床面の状況は比較的良好である。主柱穴が住居址の主軸方向に２本検出されている。鬼高期の所産と考えられる。



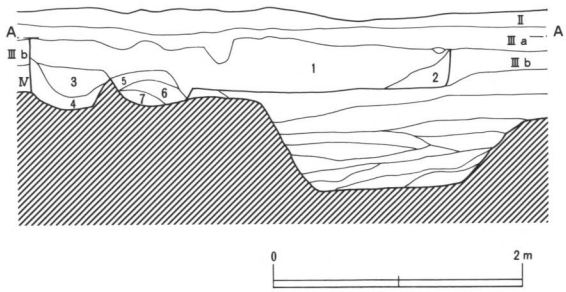
第２号住居址土層説明

第 1 層	明黒褐色土	ローム粒、白色粒子、火山灰を均一に含む。しまりはあるが粘性はない。
第 2 層	暗茶褐色土	ローム粒、ロームブロックを多量に含み、小砂利が混入する。しまり、粘性共に有するが弱い。
第 3 層	暗茶褐色土	ローム粒、小砂利を多量に、ロームブロック、白色粒子を少量含む。しまり、粘性共に有するが弱い。
第 4 層	明 褐 色 土	ローム風化土を主体とし、ロームブロックが混入する。しまり、粘性共にない。

第50図　第２号住居址

第３号住居址（第51図）

本址は、第１号住居址の北側に第４号溝と重複して検出された。完全に埋没した第４号溝覆土の上層を掘り込んで構築されている。住居址の覆土は、小砂利が多く含まれており水路や河川などの氾濫によって埋没したと推定される。遺構西側の大部分は調査区外に延びているため、調査は全体の１割程度に留まった。住居形態および規模は共に不明である。壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高は30cmを測る。



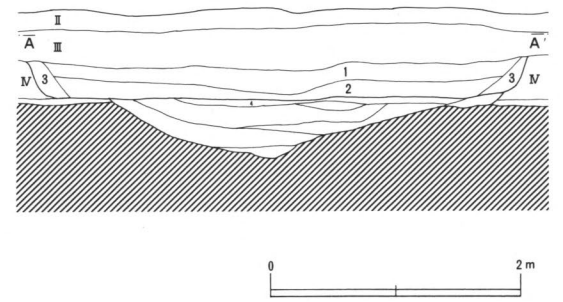
第51図　第３号住居址土層断面図

第３号住居址土層説明

第１層	暗褐色土	白色粒子、火山灰を均一に、小礫、小砂利を多量に含む。しまりは有するが粘性はない。
第２層	茶褐色土	小礫、小砂利を多量に、白色粒子を少量含む。しまりは有するが粘性はない。
第３層	明黒褐色土	ローム粒、ロームブロック、白色粒子を少量含む。しまりは有するが粘性は弱い。
第４層	暗茶褐色土	ローム粒、白色粒子を多量に含む。しまり、粘性共に有するが弱い。
第５層	暗橙褐色土	焼土粒、焼土ブロックを含み、白色粒子が混入する。しまりは有するが粘性はない。
第６層	暗茶褐色土	炭化物粒、灰分を均一に、焼土粒を少量含む。しまり弱く粘性はない。
第７層	暗赤褐色土	焼土主体の層。

第４号住居址（第52図）

本址は、第２号溝の北側の第１号溝と重複して検出された。完全に埋没した第１号溝の上層を掘り込んで構築されている。住居址の覆土は、小砂利が多く含まれており水路や河川などの氾濫によって埋没したと推定される。遺構西側の大部分は調査区外に延びているため、調査は全体の１割程度に留まった。住居形態および規模は共に不明である。壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高は36cmを測る。



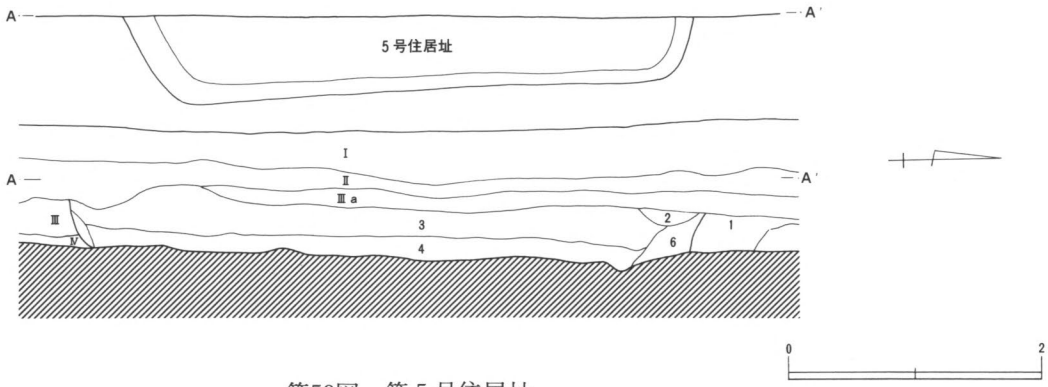
第52図　第４号住居址土層断面図

第４号住居址土層説明

第１層	黒褐色土	小砂利を多量に、火山灰、白色粒子を均一に含む。しまり弱く粘性はない。
第２層	明黒褐色土	小砂利を多量に、白色粒子、ローム粒子を均一に、焼土粒、炭化物粒を微量含む。しまり弱く粘性はない。
第３層	暗茶褐色土	小砂利を多量に、ローム粒、白色粒子、火山灰を少量含む。しまり、粘性共に有するが弱い。
第４層	黒褐色砂礫	黒褐色土を多く含み、ロームが混入する。貼床的である。

第５号住居址（第53図）

本址は、調査区の北西側に東壁が検出された。住居址西側の大部分は調査区外に延びているため、調査は全体の約２割程度に留まった。規模は東壁の長さが約4.4mで、周辺の状況から判断すると、方形を呈すると予想される。壁は緩やかに立ち上がり、壁高は42cmを測る。壁溝は断面観察により南側に検出された。主柱穴、貯蔵穴は検出されていない。



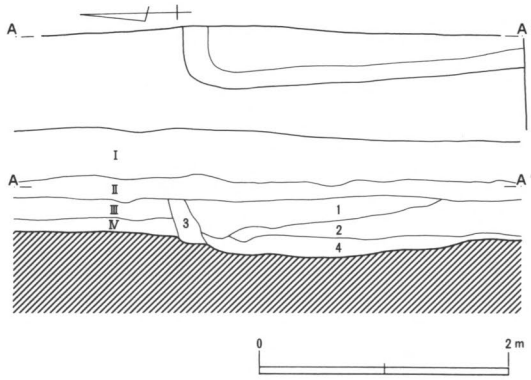
第53図　第５号住居址

第５号住居址土層説明

第 1 層	黒褐色土	ローム粒、白色粒子を少量含み、ローム土が混入する。しまり、粘性共に有する。
第 2 層	明黒褐色土	ローム土を多量に混入する。しまりは強く粘性は弱い。
第 3 層	黒褐色土	白色粒子、ローム粒を少量含む。しまり弱く粘性はない。
第 4 層	黒褐色土	白色粒子、ロームブロックを少量含む。第３層よりしまりは有するが粘性はない。
第 5 層	暗茶褐色土	白色粒子を少量、ローム粒を微量含む。しまりは有するが粘性はない。
第 6 層	茶褐色土	ローム粒を少量、砂利を多量に含む。しまりは有するが粘性はない。

第６号住居址（第54図）

本址は、調査区の南東端に西壁の一部が検出された。遺構の大部分は調査区外に延びているため、調査は全体の１割程度に留まった。住居形態、規模と共に不明である。壁は緩やかに傾斜して立ち上がる。壁高は34cmを測る。床面は掘方を持ち、貼床が施されている。貯蔵穴、主柱穴ともに検出されなかった。



第54図　第６号住居址

第６号住居址土層説明

第 1 層	暗茶褐色土	ローム粒を均一に、白色粒子を少量含み、ローム風化土が混入する。しまりは強いが粘性はない。
第 2 層	黒褐色土	ローム粒、ロームブロックを少量、炭化物粒を微量含む。しまり、粘性共に有する。
第 3 層	明黒褐色土	ロームブロック、ローム粒を多量に、炭化物粒を少量含む。しまりは良いが、粘性弱い。
第 4 層	暗黄褐色土	ロームブロック、ローム粒を主体として、黒色土が混入する。しまり、粘性共に強い。

b．土　　坑

第１号土坑（第55図、図版20－１）

第１号住居址のカマドの東側に検出された。東側の一部が調査区外に延びている。平面形態は円形または楕円形を呈すると予想される。規模は南北に100cm、深さ48cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は平坦ではない。

第２号土坑（第55図）

断面観察により、第２号住居址と重複して検出された。第２号住居址に切られている。平面形態、規模共に不明。深さは20cmを測る。壁はなだらかに立ち上がり、底面は平坦である。

第３号土坑（第55図）

断面観察により、第１ｂ号住居址と重複して検出された。第１ｂ号住居址に切られている。平面形態、規模共に不明。深さは28cmを測る。壁は緩やかに立ち上がり、底面は平坦である。

第４号土坑（第55図）

第５号溝の南側に位置している。平面形態は方形を呈すると予想されるが、東側が調査区外に延びているため、明確ではない。規模は南北方向が240cm、深さは50cmを測る。北壁はほぼ垂直に立ち上がるが、南壁は緩やかに立ち上がる。底面は北側に傾斜している。

第５号土坑（第55図）

第４号土坑の南側に位置している。東側部分が調査区外に延びているため、平面形態は不明であるが、規模は南北方向に約130cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は平坦である。

第６号土坑（第56図）

第５号土坑の西側に位置している。平面形態は方形を呈すると予想されるが、遺構の西側が調査区外に延びているため、明確ではない。規模は南北方向が約120cm、深さは約38cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面はおおむね平坦である。

第７号土坑（第56図）

第５号土坑の南側約３ｍに位置する。平面形態はほぼ正方形を呈する。規模は一辺約140cm、深さは約10cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は平坦である。

第８号土坑（第56図）

第７号土坑の南側約３ｍに位置する。西側の部分は調査区外に延びており、平面形態は不明である。規模は南北方向が136cm、深さ22cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は平坦である。

第９号土坑（第56図）

第８号土坑の東南に位置する。平面形態は方形を呈する。規模は長軸が100cm、短軸が80cm、深さは最大10cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面はほぼ平坦である。

第10号土坑（第56図）

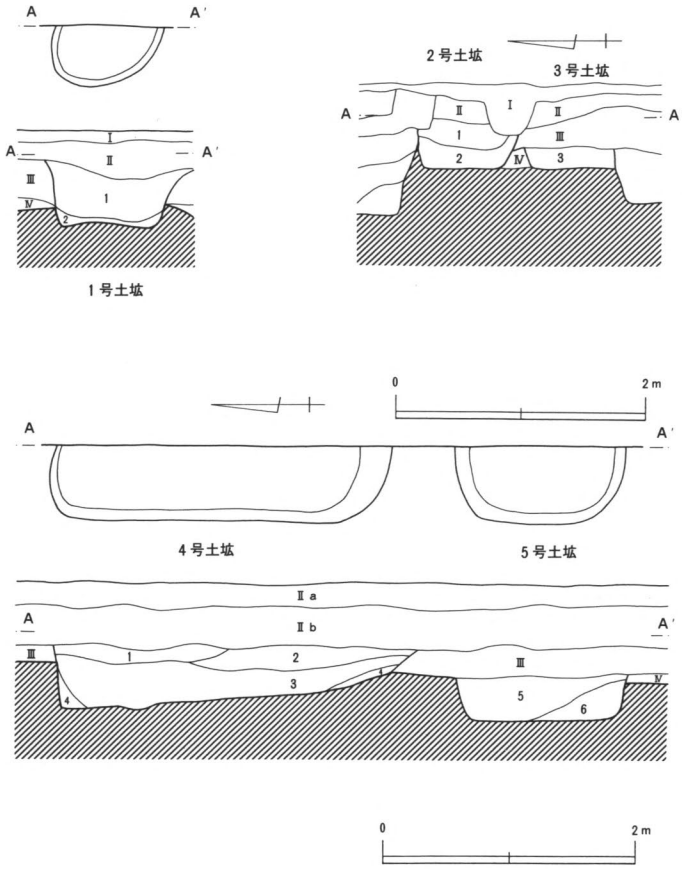
第９号土坑の南東側に位置する。東側の部分は調査区外に延びており、平面形態は不明である。規模は南北方向に136cm、深さ29cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は平坦である。

第11号土坑（第56図）

第12号土坑の南側に位置する。西側の一部が調査区外に延びている。平面形態は楕円を呈すると予想される。規模は長軸が不明、短軸が160cm、深さ30cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面はほぼ平坦である。

第12号土坑（第56図）

第10号土坑の西側に位置する。西側の部分は調査区外に延びており、平面形態は不明である。規模は南北方向が80cm、深さ29cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は平坦であるが２cm程度中央に向い傾斜する。



第１号土坑土層説明

第１層	明黒褐色土	白色粒子、火山灰を均一に、ローム粒を微量含む。しまり、粘性共に有する。
第２層	暗褐色土	ローム風化土を主体とし、白色粒子を混入する。しまりは有するが粘性はない。

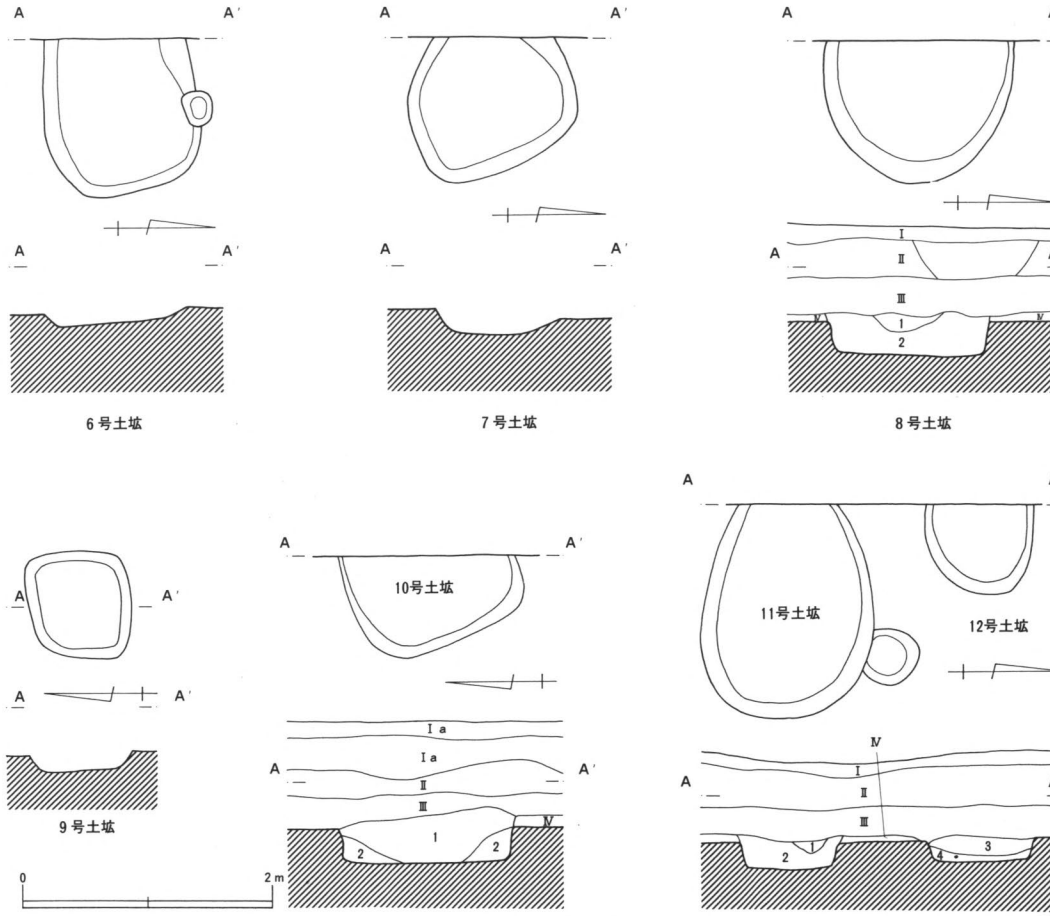
第２・３号土坑土層説明

第１層	暗褐色土	白色粒子、ローム粒を微量含み、小砂利を多量に混入する。しまり弱く粘性はない。
第２層	明黒褐色土	ローム粒、白色粒子、砂利を含み、ローム風化土を混入する。しまり、粘性共に有するが弱い。
第３層	明黒褐色土	ローム粒を均一に、白色粒子を微量に含む。しまり、粘性共に有するが弱い。

第４・５号土坑土層説明

第１層	暗褐色土	白色粒子を多量に、ローム粒を少量含む。しまり強く粘性は弱い。
第２層	明黒褐色土	白色粒子、ローム粒を少量含み、暗褐色土が混入する。しまり強く粘性を有する。
第３層	黒褐色土	ローム粒、白色粒子、炭化物粒を少量含み、ローム風化土が混入する。しまり、粘性共に有する。
第４層	暗茶褐色土	ローム風化土を主体とし、黒色土が混入する。しまりは有するが粘性はない。
第５層	明黒褐色土	ローム粒、ロームブロック、炭化物粒を多量に含む。しまりは有するが粘性はない。
第６層	暗茶褐色土	ローム粒、ロームブロックを大量に含む。しまりは有するが粘性はない。

第55図　土坑(1)



第56図　土坑(2)

第８号土坑土層説明

第 1 層	暗茶褐色土	ローム粒、ロームブロック、白色粒子、赤色粒子を均一に含む。しまりは強いが粘性はない。
第 2 層	茶褐色土	ローム粒、ロームブロックを多量に、白色粒子を少量含む。しまり、粘性共に有する。

第10号土坑土層説明

第 1 層	茶褐色土	ローム粒、ロームブロックを大量に、白色粒子を微量含む。しまりは有するが粘性はない。
第 2 層	明黒褐色土	ローム粒、白色粒子、炭化物粒を少量含む。しまり、粘性共に有するが弱い。

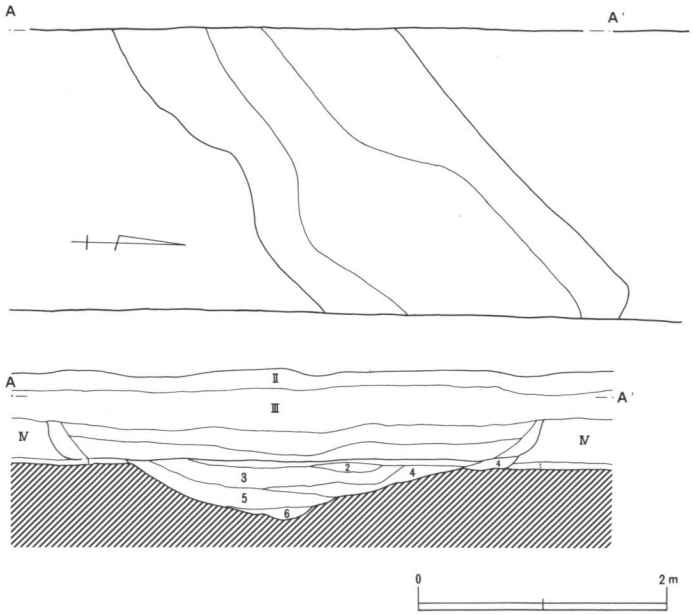
第11・12号土坑土層説明

第 1 層	暗黒褐色土	ローム粒、白色粒子を微量含む。しまり、粘性共に有する。
第 2 層	暗黄褐色土	ロームの二次堆積層。
第 3 層	暗茶褐色土	ローム粒、ロームブロックを多量に、白色粒子を少量含む。しまり、粘性共に有する。
第 4 層	明黒褐色土	ローム粒、炭化物粒を含み、ローム風化土が混入する。しまり、粘性共に有するが弱い。

c．溝状遺構

第１号溝（第57図、図版21－１）

調査区北側に位置し、西側は第４号住居址と東側は第３号溝と重複して検出された。方向は調査区を北東から南西へ横切っている。規模は上幅約200cm、下幅約120cm、深さは最大50cmを測る。壁は傾斜して立ち上がり、底面はＶ字形を呈している。



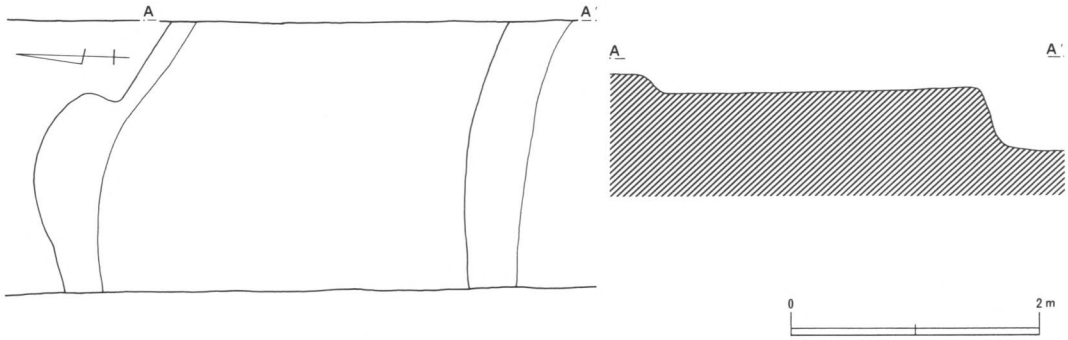
第１号溝土層説明

第１層	暗茶褐色土	礫を多く含み、全体的に砂質である。
第２層	明褐色砂礫	砂利、砂の割合が約半々。
第３層	茶褐色砂礫	砂利、小礫主体の層。
第４層	茶褐色砂礫	第３層に類似するが礫は大きく、砂は細かい。
第５層	明褐色砂礫	砂主体の層。
第６層	茶褐色砂礫	砂主体の層。第５層より砂粒が荒い。

第57図　第１号溝遺構

第２号溝（第58図、図版21－２）

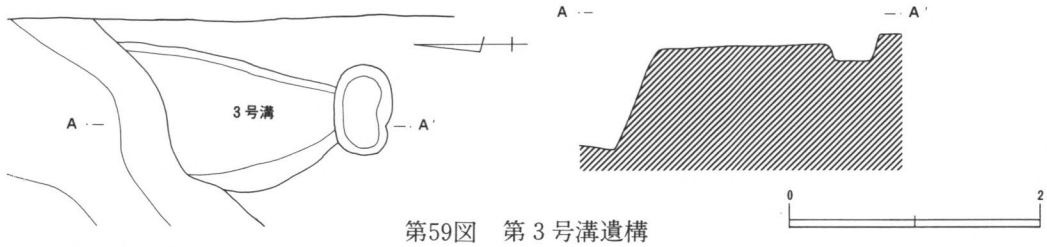
第１号溝の南側で第４号溝と重複して検出された。方向は調査区を南東から北西へ横切っている。規模は不明である。深さは最大20cmを測る。壁は緩やかに傾斜して立ち上がり、底面は平坦である。



第58図　第２号溝遺構

第３号溝（第59図）

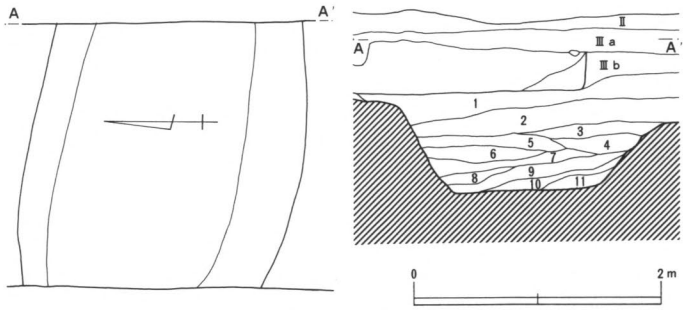
本址は、第１号溝と重複して検出された。第１号溝に切られている。方向は調査区を北から南へ延びているが、上部構造は削られており、検出できなかった。規模は上幅105cm、下幅96cm、深さは18cmを測る。壁は非常に緩やかに立ち上がり、底面はU字状を呈すると予想される。



第59図　第３号溝遺構

第４号溝（第60図）

本址は、第２号溝と重複して検出された。第２号溝の南壁を切っている。方向は調査区を東から西へ横切っている。規模は上幅220cm、下幅140cm、深さは最大72cmを測る。壁はなだらかに立ち上がり、底面は平坦であり、擦鉢状を呈している。



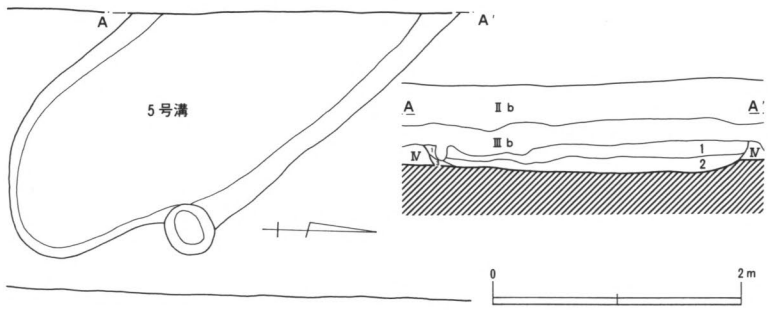
第60図　第４号溝遺構

第４号溝土層説明

第１層	茶褐色砂礫	白色粒子を含む。粒が大きく荒く、砂利の割合が多い。
第２層	灰褐色砂礫	第１層よりきめ細かな砂層を含むが、砂利の割合が多い。
第３層	褐色砂	小礫、砂利を少量含むが、砂の割合が多い。
第４層	明褐色砂礫	第３層に類似するが、砂利の割合が多い。
第５層	明褐色砂	完全な砂層。きめ細かく砂利は含まない。
第６層	黄褐色砂	少量の小砂利を含む。第５層より少々荒い。
第７層	茶褐色砂礫	砂と砂利の割合が程等しい。
第８層	茶褐色砂	完全な砂層。第５層より砂粒はやや大きい。
第９層	黒褐色砂礫	小砂利が多く、小礫も多少含む。
第10層	茶褐色砂礫	砂の割合が多く、少々荒い。
第11層	茶褐色砂	完全な砂層。砂粒の大きさは第５層と第８層の中間。

第５号溝（第61図）

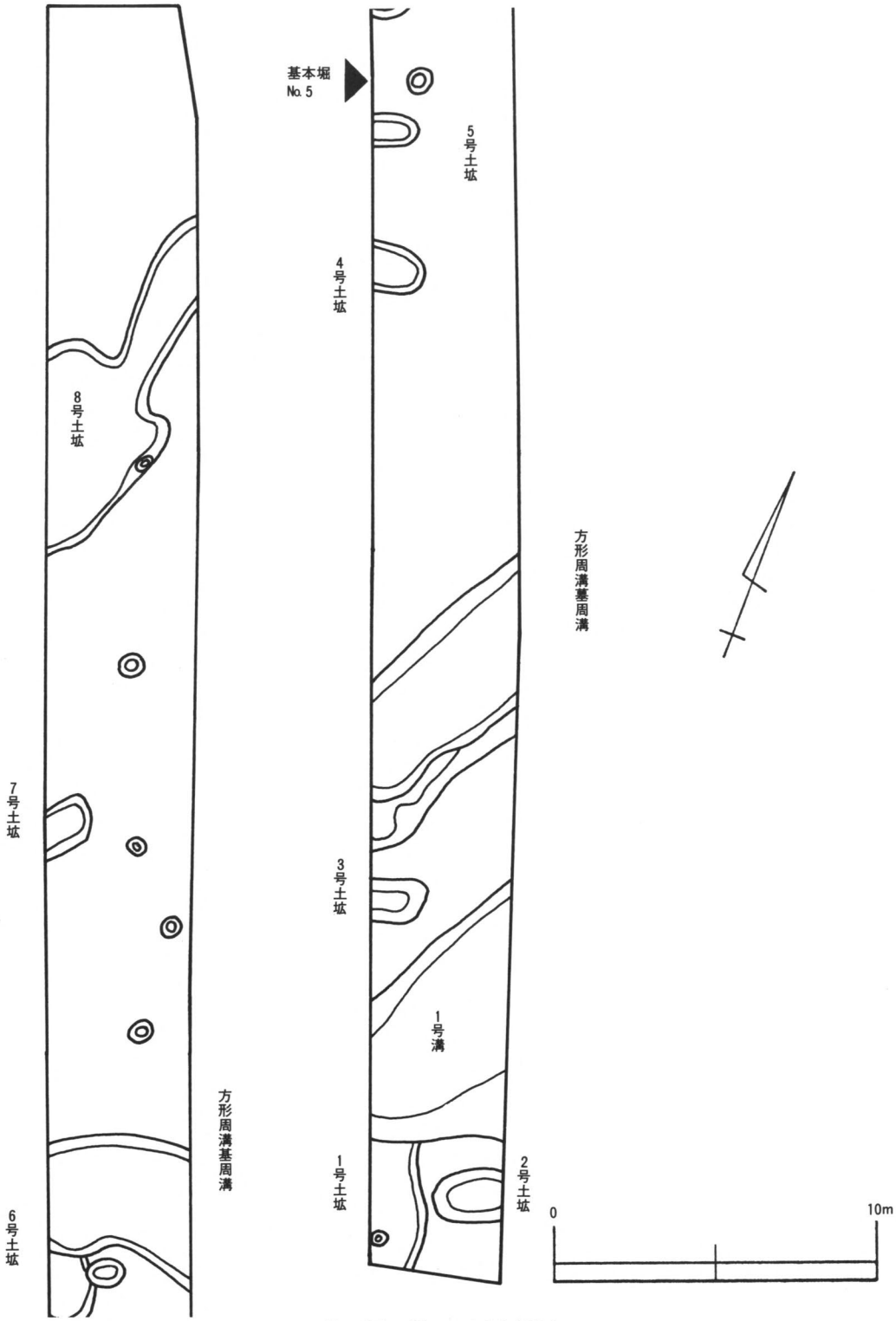
本址は、第２号住居址南側に位置している。方向は調査区を北西から南東へ横切ると予想されるが、上部が削られているため明確ではない。規模は上幅180cm、下幅140cm、深さは最大30cmを測る。壁は緩やかに立ち上がる。底面はほぼ平坦であるが、北側に10cmほど緩やかな傾斜を持つ。



第61図　第５号溝遺構

第５号溝土層説明

第１層	明黒褐色土	白色粒子、ローム粒、火山灰を均一に含む。しまりは強いが粘性は弱い。
第２層	黒褐色土	ローム粒、白色粒子を含み、ローム風化土が少量混入する。しまり、粘性共に有するが弱い。
第３層	暗茶褐色土	ローム風化土を多く含む。しまりは有するが粘性はない。


基本堀
No. 5
5号土坑
4号土坑
8号土坑
方形周溝墓周溝
7号土坑
3号土坑
1号溝
方形周溝墓周溝
1号土坑
2号土坑
6号土坑
0
10m

第62図　Ⅷ－２区全測図

Ⅷ－２区

ａ．土　　坑

第１号土坑（第62・63図）

調査区の南端に位置している。南側および西側が調査区外に延びており、かつ第１号溝に切られている。平面形態および規模は不明。深さ28cmを測る。壁はなだらかに立ち上がり、底面は平坦である。

第２号土坑（第62・63図）

第１号土坑の東側に位置している。平面形態は楕円形を呈すると予想されるが、東側が調査区外に延びているため、明確ではない。規模は南北方向が88cm、深さは22cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は平坦である。

第３号土坑（第62・63図）

方形周溝墓の周溝と第１号溝の間に位置している。平面形態は楕円形を呈すると予想されるが、西側の一部が調査区外に延びている。規模は南北方向が64cm、深さは22cmを測る。壁は緩やかに立ち上がる。底面はほぼ平坦である。

第４号土坑（第62・63図）

方形周溝墓の南側周溝の北側約６ｍに位置する。西側部分が調査区外に延びているため、平面形態は不明である。規模は南北方向に68cm、深さは約15cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は東側に傾斜する。

第５号土坑（第62・63図）

第４号土坑の北側に位置する。西側部分が調査区外に延びているため、平面形態は不明である。規模は南北方向に40cm、深さは約33cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面はＵ字状を呈する。

第６号土坑（第62・63図）

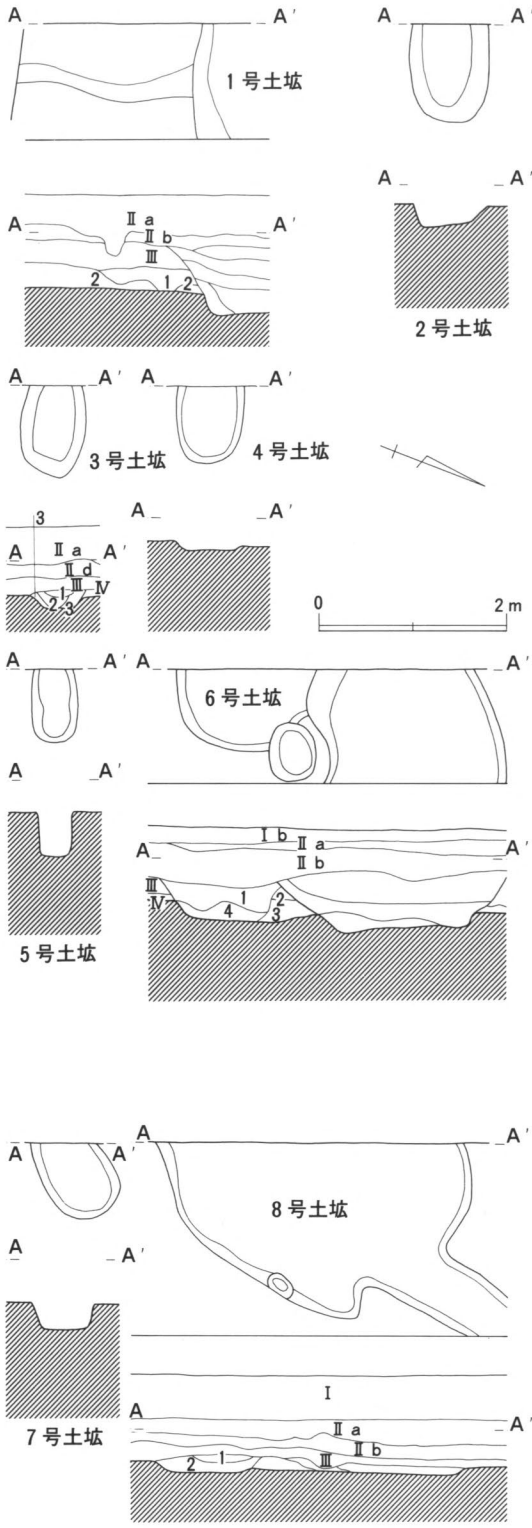
方形周溝墓の北側周溝と重複して検出された。西側部分が調査区外に延びているため、平面形態、規模共に不明である。深さは８cmを測る。壁は緩やかに立ち上がり、底面は平坦である。

第７号土坑（第62・63図）

第２号溝の南側約４ｍに位置する。西側部分が調査区外に延びているため、平面形態は不明である。規模は南北方向に78cm、深さは約15cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は南側に傾斜する。

第８号土坑（第62・63図）

調査区北側に第２号溝と重複して検出された。第２号溝を切って構築されている。西側部分が調査区外に延びているため、平面形態は不明である。規模は南北方向に260cm、深さは70cmを測る。壁はなだらかに立ち上がり、底面はほぼ平坦である。



第63図　土坑

第1号土坑土層説明

第 1 層	黒褐色土	ローム粒を多量に含み、ローム粒子、白色粒子を少量含む。しまりは強いが粘性は少ない。
第 2 層	暗黄褐色土	ローム風化土主体の層。黒色土を斑点状に含む。

第3号土坑土層説明

第 1 層	暗茶褐色土	ローム粒、白色粒子を含み、ローム風化土を混入する。しまりは有するが粘性はない。
第 2 層	明褐色土	ロームブロックを多量に含み、ローム風化土を混入する。しまり、粘性共に有する。
第 3 層	明黒褐色土	白色粒子、ローム粒を少量含む。しまり、粘性共に有する。

第6号土坑土層説明

第 1 層	暗茶褐色土	ローム粒、白色粒子を少量含み、ローム風化土を斑点状に混入する。しまり良く粘性を有する。
第 2 層	明褐色土	ローム粒を多量に、白色粒子、炭化物粒を微量含む。しまり、粘性共に強い。
第 3 層	明黒褐色土	ローム粒を少量、白色粒子を微量含む。しまり良く粘性を有する。
第 4 層	暗茶褐色土	火山灰を多量に、ローム粒を少量含み、ローム風化土を多量に混入する。しまり、粘性共に有する。

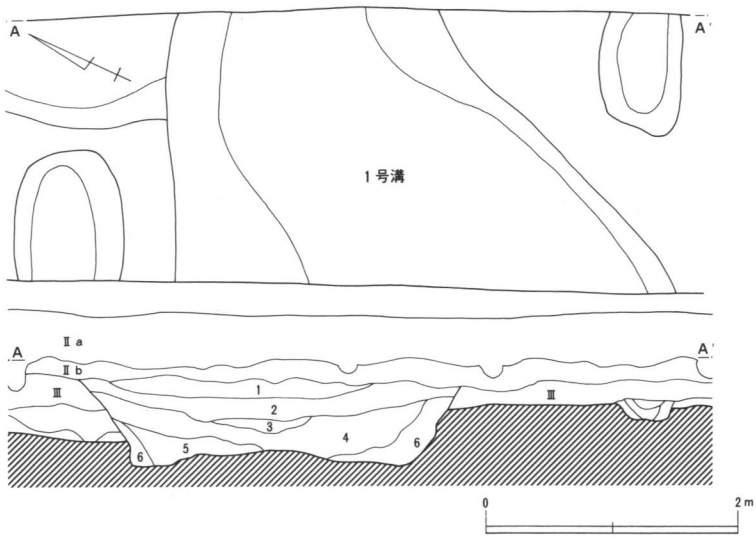
第8号土坑土層説明

第 1 層	黒褐色土	白色粒子を含み、ローム風化土を斑点状に混入する。しまり良く粘性を有する。
第 2 層	暗茶褐色土	ローム粒、白色粒子を多量に、ローム風化土を混入する。しまり良く粘性を有する。
第 3 層	明褐色土	ローム粒、白色粒子を多量に、炭化物粒、火山灰を少量含む。しまり、粘性共に有する。
第 4 層	茶褐色土	ローム風化粒を主体とし、白色粒子、炭化物粒を微量含む。しまり、粘性共に有する。
第 5 層	暗茶褐色土	ローム粒、白色粒子を均一に、炭化物粒を微量含む。しまり、粘性共に有する。

b．溝状遺構

第１号溝（第62・64図）

調査区南側に第１号土坑と重複して検出された。方向は調査区を北東から南西へ横切る。規模は上幅320cm、下幅210cm、深さ最大70cmを測る。壁は緩やかに立ち上がり、底面は中央がやや盛り上がる形を呈している。



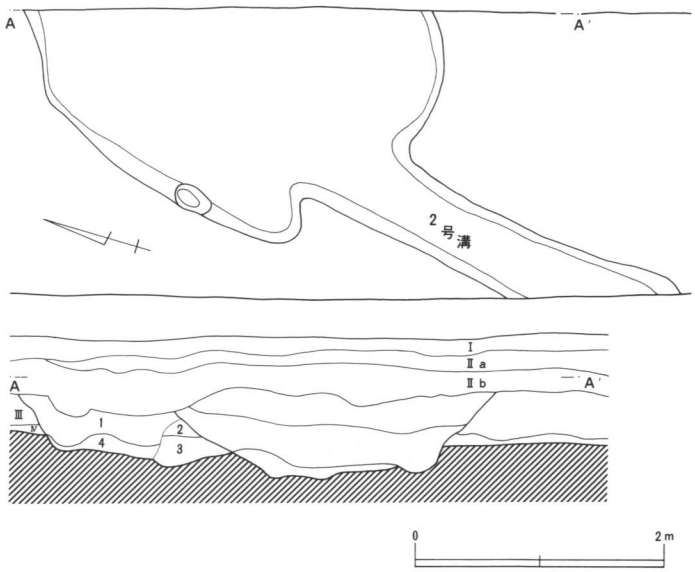
第１号溝土層説明

第１層	暗茶褐色土	ローム粒、白色粒子を均一に、炭化物粒を少量含む。しまり、粘性共に有するが弱い。
第２層	明黒褐色土	火山灰を多量に、ローム粒、白色粒子を少量含む。しまりは弱いが粘性は強い。
第３層	暗茶褐色土	ローム粒を多量に含み、ローム風化土が混入する。しまり、粘性共に有する。
第４層	黒褐色土	ローム粒、白色粒子を少量含む。しまりは弱く粘性を有する。
第５層	暗茶褐色土	ローム粒、ロームブロックを多量に含む。しまりは強く粘性を有する。
第６層	暗茶褐色土	ローム粒、ロームブロックを均一に含むが、第５層より量は少ない。しまり、粘性共に有する。

第64図　第１号溝遺構

第２号溝（第62・65図、図版22－１）

第８号土坑と重複して検出された。南西部分を第８号土坑に切られている。方向は調査区を南西から北東へ横切っている。規模は上幅78cm、下幅44cm、深さは40cmを測る。壁は傾斜して立ち上がり、底面は平坦である。

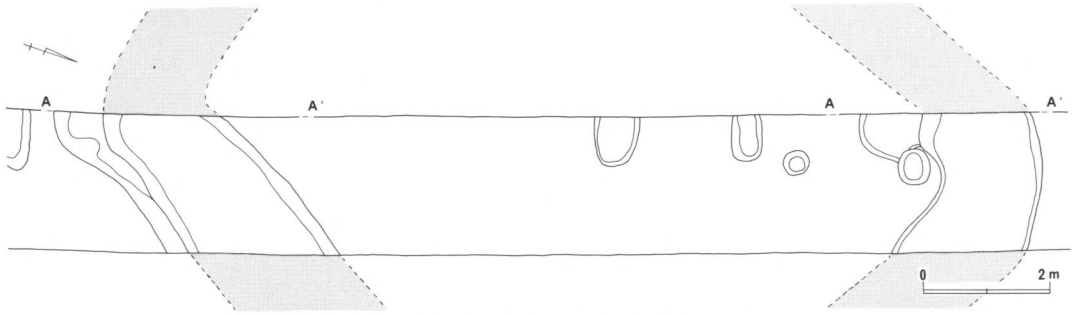


第２号溝土層説明

第１層	黒褐色土	白色粒子を含み、ローム風化土を斑点状に少量混入する。しまり良く粘性を有する。
第２層	明黒褐色土	ローム粒を少量、白色粒子を微量含む。しまり良く粘性を有する。
第３層	暗茶褐色土	火山灰を多量に、ローム粒を少量含み、ローム風化土を多量に混入する。しまり、粘性共に強い。
第４層	暗茶褐色土	ローム粒、白色粒子を多量に含み、ローム風化土を混入する。しまり良く粘性を有する。

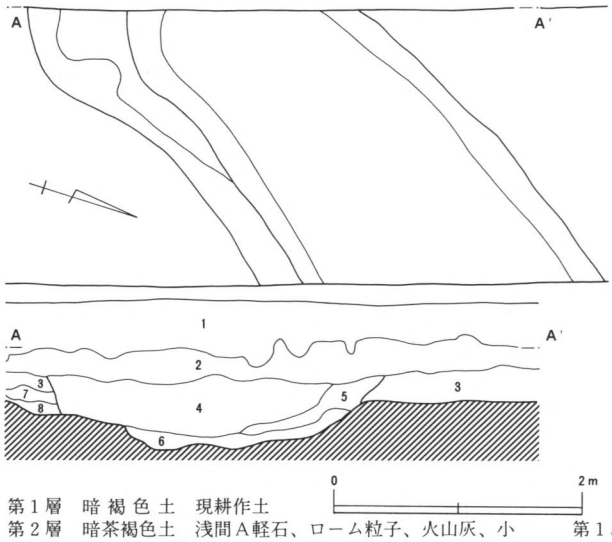
第65図　第２号溝遺構

c．方形周溝墓（第66・67・68図、図版22－２）



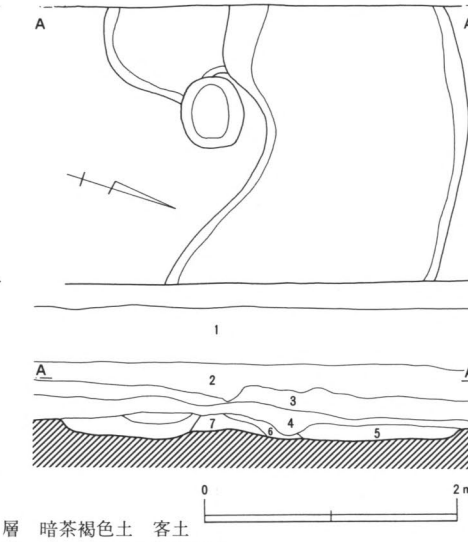
第66図　第１号方形周溝墓

調査区ほぼ中央に周溝の北壁と南壁の一部のみ検出され、主体部は検出されなかった。規模は南北方向に最大15.5ｍを測るが、本址のほとんどが調査区外に延びているため不明である。北側周溝は調査区ほぼ中央に第６号土坑を切って構築されており、コーナー部付近であると推定される。方向は調査区を東から西へ横切っている。規模は上幅176cm、下幅156cm、深さは20cmを測る。壁は緩やかに立ち上がり、底面は平坦である。南側の周溝墓は第３号土坑の北側に位置する。方向は調査区を西から北東へ横切っており、コーナー部分である。規模は上幅約236cm、下幅約164cm、深さは最大60cmを測る。南壁は一旦平坦部を持ち、傾斜して立ち上がる。底面は不定形を呈している。



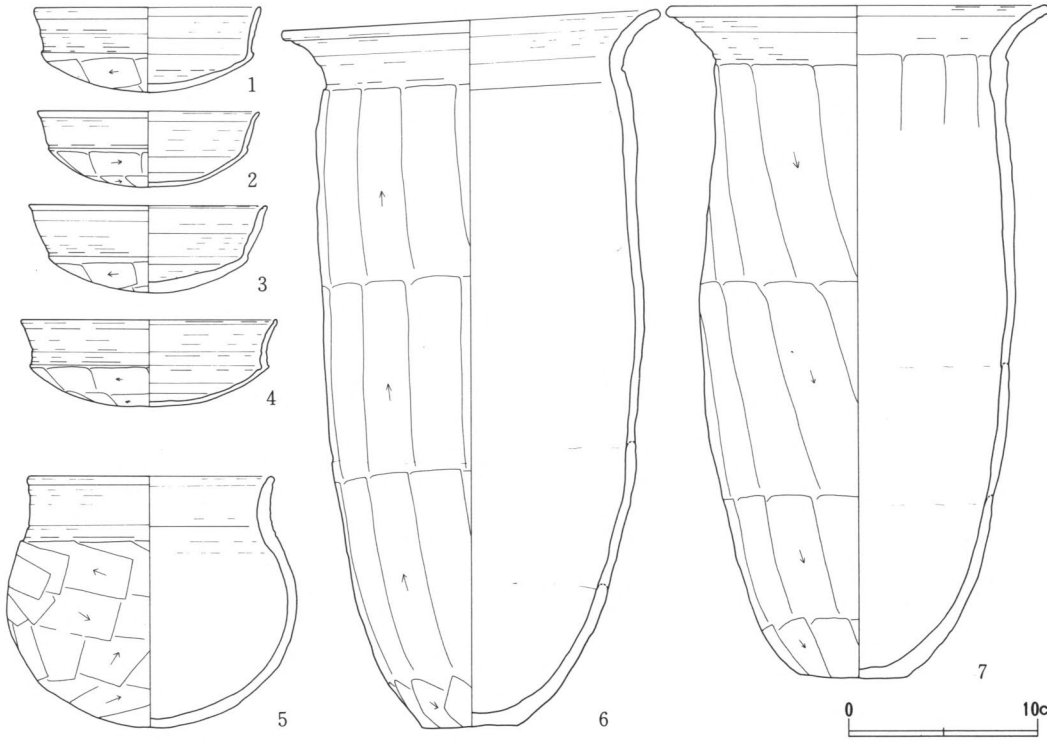
第１層　暗 褐 色 土　現耕作土
第２層　暗茶褐色土　浅間Ａ軽石、ローム粒子、火山灰、小礫を含む。
第３層　暗黄褐色土　ローム風化土を主体とし、黒色土を混入する。
第４層　黒 褐 色 土　火山灰は均一に含み、ローム粒子を少量含む。
第５層　明黒褐色土　ローム粒子、白色粒子を少量含み、ローム風化土を混入する。
第６層　暗茶褐色土　ローム粒子、ロームブロックを多量に含む。
第７層　明黒褐色土　白色粒子、火山灰を少量含み、ローム風化土を混入する。
第８層　明茶褐色土　ローム粒子、火山灰を少量含み、白色粒子を微量ふくむ。

第67図　第１号方形周溝墓土層断面図(南側)

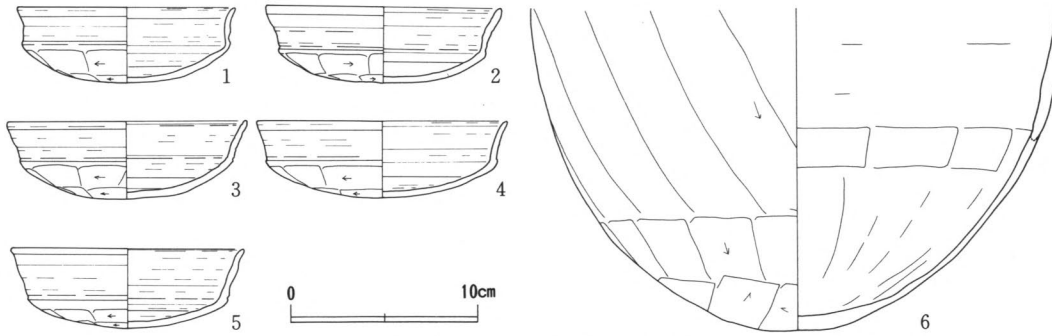


第１層　暗茶褐色土　客土
第２層　暗 褐 色 土　現耕作土
第３層　暗茶褐色土　浅間Ａ軽石、ローム粒子、火山礫をふくむ。
第４層　明黒褐色土　白色粒子、火山灰を含み、ローム風化土を混入する。
第５層　茶 褐 色 土　ローム風化土を主体とし、白色粒子、炭化物粒子を微量含む。
第６層　暗茶褐色土　ローム粒子、白色粒子を均一に含み、炭化物粒子を微量含む。
第７層　明 褐 色 土　ローム粒子、白色粒子を多量に含み、炭化物粒子、火山灰を少量含む。

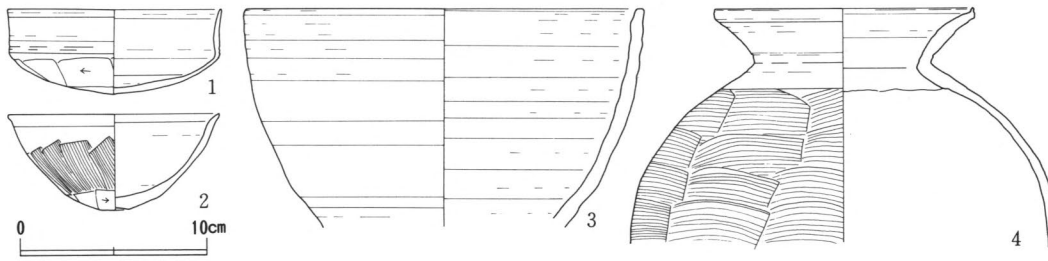
第68図　第１号方形周溝墓土層断面図(北側)



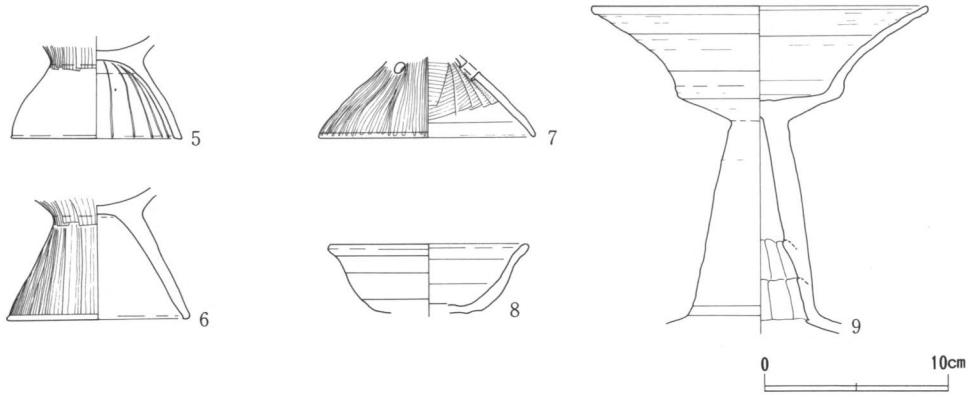
第69図　１a号住居址出土遺物



第70図　１b号住居址出土遺物



第71図　その他の遺構出土遺物(1)



第72図　その他の遺構出土遺物(2)

表－11　第１ａ号住居出土遺物観察表

番号	器　種	大きさ	胎　土	焼成	色　調	残存	出土位置・調整・備考
1	坏	11.8 4.5	石　英 長　石 赤色粒子	良	橙褐色	50％	カマド 調整は口唇部は指ヨコナデ、外面は口縁部は軟質木口状工具によるヨコナデ、底部は指ナデのちヘラケズリ。内面は口縁部から底部上半にかけて指ヨコナデ、底部下半はナデ。
2	坏	11.5 4.0	石　英 長　石 赤色粒子 角閃石	悪	橙褐色	完	１ａ住貯蔵穴出土 調整は口唇部は指ヨコナデ、外面は軟質木口状工具によるヨコナデ、底部は指ナデのちヘラケズリ。内面は口縁部から底部上半にかけて指ヨコナデ、中半以下は指ナデ。
3	坏	12.3 4.6	石　英 長　石 赤色粒子 角閃石	良	褐色	80％	１ａ住覆土・１ｂ住覆土 調整は口唇部は指ヨコナデ、外面は口縁部は軟質木口状工具によるヨコナデ、底部は指ナデのちヘラケズリ。内面は口縁部から底部上位にかけて指ヨコナデ、底部は指ナデ。
4	坏	13.3 4.1	石　英 長　石 赤色粒子 角閃石	良	褐色	90％	調整は口唇部は指ヨコナデ、外面は口縁部は軟質木口状工具によるヨコナデ、底部は指ナデのちヘラケズリ。内面は口縁部から底部中位まで指ヨコナデ、底部中位以下は指ナデ。
5	甕	12.7 13.2	石　英 長　石 赤色粒子 角閃石	良	帯赤褐色	完	調整は口唇部は指ヨコナデ、外面は口縁部は軟質木口状工具によるヨコナデ、体部は指ナデのちヘラケズリ。内面は口縁部は指ヨコナデ、体部は指ナデ。 外面底部にススが付着。 内面は底部から口縁部までヨゴレが付着。
6	甕	19.7 37.4 5.1	石　英 長　石 赤色粒子	良	褐色	90％	覆土 調整は口唇部は指ヨコナデ、外面は口縁部は軟質木口状工具によるヨコナデ、体部は指ナデのちヘラケズリ。内

番号	器　種	大きさ	胎　土	焼成	色　調	残存	出土位置・調整・備考
			角閃石 砂礫粒				面は口縁部は指ヨコナデ、底部は指ヨコナデ、体部は指ナデ。
7	甕	19.8 35.5 5.7	石　英 長　石 赤色粒子 角閃石 片岩粒	良	明褐色	90％	調整は口唇部は指ヨコナデ、外面は口縁部は軟質木口状工具によるヨコナデ、体部は指ナデのちヘラケズリ。内面は口縁部は指ヨコナデ、体部上半はヘラナデ、下半は指ナデ。

表－12　第１ｂ号住居出土遺物観察表

番号	器　種	大きさ	胎　土	焼成	色　調	残存	出土位置・調整・備考
1	坏	13.2 4.1	石　英 長　石 赤色粒子 角閃石 砂礫粒	良	暗赤褐色	80％	覆土 調整は口唇部は指ヨコナデ、外面は口縁部は軟質木口状工具によるヨコナデ、底部は指ヨコナデのちヘラケズリ。内面は口縁部から底部上半にかけて指ヨコナデ、底部下半は指ナデ。
2	坏	12.3 4.0	石　英 長　石 赤色粒子 角閃石 片岩粒	良	橙褐色	90％	調整は口唇部は指ヨコナデ、外面は口縁部は軟質木口状工具によるヨコナデ、底部は指ナデのちヘラケズリ。内面は口縁部から底部上位まで指ヨコナデ、底部中位以下は指ナデ。
3	坏	12.5 4.1	石　英 長　石 赤色粒子 角閃石 片岩粒	良	明褐色	完	調整は口唇部はヨコナデ、外面は口縁部は軟質木口状工具によるヨコナデ、底部は指ナデのちヘラケズリ。内面は口縁部から底部上半まで指ヨコナデ、底部下半は指ナデ。
4	坏	11.3 4.0	赤色粒子 石　英 長　石 角閃石	普	橙褐色	90％	調整は口唇部は指ヨコナデ、外面は口縁部は軟質木口状工具によるヨコナデ、底部は指ナデのちヘラケズリ。内面は口縁部から底部上半にかけて指ヨコナデ、底部下半は指ナデ。
5	坏	12.2 4.2	石　英 長　石 赤色粒子 角閃石	良	明褐色	80％	覆土 調整は口唇部は指ヨコナデ、外面は口縁部は軟質木口状工具によるヨコナデ、底部は指ヨコナデのちヘラケズリ。内面は口縁部から底部上半にかけて指ヨコナデ、底部下半は指ナデ。
6	甕		石　英 長　石 赤色粒子 角閃石 片岩粒	良	外―褐色 内―赤褐色	80％	覆土 調整は外面は体部下半はヘラケズリ。内面は下半上位は指ナデ、中位はヘラケズリ、下位は指ナデ。

表－13　その他の遺構出土遺物観察表

番口	器　種	大きさ	胎　土	焼成	色　調	残存	出土位置・調整・備考
1	坏	11.2 4.5	石　英 長　石 赤色粒子	悪	橙褐色	80％	第２号住居址覆土出土 調整は口唇部は指ヨコナデ、外面は口縁部は軟質木口状工具によるヨコナデ、底部は指ナデのちヘラケズリ。内面は口縁部から底部上半にかけて指ヨコナデ、底部下半は指ナデ。
2	埦	11.0 5.1 1.3	石　英 長　石 角閃石	良	褐色	20％	ＳＤ－２出土 調整は口唇部は指ヨコナデ、外面は体部は指ナデのち中位はタテ目状工具によるナデ、下位はヘラケズリ、底部は指ナデ。内面は指ナデ。
3	甑	20.7	石　英 長　石 赤色粒子 角閃石	良	帯赤褐色	20％	ＳＤ－１出土 調整は口唇部・内外面共に指ヨコナデ。
4	壺	13.7	石　英 長　石 赤色粒子 角閃石	良	橙褐色	40％	ＳＫ－３覆土出土 調整は口唇部は指ヨコナデ、外面は口縁部から体部上端にかけて軟質木口状工具によるヨコナデ、それ以下はヘラナデ。内面は口縁部は指ヨコナデ、体部は指ナデ。
5	台付甕	8.8	石　英 長　石 角閃石 片岩粉	良	帯赤褐色	90％	８区－１出土 調整は外面は体部下端は指ナデのちハケ目状工具によるナデ、台部は指ナデ。内面は台部はヘラナデ。
6	台付甕	9.3	石　英 長　石 赤色粒子 角閃石 片岩粒	良	褐色	80％	８区－１出土 調整は外面は底部下端から台部にかけてハケ目状工具によるナデ。内面は台部は指ナデ。
7	器台	11.3	砂礫粒 石　英 長　石 赤色粒子	良	褐色	60％	８区－１出土 調整は外面口縁部上半はヨコナデ、下半はナデ、下端部はナデ。内面は指ナデのちヘラナデ。
8	坏	10.3	石　英 角閃石 赤色粒子	良	暗褐色	20％	８区－２出土 調整は外面口縁部上半はヨコナデ、下半はナデ、下端部はヘラケズリ、底部は回転糸切り。内面は口縁部上位はヨコナデ、中位はナデ、下位はヨコナデ、底部はナデ。
9	高坏	17.6	石　英 長　石 赤色粒子 角閃石 砂礫粒	良	赤褐色	70％	８区－２出土 調整は口唇部は指ナデ、外面は坏口縁部上位は指ヨコナデ、中位は指ナデ、下位は指ヨコナデ、坏底部は指ナデ、脚部は指ナデ、脚部下端部は指ヨコナデ、裾部は指ヨコナデ。内面は口縁部上半は指ヨコナデ、下半から底部にかけて指ナデ、脚部はヘラナデ、裾部は指ナデ。

第Ⅴ章　児玉条里の調査(63工区)

1．遺跡の概要

63工区は、埼玉県遺跡地図№54－284（児玉条里）の北西部にあたり、掘削される水路の横軸を南側より第Ⅰ区から第Ⅳ区、縦軸を第Ⅴ区、左口遺跡より東側の水路部を第Ⅶ区と呼称した。調査開始前の現状は水田であり中央にあたる第Ⅴ区付近が北流する九郷用水の影響を受けて若干条里地割りが乱れているものの全体的には条里地割りが良好に残っていた。

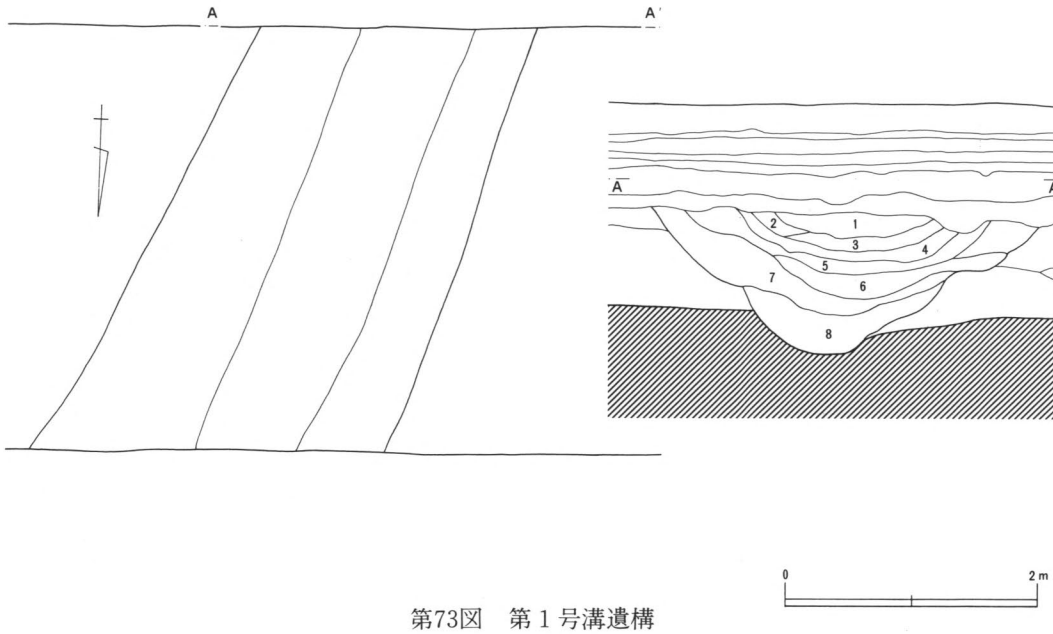
遺構は溝跡が7条検出されている。特に第Ⅶ－4区で検出された第2号溝は、鬼高期の溝であり条里地割りには当嵌らないことが特筆される。

2．遺構の概要

Ⅱ－2区

第1号溝（第73図）

調査区ほぼ中央西側よりに方向は調査区を南西から北東に調査区外に延びている。規模は上幅約280cm、下幅約70cm、深さは最大114cmを測る。壁はやや急に傾斜して立ち上がり、中位下部で一旦段を持ち緩やかに立ち上がる。底面は皿状を呈している。



第73図　第1号溝遺構

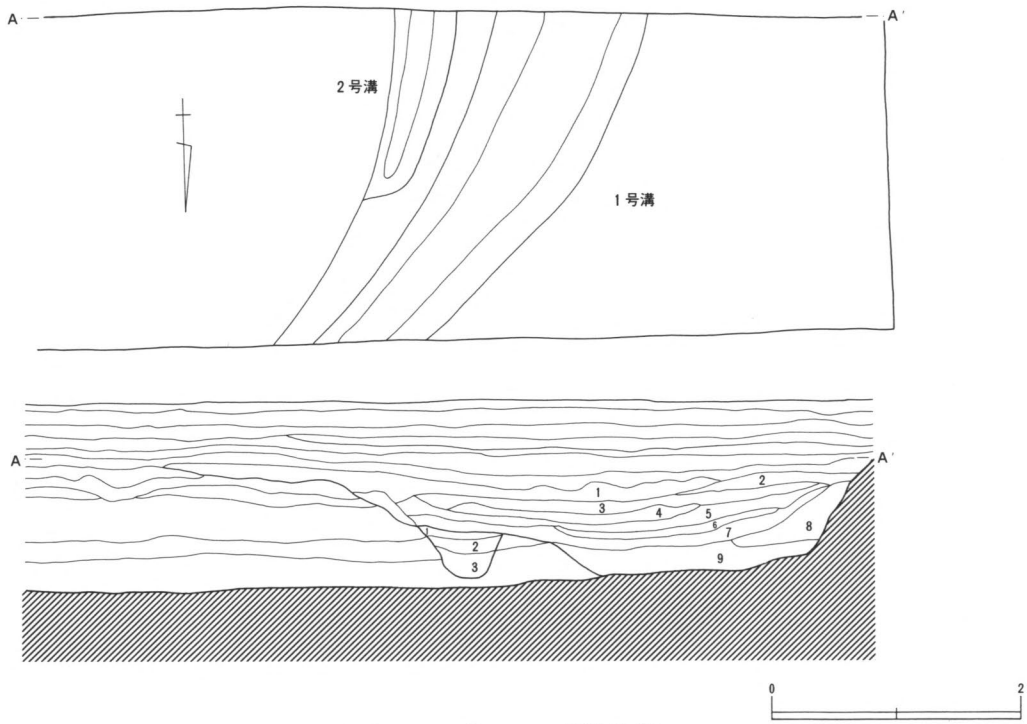
Ⅲ－１区

第１号溝（第74図）

調査区ほぼ中央西側よりに、第２号溝と重複して検出された。方向は調査区を南東から北西に調査区外に延びている。規模は上幅約90cm、下幅約48cm、深さは最大50cmを測る。壁は緩やかに傾斜して立ち上がり、底面は皿状を呈している。

第２号溝（第74図）

調査区ほぼ中央に第２号溝と西側の一部を重複して検出された。方向は調査区を南東から北西に調査区外に延びていると推定できるが、第１号溝に切られているため、底部まで検出できたのは一部分であった。規模は上幅約38cm、下幅18cm、深さは最大60cmを測る。壁は緩やかに立ち上がり、底面はＵ字状を呈している。



第74図　第１・２号溝遺構

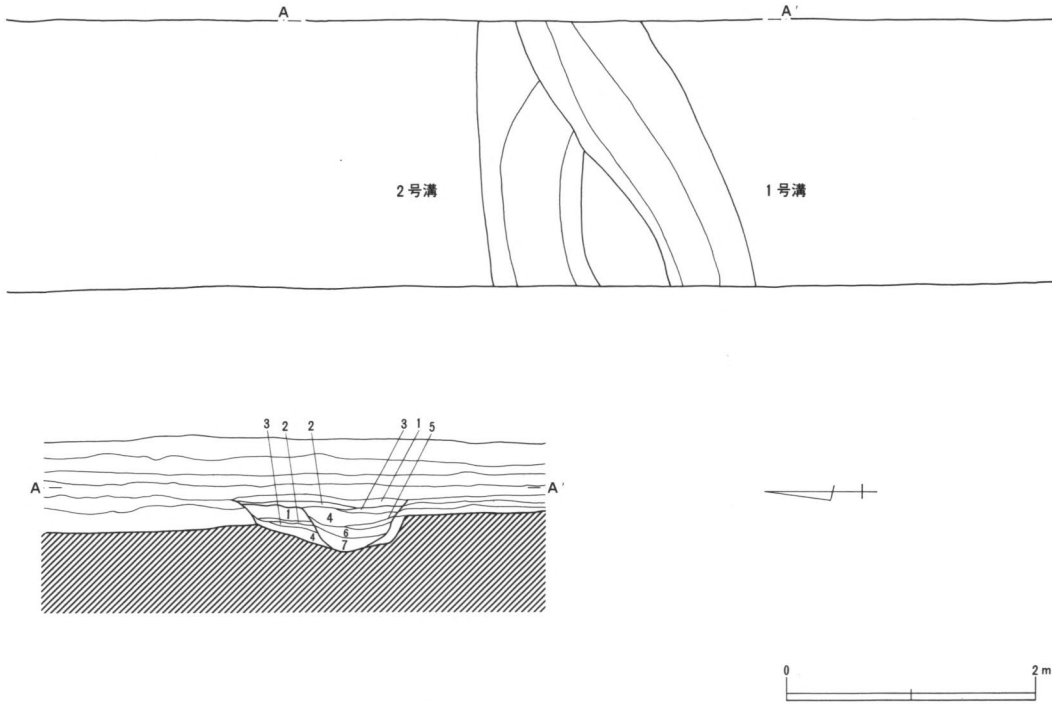
Ⅴ－１区

第１号溝（第75図）

調査区ほぼ中央南よりに、第２号溝と一部重複して検出された。方向は調査区を南から南西に調査区外に延びている。規模は上幅約108cm、下幅約38cm、深さは最大114cmを測る。壁は緩やかに傾斜して立ち上がり、底面は平坦である。

第２号溝（第75図）

第１号溝の北側に東側を重複して検出された。方向は調査区を東から西に調査区外に延びている。規模は上幅約80cm、下幅44cm、深さは最大64cmを測る。南壁は緩やかに立ち上がり、北壁は中位で一旦平坦部を持ち緩やかに立ち上がる。底面は平坦であるが、わずかに南に傾斜している。



第75図　第１・２号溝遺構

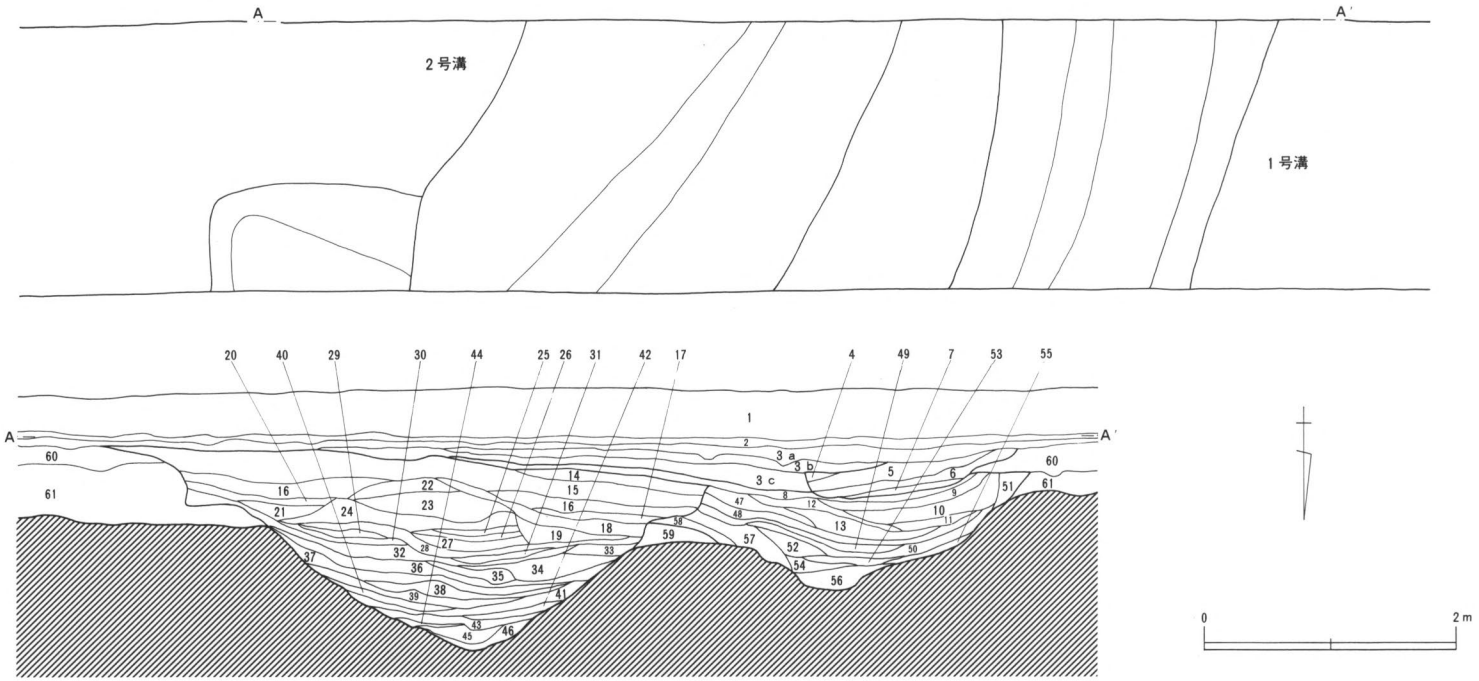
Ⅶ－４区

第１号溝（第76図、図版29－2・30－1）

調査区西壁より約14ｍの所に検出された。方向は調査区を南から北に調査区外に延びている。規模は上幅約190cm、下幅約34cm、深さは最大114cmを測る。西壁側は底部近くがやや急に立ち上がり、その後は緩やかに立ち上がる。東壁は底部近くがやや急に立ち上がり、中位で一旦平坦部を持った後は第２号溝に切られているため不明である。底面は平坦である。

第２号溝（第76図、図版29－2・30－2）

第１号溝東側に検出された。方向は調査区を南から北に調査区外に延びている。規模は上幅約270cm、下幅40cm、深さは最大152cmを測る。壁は緩やかに立ち上がるが、上位で一旦平坦部を持ちやや急に立ち上がる。底面はＶ字状を呈している。



第76図　第１・２号溝遺構

第Ⅶ－４区　第１・２号溝土層説明

第１層　灰色土　現耕作土層。（As－A）を多く含み、固くしまっている。鉄と粘土の互層である。
第２層　黒色土　砂質（As－A）を多く含む。固く凝固している。
第３ａ層　黒色土　第２層に準ずるが、更に（As－A）が多く含まれる。
第３ｂ層　茶色土　第３ａ層から（As－A）が欠落したもの。
第３ｃ層　茶色土　第３ｂ層にローム粒（径約１～５mm）が多く混入したもの。
第４層　茶色土　強い粘性をもつ。ローム風化粒（径約５mm）も微量含む。
第５層　茶色土　第４層に準ずるが、ローム粒は含まれない。
第６層　茶色土　第４層に準ずるが、ローム粒を多く含む。
第７層　茶色土　第４層に準ずるが、ローム粒と共に黒色土も多く含む。
第８層　黒色土　強い粘性。焼土粒（径約３mm）を若干含む。やや砂質（径約１mm）である。
第９層　黒色土　第８層に準ずるが、砂（径約１～３mm）が多い。
第10層　黄褐色土　やや粘性。ローム粒（径約１mm）を多少含む。多少砂質（径約１mm）である。
第11層　黄褐色土　第10層に準ずるが、砂（径約２mm）が多い。
第12層　黄褐色土　第10層に準ずるが、砂（径約１mm～４mm）が多い。
第13層　黄褐色土　第10層に準ずるが、多量の砂（径約１～３mm）を含む。
第14層　茶色土　やや粘性。微砂層。ローム粒（径約２mm）を多少含む。砂粒（径約３mm）も少量含む。
第15層　茶色土　第14層に準ずるが、ローム粒は少量。
第16層　茶色土　第14層に準ずるが、ローム粒は微量。
第17層　茶色土　第14層に準ずるが、ローム粒は含まれない。
第18層　茶色土　第14層に準ずるが、砂粒（径約３～10mm）を多量に含む。
第19層　茶色土　第18層に準ずるが、やや砂粒が少ない。
第20層　茶色土　第18層に準ずるが、砂はより多い。
第21層　茶色土　第18層に準ずるが、砂は更に多い。
第22層　茶色土　第16層に準ずるが、砂が少ない。
第23層　茶色土　砂とロームが多い。
第24層　茶色土　第16層に準ずるが、マンガン（径約５mm）を多く含む。
第25層　茶色土　第16層に準ずるが、鉄（径約５mm）を多く含む。
第26層　茶色土　第25層に準ずるが、砂は少なく、粘土質。やや鉄の染み。
第27層　茶色土　第25層に準ずるが、鉄（径約５mm）を多少含む。
第28層　茶色土　第24層に準ずるが、マンガンはなく、鉄の染みを多少有する。
第29層　茶色土　微砂質。多少の粘土・鉄・マンガンの染み。
第30層　茶色土　第29層に準ずるが、砂は少なく粘土は多い。
第31層　茶色土　第27層に準ずるが、鉄は少ない。
第32層　茶色土　第28層に準ずるが、粘性はやや弱い。
第33層　茶色土　第22層に準ずるが、砂はやや少ない。
第34層　茶色土　第22層に準ずるが、更に砂は少ない。
第35層　茶色土　第32層に準ずるが、やや砂が多い。
第36層　茶色土　第32層に準ずるが、砂が少ない。
第37層　茶色土　第32層に準ずるが、砂が非常に多い。
第38層　茶色土　第29層に準ずるが、鉄の染みが強い。
第39層　茶色土　第37層に準ずるが、鉄の染みが強い。
第40層　茶色土　基盤粘土が多く混入している。
第41層　茶色土　第40層に準ずるが、さらに粘土が多い。
第42層　茶色土　第40層に準ずるが、やや粘土は少ない。
第43層　茶色土　第40層に準ずるが、鉄の染みが強い。
第44層　茶色土　第43層に準ずるが、より粘土質。
第45層　茶色土　第43層に準ずるが、より砂質。
第46層　茶色土　第43層に準ずるが、より粘土質。
第47層　黄褐色土　第13層に準ずるが、ロームは含まない。
第48層　黄褐色土　第47層に準ずるが、砂（径約２～３mm）が少ない。
第49層　茶色土　砂（径約１～３mm）を多量に含む。ローム風化粒を少量含む。
第50層　茶色土　第49層に準ずるが、砂が少なく粘土質。
第51層　茶色土　第49層に準ずるが、砂は微量で粘土質。
第52層　茶色土　砂質（径約１mm）。ロームブロックを多少含む。
第53層　茶色土　第52層に準ずるが、やや粘性あり。砂（0.5mm）を含む。
第54層　茶色土　第52層に準ずるが、砂（径約１～３mm）を含む。
第55層　茶色土　第50層に準ずるが、ややロームが多い。
第56層　茶色土　第53層に準ずるが、ロームが多い。
第59層　黒色砂　純砂層（径約１～20mm）。均一に、マンガンを多量に含む。
第60層　黒色土　強い粘性を帯び、（As－A）は含まれない。やや固いローム風化粒も若干混入している。
第61層　黄色土　粘土化したローム層。

第Ⅵ章　平塚遺跡出土の遺物の概要

1．土師器について　―甑を中心として―

平塚遺跡からは竪穴住居址や土坑、そして埋没谷などが確認されている。出土した土師器は住居址などの遺構や谷より出土しており、ほぼ和泉式の範疇に捉えられる。しかし、確認面から浅い位置で床面が確認されるといった遺存状態の悪さや調査範囲の面的な制限、一括性の未確証などによって決して良好な資料を検出したわけではない。そこで本章においては本遺跡出土の甑に焦点を当て考えていく。

平塚遺跡から明確に土器製作時から意識して作られた甑が３個体と底部に焼成後穿孔を持つ土器が３個体出土している。まず平塚遺跡において出土した底部に穿孔を持つ土師器そして甑について概観していく。

第１号住居址出土の土師器（第12図―８）は平底の鉢であるが、焼成後直ぐ乃至は本来の機種の持つ用途のもとでの使用の後、外面より底部中央に工具によって円形に径１cm程穿たれている。内面の底部から体部下半まで薄くではあるがヨゴレが付着しており、穿孔部断面からもヨゴレが観察できることから、底部穿孔後における使用、即ち甑としての使用が考えられる。次に東側谷出土（第29図―40）の土器は、胴下半部が大きく直線的に開くかなり大型の壺であったと想像できる。穿孔は焼成の後に外面から行われており、矢印状の孔が穿たれている。内面には底部および胴下半部にかけてヨゴレが付着しており、断面の様相は不明であるがこの土器も甑として転用されたものと考えられる。次に第２号住居址出土の丸底の坩（第13図―３）は、底部破片を接合すると底部ほぼ中央に１cm程の円形の孔が残る。そしてその部分を観察すると外面に工具による擦り痕が認められる。また破砕部分から穿孔時の内面からの工具による打撃に失敗し底部全域を打ち欠いてしまったことがわかる。内面は底部から体部にかけてヨゴレが付着しており、そのヨゴレは底部における接合破片にも付着しており穿孔前に付いたものと考えられる。断面にはヨゴレの付着は観察できない。さらにこの土器は、頸部がしまる形態のため甑としては不向きであることが指摘できる。ヨゴレ、形態からこの土器が甑として使用された痕跡が確認できなかったため、他の目的のもと底部に穿孔されたものと考える。

底部穿孔の土器に対し岩崎卓也氏は安易に甑とすることへの疑義を与しているが（岩崎、1966)、柿沼幹夫氏は器表面の観察の結果甑とすることへの正当性を訴えている（柿沼、1976)。本論においては外表面は摩滅によって甑として使用した痕跡は確認できなかったが、２個体は内面および穿孔部断面の観察の結果甑と判断した。

次に明確に甑としての使用の目的としてつくられた土器を見ると、まず東側谷出土の甑（第29図—41）がある。遺存状態が非常に悪く片側の把手と周囲の体部が残っているにすぎない。次に第１号住居址から出土した土器（第12図—７）は口縁部と体部の一部が出土しており、つくりが他の土器に比すと薄く、外表面は二次的に橙褐色に変色していることから、土器製作段階より甑としての機能を意識して製作された土器と考えられる。また図化はできなかったが、第１号住居址から東側谷出土の甑破片とは異なる把手破片が出土している。

把手付大型甑は中村倉司氏の研究によると（中村、1982・89)、児玉地域において大型甑の出現段階の早い時期で登場するということである。ここで注目すべきは平塚遺跡において、全掘されたのは第１号住居址のみという限定された調査ではあるが、住居址全てに対しカマドが未検出であったという点である。大型甑はカマド導入以前より使用されていたと指摘されており、まさに平塚遺跡は東国においてもっとも早くカマドが導入される児玉地域において、その導入直前の集落遺跡であったということが言える。

それでは大型甑の導入は何を意味するのであろうか。カマドの導入さらには大型甑の使用に対し、笹森紀巳子氏は国家的な労働力徴用（笹森、1982)、中村氏は在地首長層による労働力徴用の為の糒生産とする見解を出している（中村、1989)。大型甑の存在は従来型ではない新たな調理具を必要とする文化の導入が児玉地域において行われたことが伺われる（註)。しかし平塚遺跡においては、他の機能を有する土器の底部を穿孔することによって甑としての機能を与えて使用しており、急速に大型甑を必要とする社会が到来したこととは比例せず、その供給は需要を下回り、他の機種を転用させ使用せざるをえない状況に置かれていたものと考えられる。平塚遺跡に居住していた人々が急速に甑を欲した事情は、この急速な変化を鑑みると、調理方法の変化のような集落の内的要求と捉えるよりは、笹森・中村両氏が言うように外的要因と考える方が妥当であるものと考えられる。（村上泰司）

註　平塚遺跡出土の土師器を見ると児玉地域を対象とした研究史内には当てはまらない土師器が何点か出土している。例えば第４号住居址出土の埦（第15図—１）は器壁が非常に薄く丁寧につくられており、胎土は該地域に多く見られる片岩を含まない。また東側谷出土の有段高坏（第28図—27・第77図）は脚部に工具痕を残す特異な調整が施されている。

第77図　第28図－27高坏脚部拓本

2．石製模造品

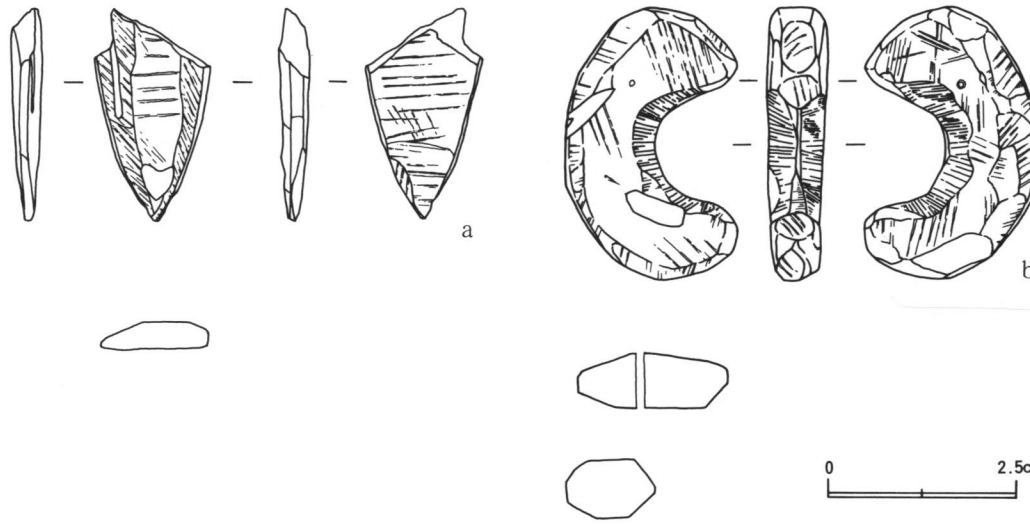
本遺跡からは6号住居址覆土内とⅢ区埋没谷の西側から石製模造品が計2点検出された。埋没谷での検出状況は、廃棄されたと思われる土器と共に出土したものである。祭祀場としての機能を有する場であるかどうかは不明である。

a．6号住居址出土　剣形石製模造品（第78図、a　図版35）

aは剣形石製模造品である。約⅓が欠損しており、柄部を模したものか略したものかは不明である。残存長28mm、同幅15mm、厚さ4.5mmを測る。表裏面は刃物状の工具によって主要な面をとり、先端は鋭い刃部を表現しているが刃部中央は稜線を表現せずに平坦に仕上げられている。全体に簡単な磨きを行っているが周縁部は比較的入念に磨き外形を整えている。石材は滑石で色調はやや明るい濃緑色であるが、一部淡緑白色を呈する。

b．西側谷出土　勾玉形石製模造品（第78図、b　図版35）

bは勾玉形石製模造品である。長さ36mm、幅22mm、厚さ7mmを測る。孔径は1mmを測り、片側から貫通している。外形を刃物状の工具によって整えた後に一部を磨きによって成形し、腹部を除き簡単な磨きを行っている。このため腹部の工具痕は顕著であり、工程上の単位が観察できる。石材は滑石で色調は濃緑色であるが、一部に斑点状の明茶褐色を呈する部分がある。　（大熊 季広）



第78図　石製模造品

第Ⅶ章　ま　と　め

はじめに　本報告書に記載した各遺跡は、女堀川に開析された低地の北西部に当たり本庄台地と女堀川の自然堤防に挟まれた一角にそれぞれが立地している。特に、平塚（古墳時代中期）・左口（古墳時代後期）両遺跡は時期が異なるものの目前に低地が展開している微高地上に占地をしているという共通性をもった集落遺跡である。本章では、これらの遺跡調査から得られた成果のうち以下の２点について簡単にまとめたい。

古　環　境　平塚遺跡の第Ⅰ・Ⅲ区において埋没谷を調査し、断面土層観察からこの谷は本庄台地の裾部が湧水などの侵食作用によって作られ、その終焉は６世紀初頭から平安時代末期の間に埋没が進行したことがあきらかにできた。これらのことから本遺跡周辺地域の地形が、６世紀までは細い谷戸が発達しており低地の面積が今より著しく少なかったことが窺われる。しかし、各谷戸が埋没するにつれて低地面の面積が拡大し少なくても平安時代末期には、ほぼ現在の地形になったと思われる。この谷の急速な埋没の理由としては表流水の滞水化が考えられ、その要因として溜池の構築や、水田の拡張事業があった事が推定できる。

これらの地形の変化は、本調査によっても時期的に次のような段階があったことが窺うことができる。

Ⅰ期　平塚遺跡（和泉期）　本調査において該当期の水路などが検出されていないため、水田耕作は天水及び湧水に依存している割合が高いと推定される。しかし細い谷戸の谷頭などは溜池に利用している可能性がある。

Ⅱ期　左口遺跡（鬼高期）　条里地割りには沿わないが左口遺跡第Ⅷ区・児玉条里遺跡第Ⅶ区において該当期の溝を検出している。とくに左口遺跡第Ⅷ区においては溝の覆土と隣接している住居址の覆土に砂利が多く混入しており、引水による水害を想定することができる。このことからある程度水をコントロールし、集落や水田に引き込んでいたことが推定できる。

Ⅲ期　（真間期）　本調査において該当期の集落・遺構などは検出されていない。しかし、この時期には低地帯がかなり上昇し水田面積がⅠ期に比べると大幅に拡大したと推定される。

Ⅳ期　左口遺跡（国分期）　該当期の集落址が検出されている。低地は、埋没し微高地との比高さはほぼ解消され現在の地形に相当すると思われる。

これらの様相を整理すると和泉期は台地縁辺部の開発、鬼高期は低地中央部の開発、真間期は計画的な開発（鈴木、1989・91）であったことが予想できる。

垣状遺構

垣状遺構は、本調査において平塚遺跡第Ⅲ区と左口遺跡Ⅰ－1区で計3列を検出した。これらの遺構は、径約36～60cm、深さ約8～15cmの底面が皿状を呈するピットを40cmおよび25～30cmの間隔で配していた遺構である。これらのピットはどれもが浅く、柵列のように支柱を深く打ち込んだものではない。このことからこれらのピット列の遺構は、「柵列遺構」と切り放して考えることができ以下「垣状遺構」と呼称する。検出された位置は双方共に微高地と低地部の境に当たっているが、集落を取り囲んでいた状況も想定することができる。

検出した垣状遺構は、形態的にA・Bの2形態に分類することができる。

A（平塚遺跡）：各々のピットが浅い皿状を呈す主列と主列を構成する各ピットの端に密着しかつ主列に平行する形で溝を補助的に構築している（ピットの平面形態は、円形を呈す）

B（左口遺跡）：各々のピットが浅い皿状を呈す主列と主列を構成する各ピットの端に重複する形で縦位にピットを補助的に構築している（ピットの平面形態には、ずれはなく楕円形を呈す）

A・Bは、主列の形態や溝・ピットの補助的な遺構が付随している共通性があることが理解できる。時期については、Aが周囲の状況や土器片が検出されていることから和泉期の所産であるのに対し、Bは明確な時期について把握することができなかった。しかし、Bは左口遺跡で検出された集落の主体を成す鬼高期の所産である可能性もあり、A・Bで唯一の相違が認められる補助的な遺構の形態の違いをここでは変遷上での時期差として理解したい。しかし、構築する目的によっては垣状遺構にも種類があることに留意しなければならない。

主列の構造は、主列を構成する各ピットの断面が皿状で浅く規格があるかのように構築されている。このことから植物を移植した「生け垣」状の構築物を推定することができる。この生け垣に関しては、額田巌氏の論攷（額田、1984）があり、その中で氏は、移植された植物に関して「松・杉・檜・椿・梓・椎・樒・柏・樅」などの常緑樹であったことを推定している。これらの常緑樹の中でもA・Bに移植された木は、主列のピット間が狭いことから成長しても大木になるものでなく種類がある程度限定できる可能性がある。これらのことから、垣状遺構の性格を推定すると防風林や柵などの防御的要因は考えることはできず、集落外で起きる疫病や事故などの心理的に働く外的要因から集落を分離しようとした志考性を推定することができる。

垣状遺構に関しては現在のところ類例に乏しく黒井峯遺跡（大塚、1988）など数例しかない。しかし、火山灰の厚く堆積した地域では、良好な遺跡の検出が増えることが予想される。本章では垣状遺構に関して事実報告に若干の見解を加えたものであり、類例の増加を待って検討を加えたい。　（徳山寿樹）

引用・参考文献

岩崎卓也　(1966)「甑小考」『信濃』18－4

大塚昌彦　(1987)「中筋遺跡」現地説明会資料

大塚昌彦　(1988)「火山災害と古墳時代集落跡について－中筋遺跡を中心として－」『第54回日本考古学協会総会発表要旨』

大塚昌彦　(1994)「古墳時代における集落景観－中筋遺跡を中心として－」土曜考古学研究会２月例会発表要旨

大塚昌彦他 (1988)『中筋遺跡－第２次発掘調査概要報告書－』渋川市発掘調査報告書第18集

大場磐雄編 (1981)『神道考古学講座』第３巻　雄山閣

柿沼幹夫　(1976)「甑型土器に関する一考察－南関東地方出土例を中心として－」『埼玉考古』第15号

黒坂貞二他 (1989)『上組Ⅱ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第80集

恋河内昭彦 (1992)『川越田遺跡Ⅱ』児玉町遺跡調査会報告書第５集

小山靖憲編 (1987)『古代から中世へ 5 家と垣根』週刊朝日百科　日本歴史60

笹森紀巳子 (1982)「かまど出現の背景」『古代』第72集

鈴木徳雄　(1989)「古代児玉郡の開発と真下大溝」『真下境東遺跡』児玉町文化財調査報告書第９集

鈴木徳雄他 (1980)『橋ノ入遺跡Ⅰ』児玉町文化財調査報告書第５集

鈴木徳雄他 (1993)『辻ノ内・中下田・塚畠・児玉条里遺跡』児玉町文化財調査報告書第15集

立石盛詞他 (1982)『関越自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告 －ⅩⅢ－ 後張』埼玉県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第15集

立石盛詞他 (1983)『関越自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告 －ⅩⅣ－ 後張』埼玉県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第26集

立石盛詞他 (1989)『御伊勢原』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第79集

中村倉司　(1982)「大型甑－埼玉県を中心として－」『土曜考古』第５号

中村倉司　(1989)「関東地方における竈・大型甑・須恵器出現時期の地域差」『研究紀要』第６号　財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団

中村倉司他 (1980)『瓰蕤神社遺跡　一本松古墳』埼玉県遺跡調査会

額田　巌　(1984)『垣根』物と人間の文化史52　法政大学出版局

坂野和信　(1988)「竈導入期の土器」『本庄市立歴史民俗資料館紀要』第二号

坂野和信　(1991)「和泉式土器の成立過程とその背景－布留式後期土器との編年的検討－」『埼玉考古学論集』財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団

坂野和信　(1991)「和泉式土器の成立について－序論－」『土曜考古』第16号

東日本埋蔵文化財研究会 (1993)「関東地方　埼玉県」『古墳時代の祭祀』

橋本博文　(1985)「古墳時代首長層居宅の構造とその性格」『古代探叢Ⅱ』

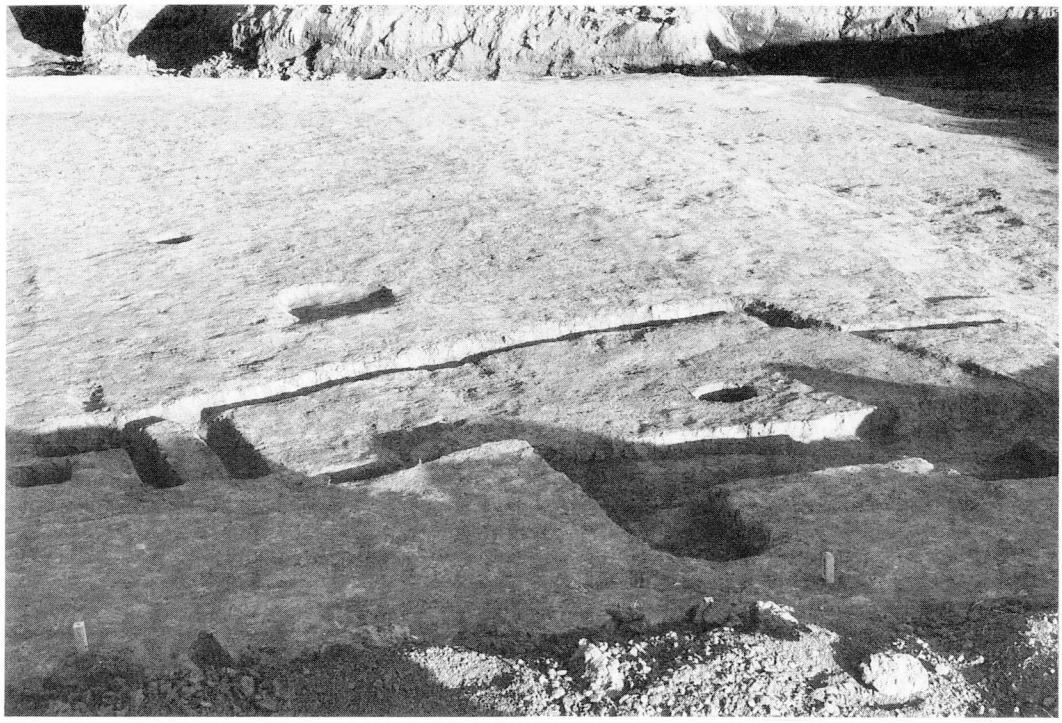
児玉町教育委員会　児玉町史編さん委員会 (1993)『児玉町史　自然史編』

埼玉県教育委員会 (1978)『埼玉県市町村誌』第12巻

図　　版

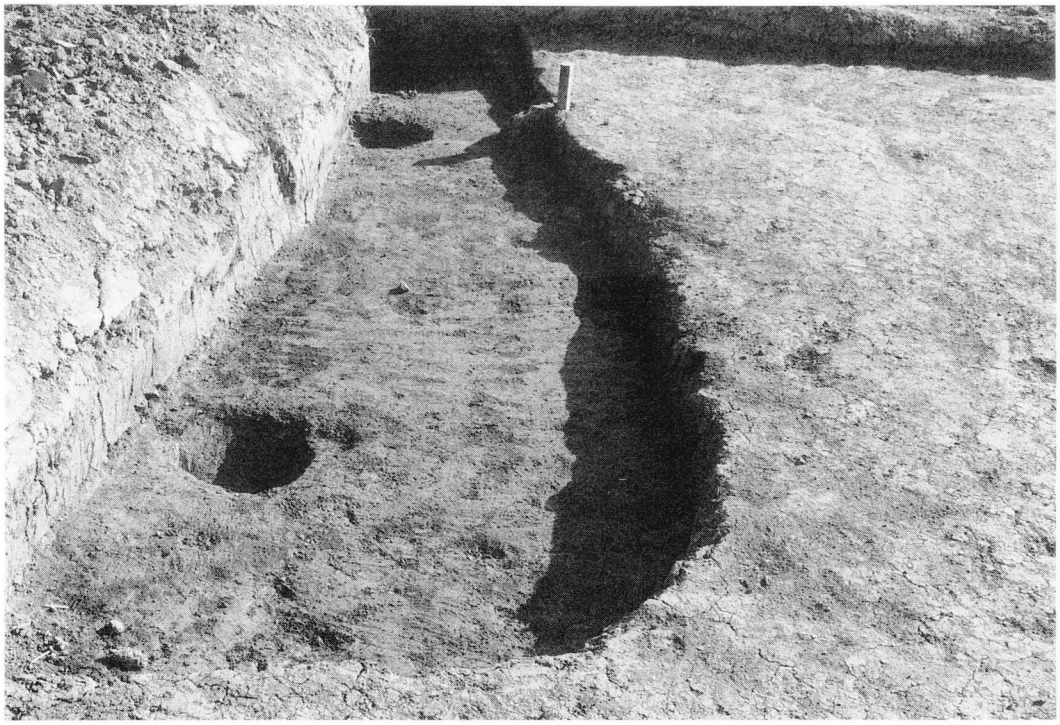
図版 1

1．平塚遺跡第Ⅲ区第 1 号住居址



2．平塚遺跡第Ⅲ区第 2 号住居址

図版 2



1．平塚遺跡第Ⅲ区第 3 号住居址

2．平塚遺跡第Ⅲ区第 4 号住居址

図版3

1．平塚遺跡第II区第5号・6号住居址

2．平塚遺跡第II区第7号住居址

図版 4

1．平塚遺跡第Ⅲ区垣状遺構・テラス状遺構（南西より）

2．平塚遺跡第Ⅲ区全景（南東より）

図版 5

1．平塚遺跡第Ⅲ区第２号住居址遺物出土状態

2．平塚遺跡第Ⅲ区第２号土坑

図版 6

1．左口遺跡第Ⅰ－1区全景（東より）

2．左口遺跡第Ⅵ－1区全景（南西より）

図版 7

1．左口遺跡第Ⅵ－２区全景（北より）

2．左口遺跡第Ⅵ－３区全景（東より）

図版 8

1．左口遺跡第Ⅰ－1区垣状遺構

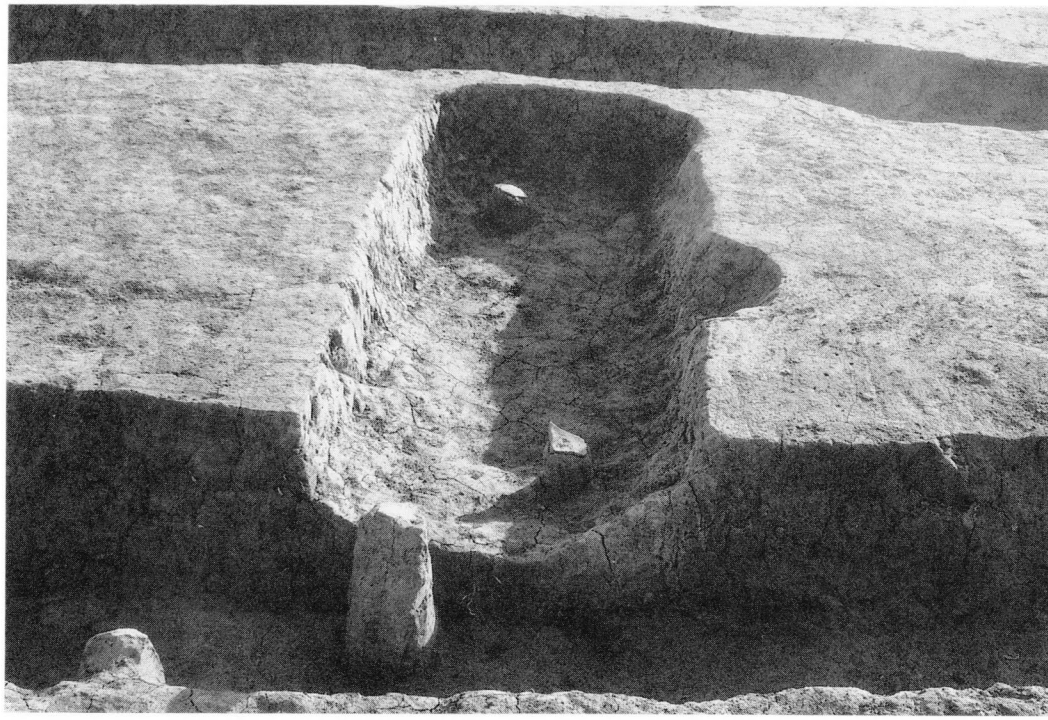
2．左口遺跡第Ⅰ－1区全景（西より）

図版 9

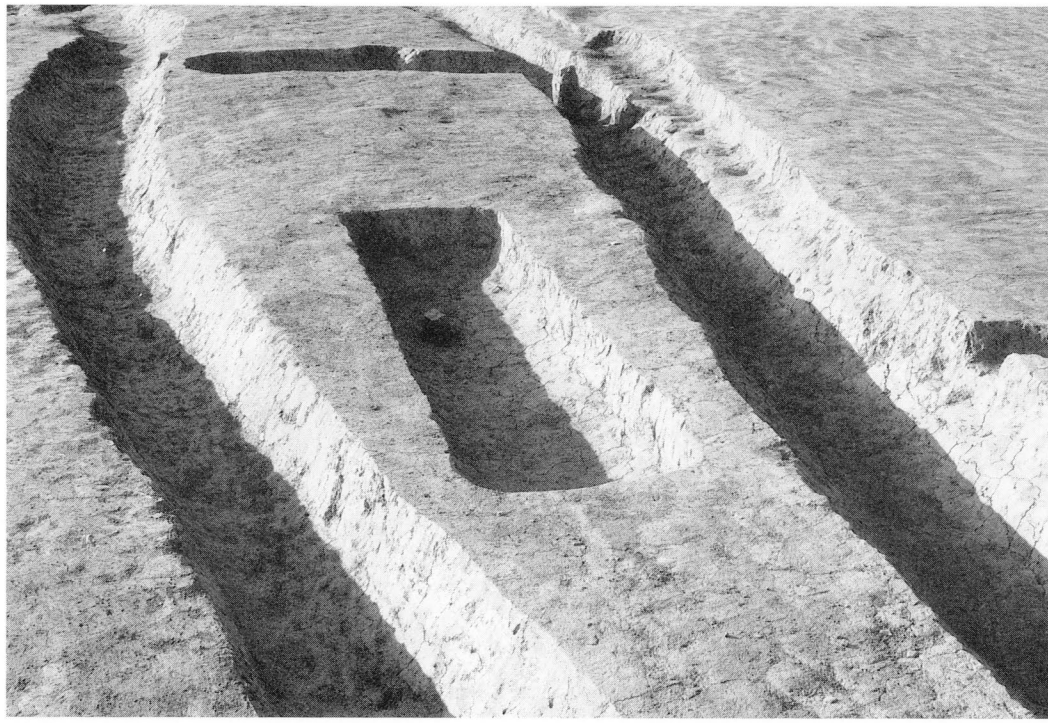
1．左口遺跡第Ⅰ－1区調査風景

2．左口遺跡第Ⅰ－1区調査風景

図版10



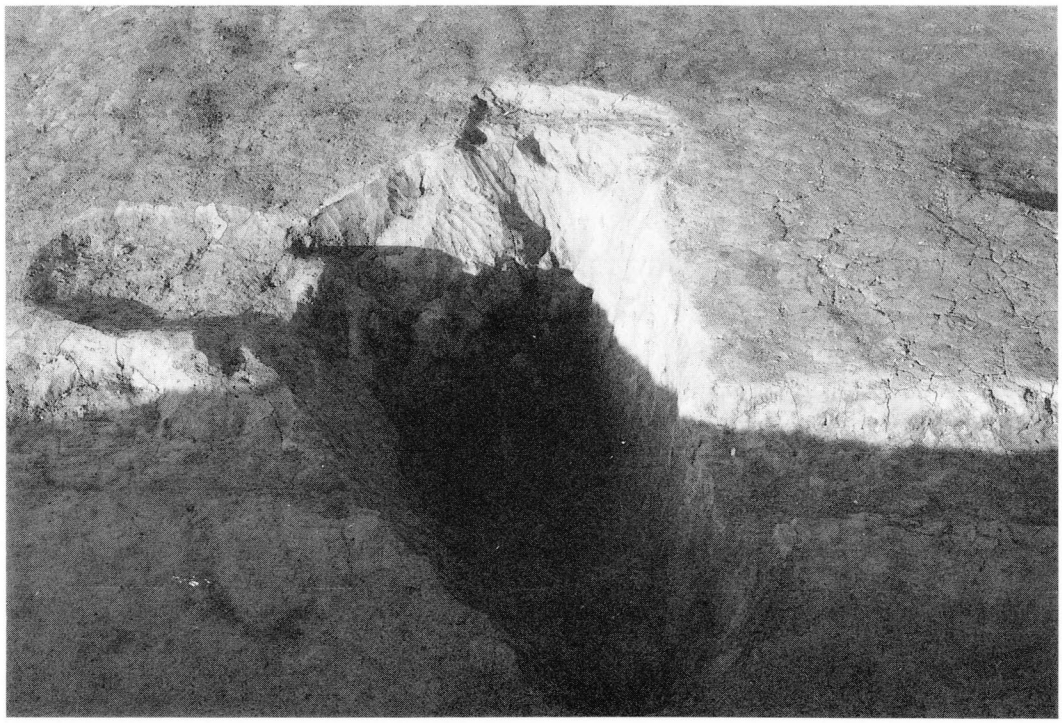
1．左口遺跡第Ⅵ－1区第9号土坑



2．左口遺跡第Ⅵ－1区第10号土坑

図版11

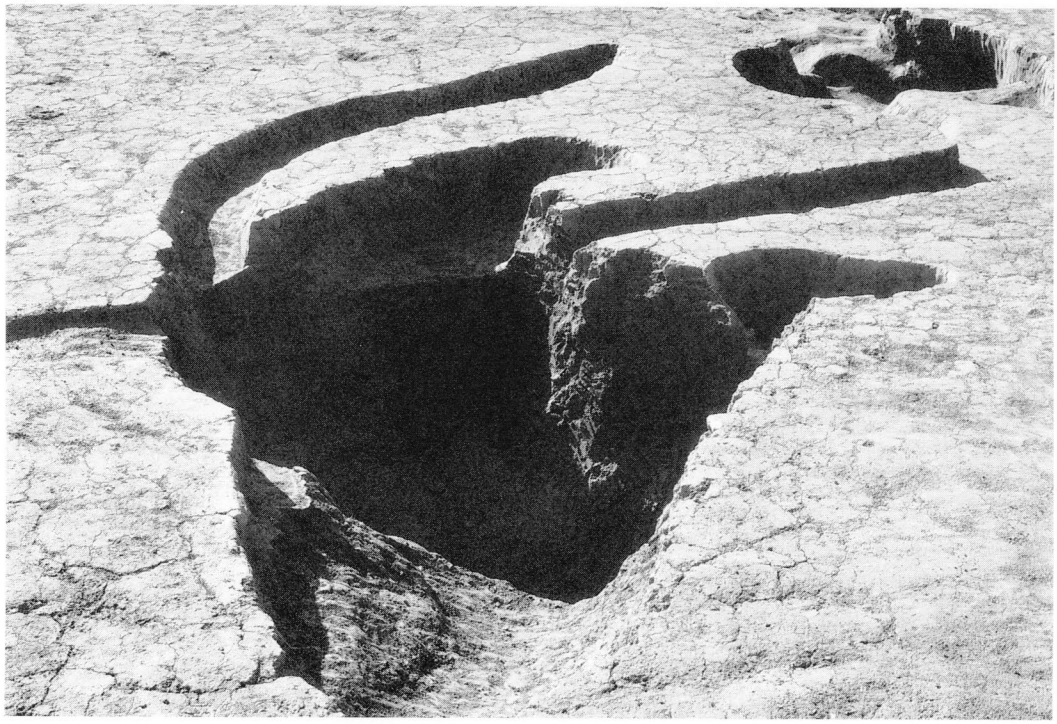
1．左口遺跡第Ⅵ－1区第12号土坑



2．左口遺跡第Ⅵ－1区第18号土坑

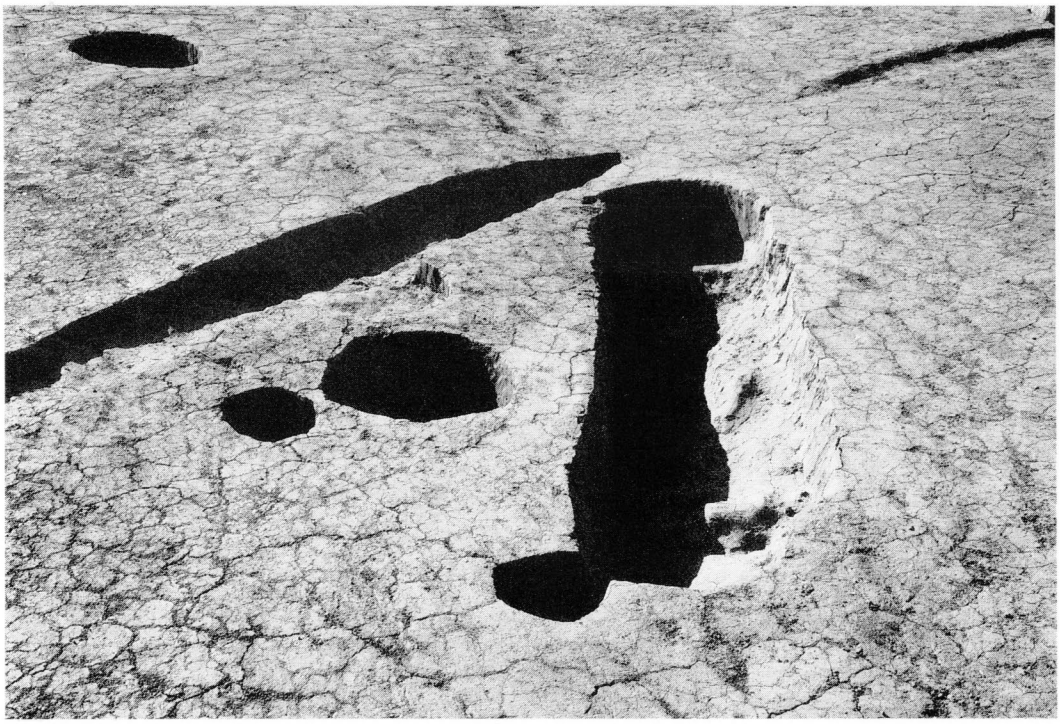
図版12

1．左口遺跡第Ⅵ－1区第19号土坑

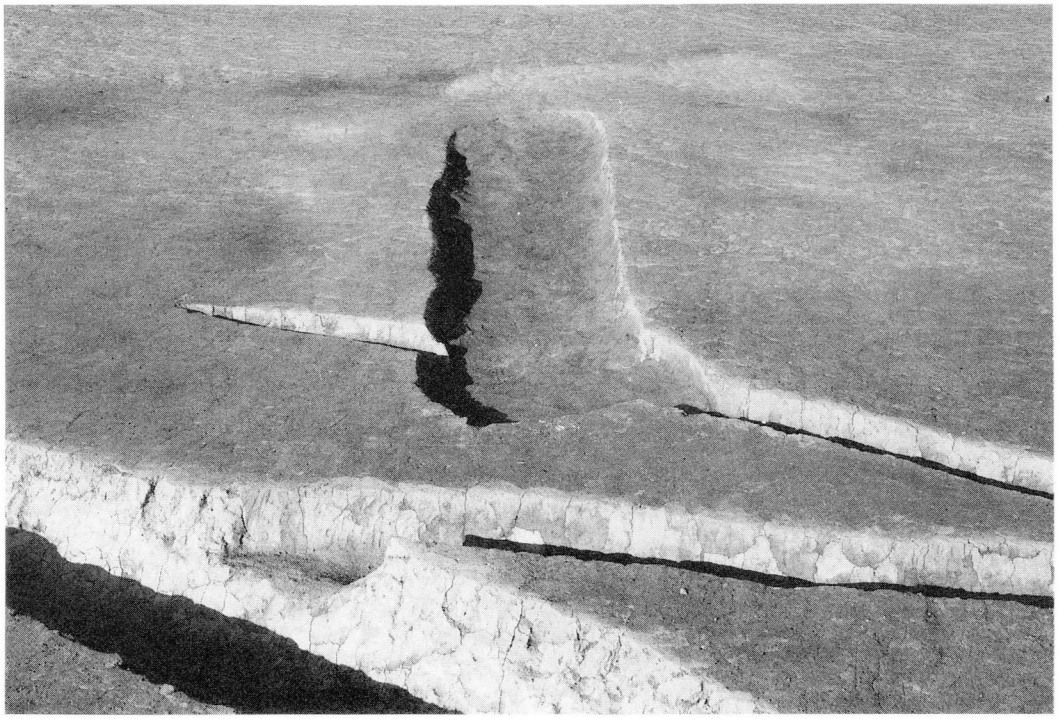


2．左口遺跡第Ⅵ－1区第20号土坑

図版13



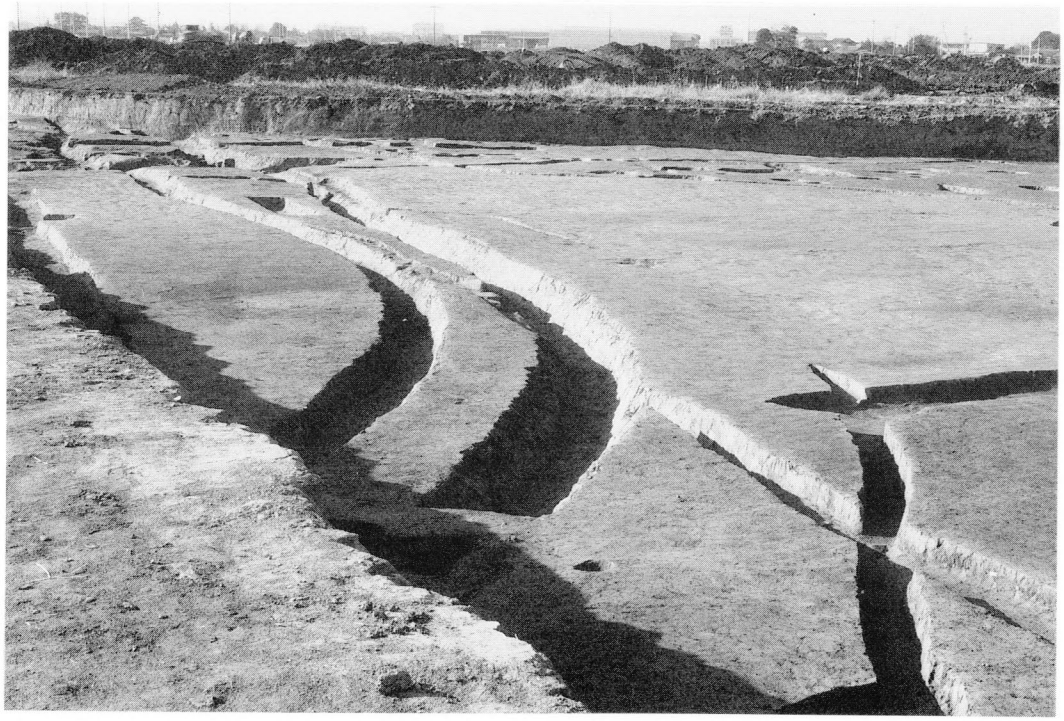
1．左口遺跡第Ⅵ－1区第21号土坑



2．左口遺跡第Ⅵ－1区第22号土坑

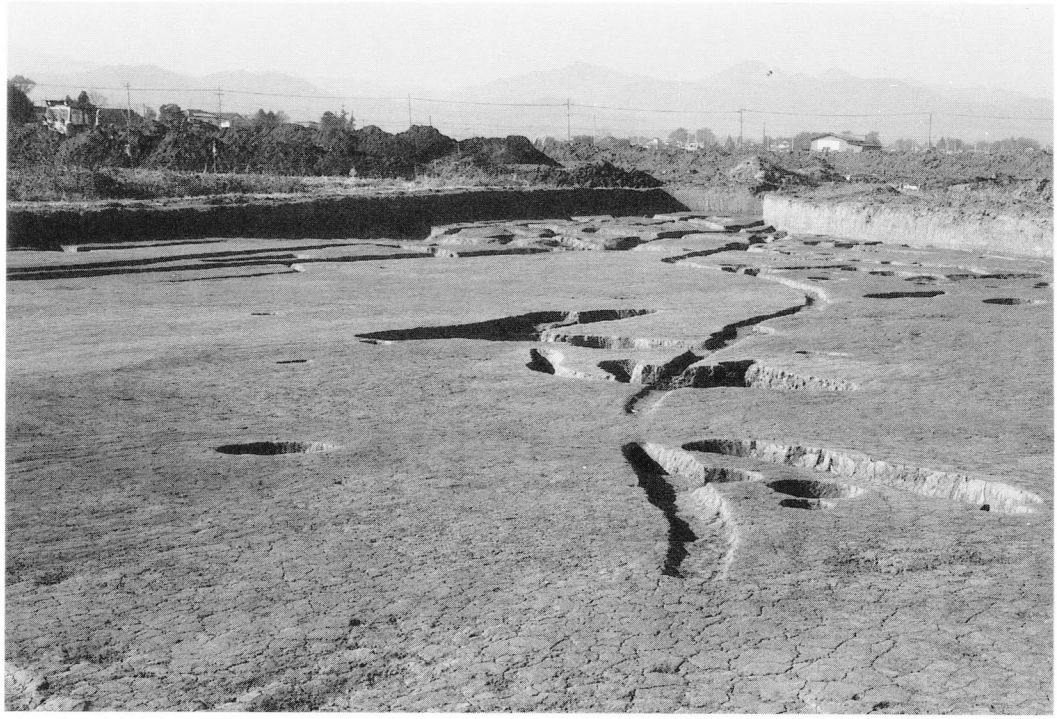
図版14

1．左口遺跡第Ⅵ－1区第1・2・3・4・5・6・7号溝



2．左口遺跡第Ⅵ－1区第3・6・15・17号溝

図版15

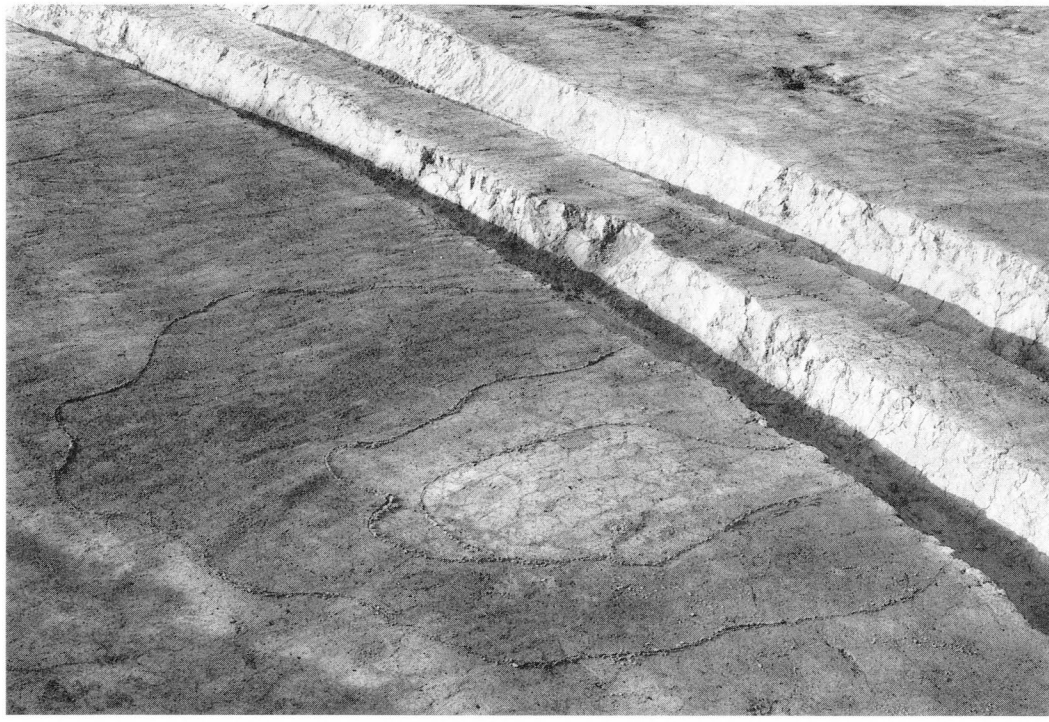


1．左口遺跡第Ⅵ－1区第5号溝

2．左口遺跡第Ⅵ－1区第4・5・6号溝

図版16

1．左口遺跡第Ⅵ－１区鍛冶状遺構（西より）



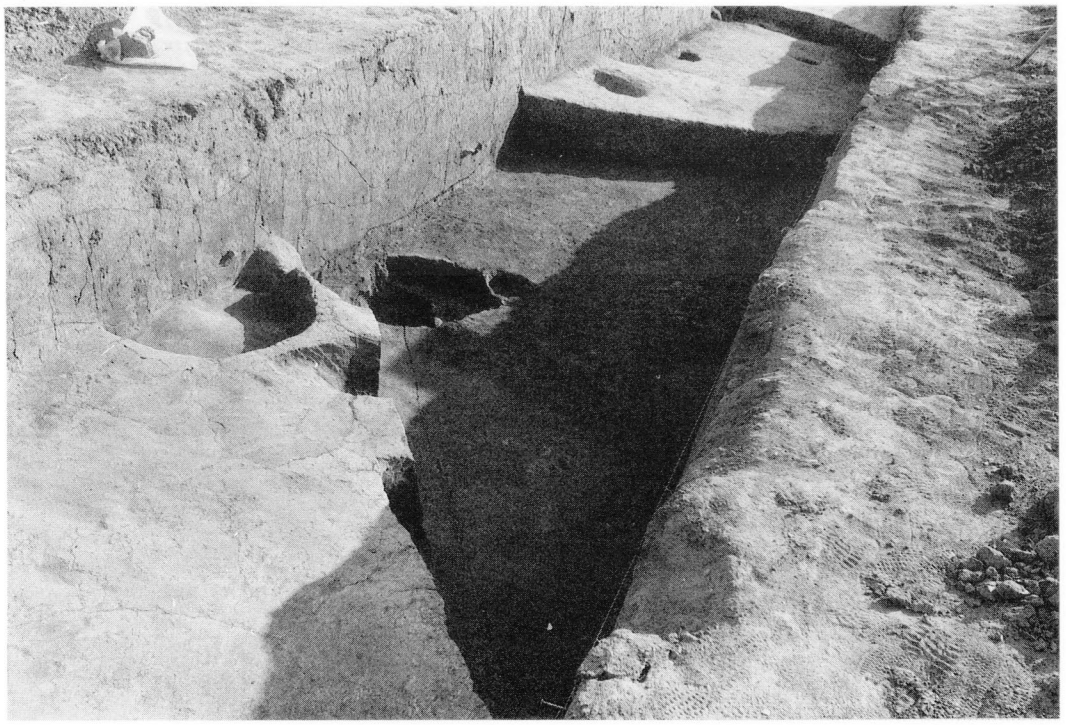
2．左口遺跡第Ⅵ－１区土層稔転址

図版17

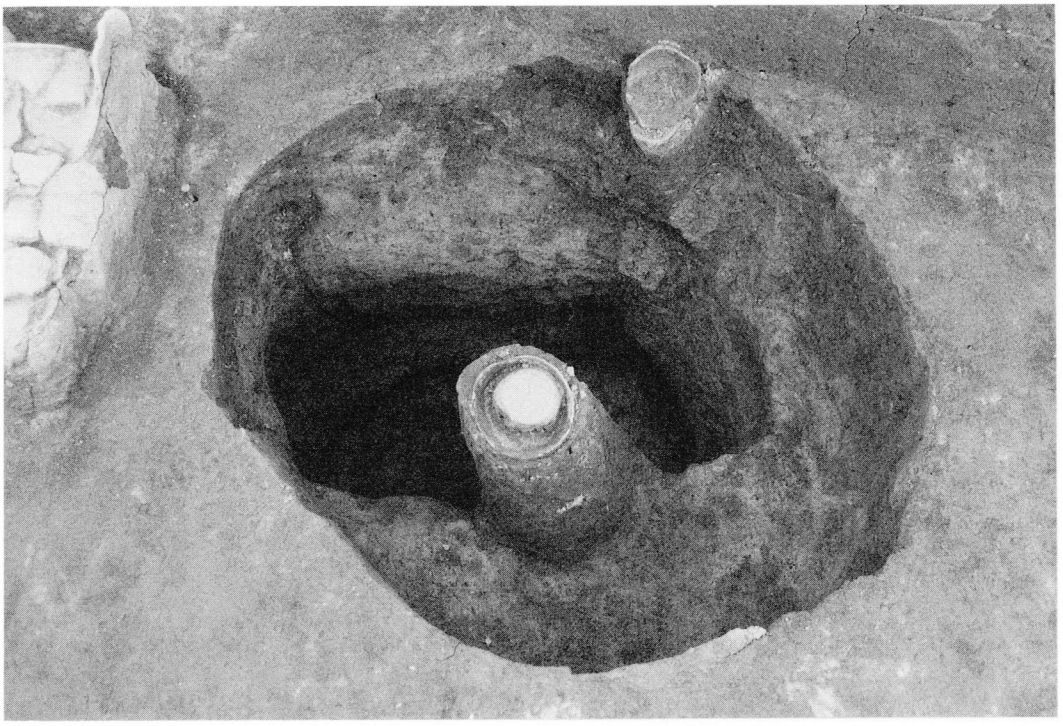
1．左口遺跡第Ⅵ－1区調査風景（南より）

2．左口遺跡第Ⅵ－1区調査風景（西より）

図版18

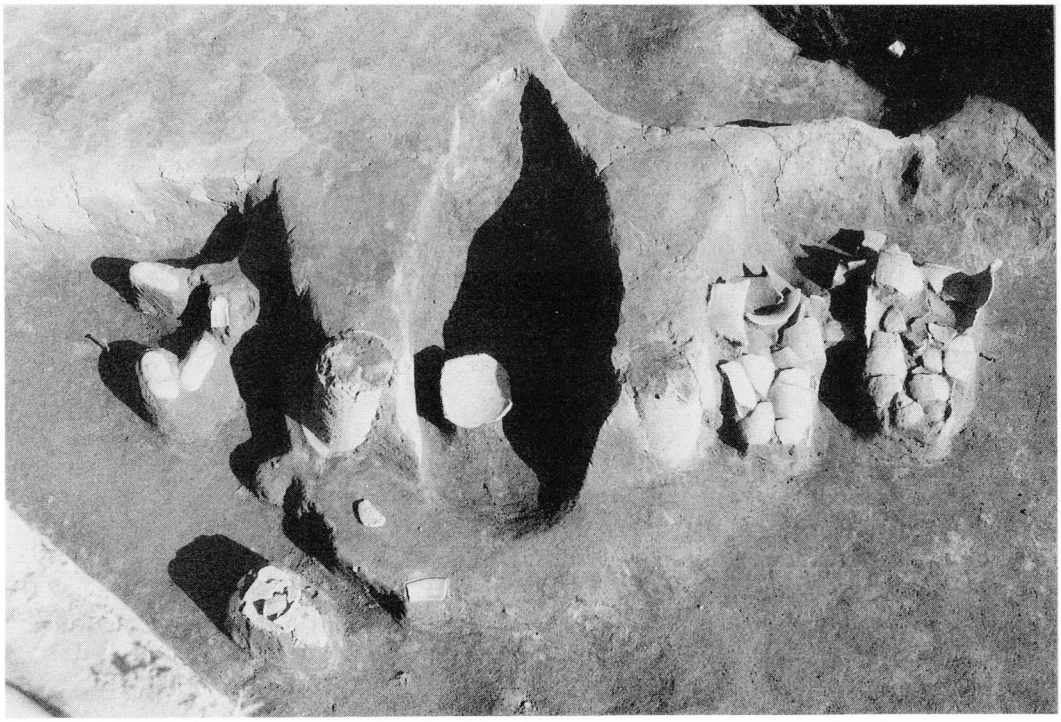


1．左口遺跡第Ⅷ－1区第1a・b号住居址



2．左口遺跡第Ⅷ－1区第1a号住居址貯蔵穴

図版19



1．左口遺跡第Ⅷ－1区第1a号住居址カマド遺物出土状態

2．左口遺跡第Ⅷ－1区第1a号住居址遺物出土状態

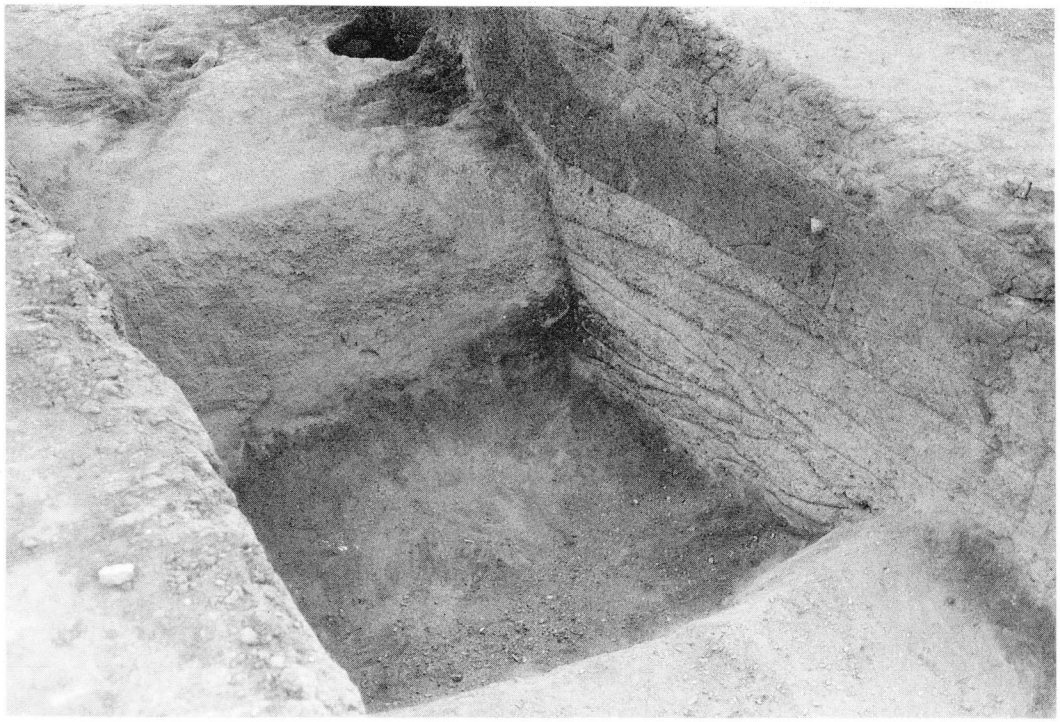
図版20

1．左口遺跡第Ⅷ－1区第2号住居址

2．左口遺跡第Ⅷ－1区第1号土坑

図版21

1．左口遺跡第Ⅷ－1区第1号溝



2．左口遺跡第Ⅷ－1区第2号溝

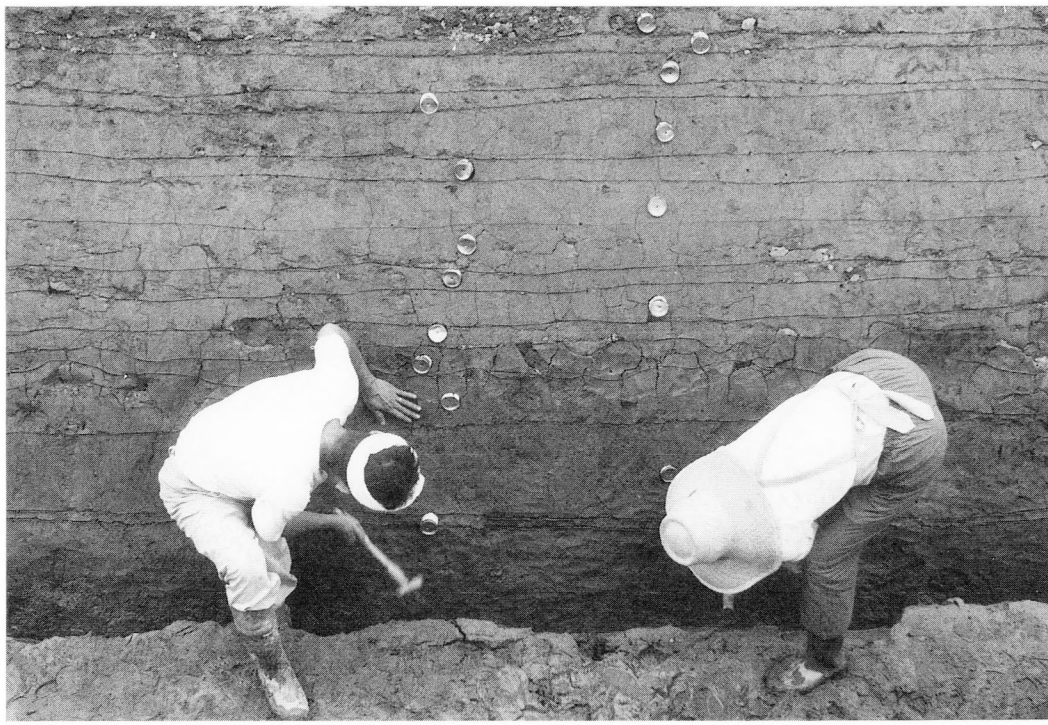
図版22

1．左口遺跡第Ⅷ－２区第２号溝

2．左口遺跡第Ⅷ－２区第３号溝

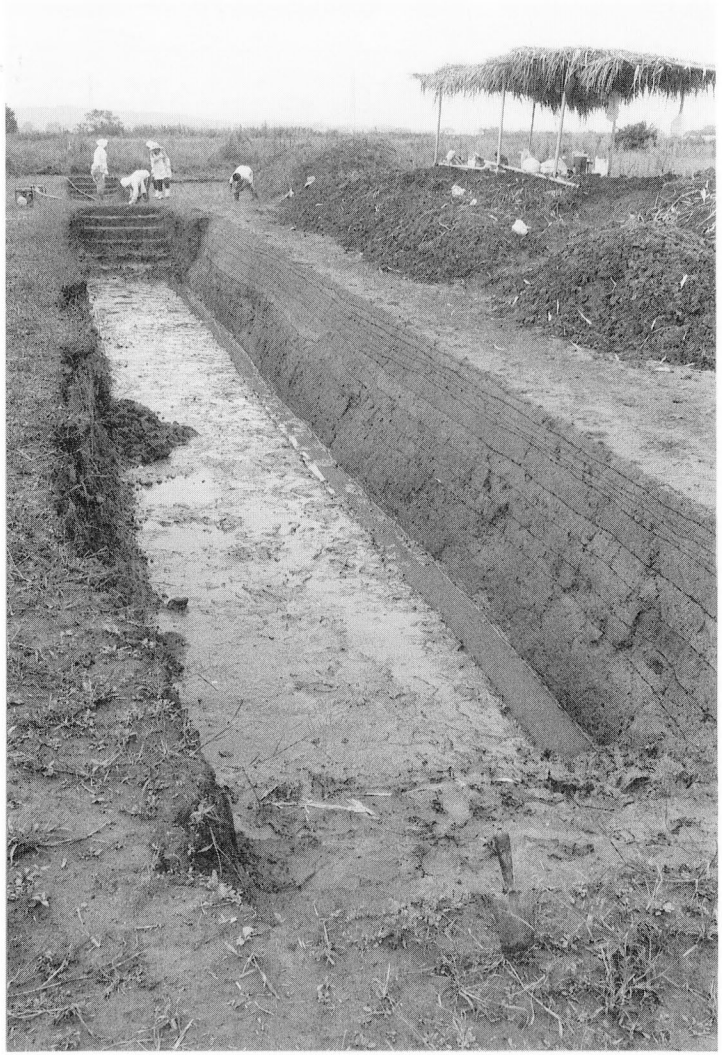
図版23

1．左口遺跡第II区全景（東より）



2．左口遺跡第II－1区土層サンプル採取作業

1．児玉条里遺跡第Ⅲ区全景（西より）



2．児玉条里遺跡第Ⅲ—2区土層堆積状態

図版25

1．児玉条里遺跡第Ⅳ－２区土層堆積状態

2．児玉条里遺跡第Ⅳ区（西より）

図版26

1．児玉条里遺跡第Ⅴ区（南より）

2．児玉条里遺跡第Ⅴ－1区（北より）

図版27

1．児玉条里遺跡第Ⅶ区全景（東より）

2．児玉条里遺跡第Ⅶ－1・2区全景（東より）

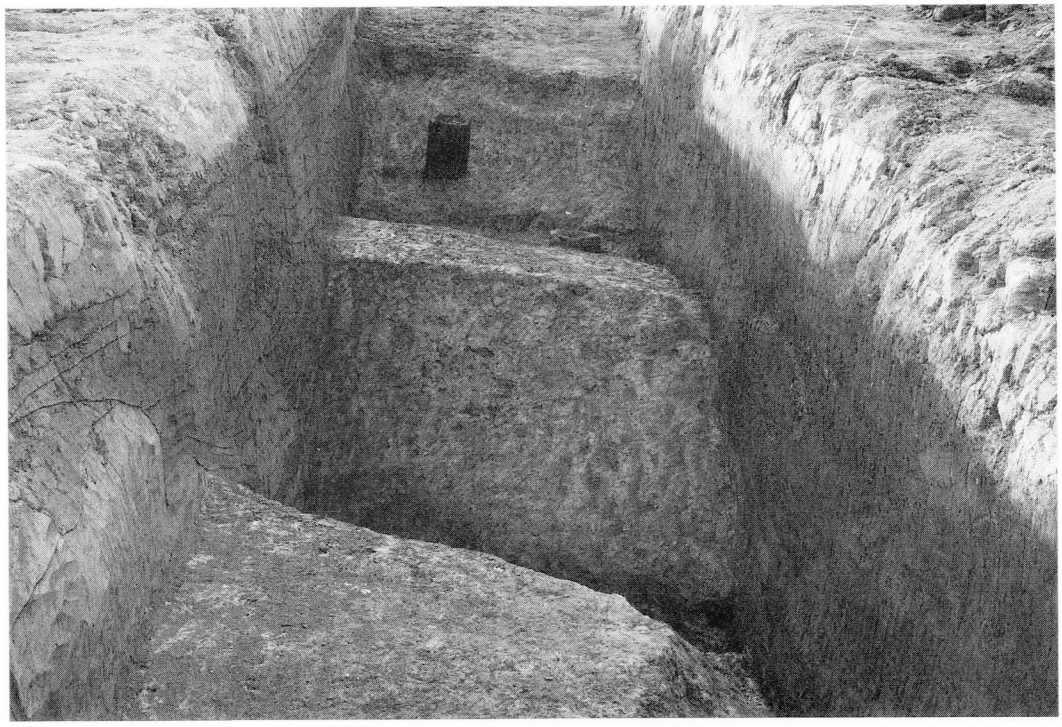
図版28

1．児玉条里遺跡第Ⅶ－3区

2．児玉条里遺跡第Ⅶ－4区

図版29

1．児玉条里遺跡第Ⅶ－3区土坑



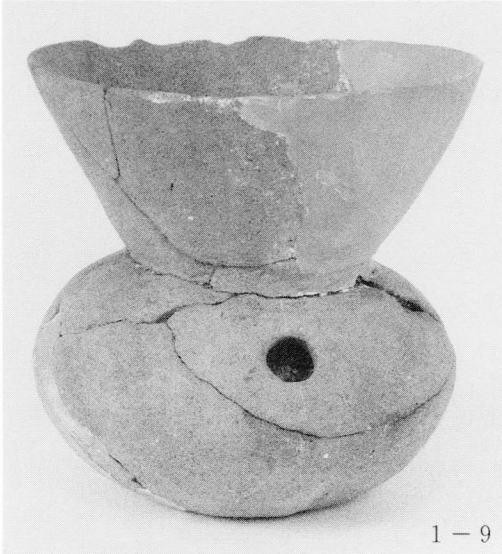
2．児玉条里遺跡第Ⅶ－4区第1・2号溝

図版30

1．児玉条里遺跡第Ⅶ－4区第1号溝

2．児玉条里遺跡第Ⅶ－4区第2号溝

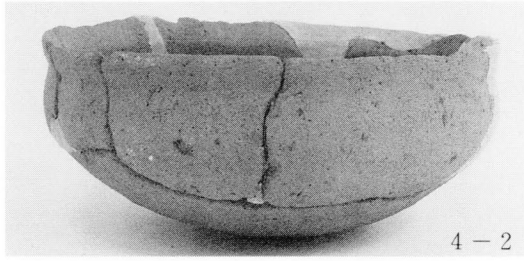
図版31


1－9

2－3

1－8

4－1


4－2

4－3

SK4－1

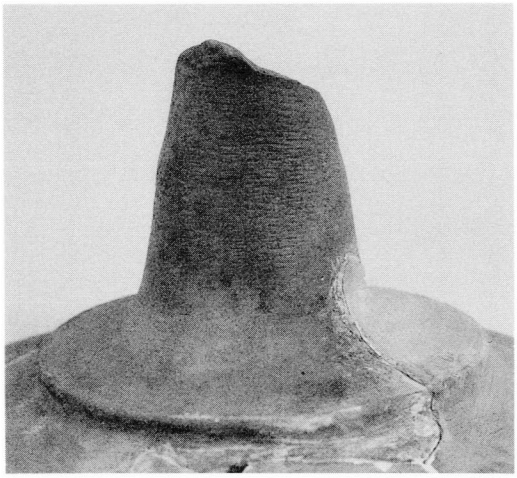
平塚遺跡住居址・土坑出土遺物

図版32

東谷－1

東谷－2

東谷－27



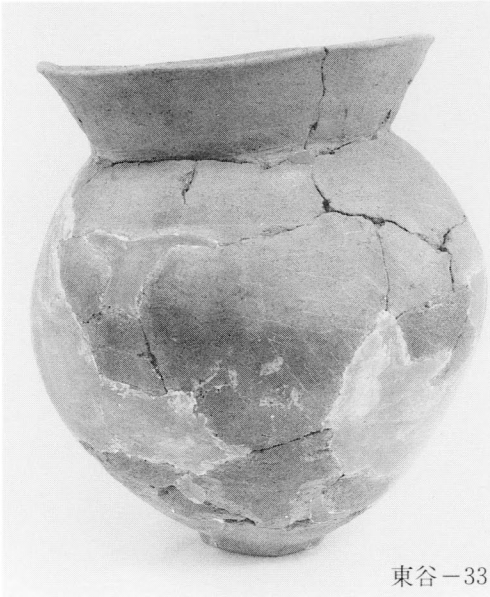
東谷－11

東谷－28

東谷－17

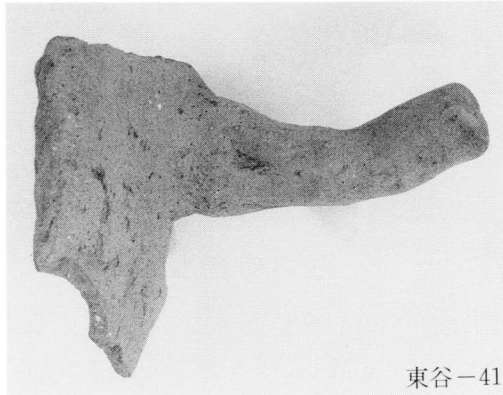
平塚遺跡埋没谷出土遺物(1)

図版33


東谷－33

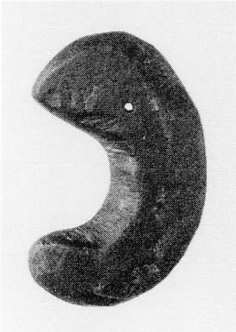
東谷－37

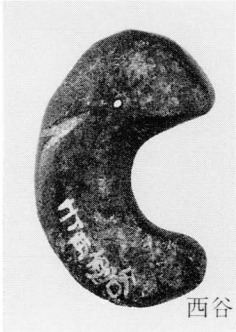
東谷－40

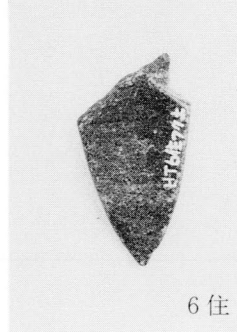

東谷－41

東谷－11

西谷－1




西谷

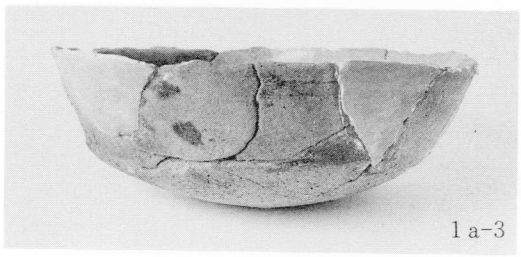

6 住

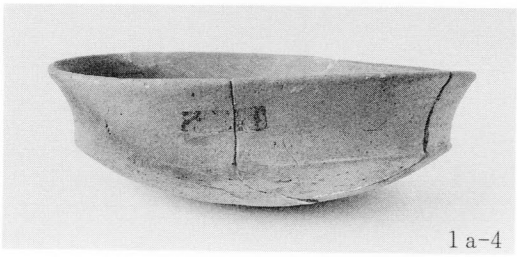
平塚遺跡埋没谷出土遺物(2)・石製模造品

図版34

1a-1

1a-2


1a-3


1a-4

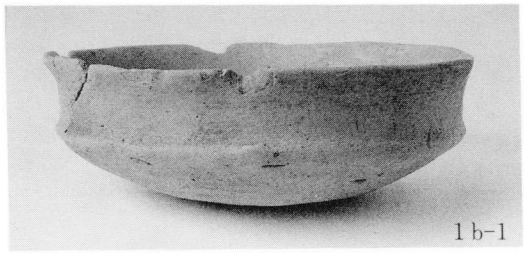
1a-5

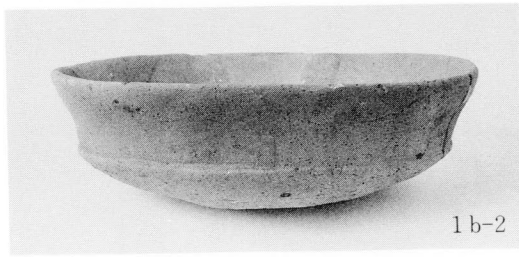
1a-6

1a-7

左口遺跡第Ⅷ－１区　第１a号住居址出土遺物

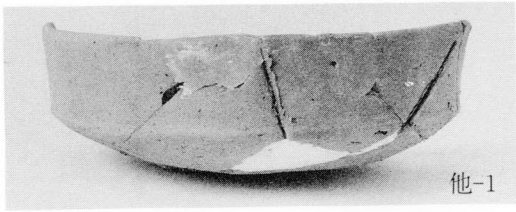
図版35


1b-1

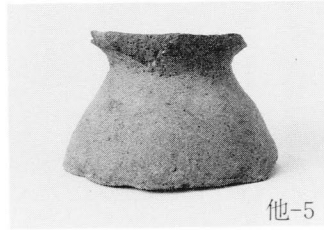

1b-2

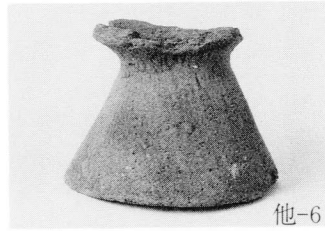
1b-4

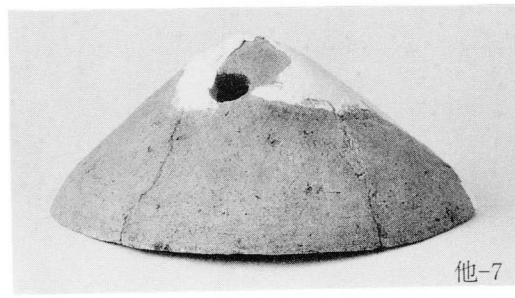
1b-5

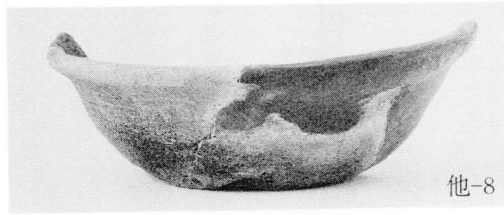

他-1

他-2


他-5


他-6


他-7


他-8

他-9

左口遺跡第Ⅷ－１区　第１b号住居址・その他の出土遺物

報告書抄録

フリガナ	ヒラツカ・サグチ・コダマジョウリイセキ		
書名	平塚・左口・児玉条里遺跡		
副書名	町内遺跡発掘調査に伴う発掘調査報告書	巻次	11
シリーズ	児玉町文化財調査報告書	巻次	第16集
編著者	徳山 寿樹		
編集機関	児玉町教育委員会		
所在地	〒367-02 埼玉県児玉郡児玉町大字八幡山368 TEL 0495—72—1331		
発行日	1994(平成6)年3月31日		

フリガナ 所収遺跡	フリガナ 所在地	コード 市町村	コード 遺跡	北緯 (°′″)	東経 (°′″)	調査期間	調査面積 (m²)	調査原因
ヒラツカイセキ 平塚遺跡	コダマグンコダママチオオアザ 児玉郡児玉町大字 シモマシモアザヒラツカ 下真下字平塚他	113824	024	36°12′41″	139°12′41″	19870731 ～ 19880303	1,400	県営 圃場整備
サグチイセキ 左口遺跡	コダマグンコダママチオオアザ 児玉郡児玉町大字 ヒルガワアザサグチ 蛭川字左口他	113824	020	36°12′34″	139° 9′ 6″	19881003 ～ 19890117	2,100	県営 圃場整備
コダマジョウリイセキ 児玉条里遺跡	コダマグンコダママチオオアザ 児玉郡児玉町大字 シモマシモアザクボタ 下真下字久保田他	113824	285	36°12′41″	139° 9′ 2″	19880627 ～ 19881004	1,700	県営 圃場整備

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
平塚遺跡	集落	縄文中期	土坑	土器・石器	
		古墳中期	竪穴住居7 土坑 垣状遺構1	土器	
		中世	竪穴状遺構1		
左口遺跡	集落	古墳	竪穴住居3 垣状遺構2 方形周溝墓1	土器	
		平安	竪穴住居1	土器	
		古墳～近世	竪穴住居3 溝39 土坑51 鍛冶状遺構1		
児玉条里遺跡	条里	古墳～近世	溝7 土坑		

児玉町文化財調査報告書第16集

平塚・左口・児玉条里遺跡

町内遺跡発掘調査に伴う発掘調査報告書

平成６年３月22日印刷

平成６年３月31日発行

発行者　児玉町教育委員会

埼玉県児玉郡児玉町大字八幡山368

印刷所　たつみ印刷株式会社

埼玉県深谷市東大沼356